Ⅴ　教員の研究・調査活動

【凡例】

●基礎情報

①氏名（family name，first name）②所属・職名・役職・併任　③生年（任意）　④学歴・職歴　⑤最終学位
⑥専門分野　⑦主な研究テーマ　⑧所属学会　⑨研究目的・研究状況・メールアドレス（任意）

●主要業績（研究者になってこれまで行ってきた自身の研究の代表的なもの）

・著書（単著・共著・編著・監修）
・論文
・調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
・展示図録・資料図録・映像・ＤＢ
・学会・外部研究会発表
・総研大リーフレット
・その他

●2021年度の研究教育活動（成果を出す以前の研究・調査途中のものも含む）

一　研究業績（公開，発表，刊行済みのもの）

1　著書（単著・共著・編著・監修）
2　論文（査読あり，なしを明記）
3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
4　展示図録・資料図録・映像・ＤＢ・デジタル・コンテンツ開発
5　学会・外部研究会発表
6　総研大リーフレット
7　その他（『REKIHAKU』，友の会ニュース，『本郷』など）

二　主な研究教育活動（共同研究，調査，展示，教育等）

1　主な共同研究等参加状況（歴博や機構の運営交付金による共同・連携研究）
　①　歴博（基幹・基盤・開発型，国内交流事業）
　②　他の機関
　③　機構（基幹研究プロジェクト）
2　外部資金による研究（科学研究費などの外部資金，各種補助金による研究，企業・自体体による研究）
3　国際交流事業（国際交流協定にもとづく事業，国際シンポジウム・集会など）
4　主な展示・資料活動（展示・資料・ＤＢなど）
5　教育（総研大シンポ，大学院セミナー担当，大学非常勤講師，学位審査の主査・副査・委員，博物館活動，教育プログラムなど）

三　社会活動等

1　館外における各種委員（学会，学術会議，文化庁・学振・自治体審議委員など）
2　講演・カルチャーセンターなど（友の会も含む）
3　マスコミ（テレビ，ラジオ，新聞，雑誌など）
4　社会連携（国内）
　①　刊行物（自治体など地方公共団体刊行のもの：市史，発掘調査報告書など）
　②　共同研究（自治体からの委託研究や産業界との共同研究）
　③　講演会・シンポジウム（自治体など地方公共団体主催のもの）
　④　デジタル・コンテンツ開発（自治体の経費で開発したもの）
5　国際連携（日本国内で行われたものも含む）
　①　JICA
　②　国際交流基金
　③　その他

四　活動報告

1　受賞歴

2　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの

3　研究・調査プロジェクト報告

4　その他（研究の目的，意義など）＊任意

西谷　大　NISHITANI Masaru　館長（2020.4～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2012～），生年：1959

【学歴】熊本大学文学部史学科（1984年卒業），熊本大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了（1986年単位取得退学），中華人民共和国天津師範大学普通進修生修了（1987年），中華人民共和国中山大学人類学系高級進修生修了（1989年）【職歴】国立歴史民俗博物館考古研究部助手（1989），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2012），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2012），博物館資源センター長併任（2013～2015），副館長併任（2017～2019）
【学位】文学修士（熊本大学）（1986年取得），文学博士（総合研究大学院大学）（2008年取得）
【専門分野】東アジア人類史【主な研究テーマ】東アジアの生業に関わる歴史　日本の地域研究（人と自然の関係史）
【所属学会】中国考古学会，東南アジア考古学会【研究目的・研究状況・メールアドレス】東アジアにおける生業の歴史を主な研究目的とする。中国海南省のリー族，中国雲南省紅河州の者米谷でフィールド調査を行ってきた。近年は，千葉県房総丘陵地域で，近世から現代までの人と自然の関係史を，様々な分野の研究者と共同でフィールド調査を行っている。

●主要業績

1．【編著】「［共同研究］東アジアにおける多用な自然利用―水田農耕民と焼畑農耕民」『国立歴史民俗博物館研究報告』第164集，国立歴史民俗博物館，A４版，177頁，2011年３月
2．【単著】『多民族の住む谷間の民族誌―生業と市からみた環境利用と市場メカニズムの生起』角川学芸出版，A５版，335頁，2011年９月
3．【論文】Nishitani Masaru and Nathan Badenoch「Why Periodic Markets Are Held：Considering Products, People, and Place in the Yunnan-Vietnam Border Area」Vol 2. No 1. of Southeast Asian Studies, pp.171-192，Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2013年４月（査読有）
4．【論文】西谷 大・島立理子・大久保悟「共同研究［日本の中山間地域における人と自然の文化誌］中間報告―二号穴からみた水利用―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集，pp.295-309，国立歴史民俗博物館，2014年３月（査読有）
5．【論文】西谷 大「豚便所―飼養形態からみた豚文化の特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第90集，pp.79-149，国立歴史民俗博物館，2001年３月（査読有）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

7　その他
「リレーインタビュー 考古学から東アジア人類史へ」『季刊誌 Yaponesian』3-はる，p.3，新学術領域研究ヤポネシアゲノム 領域事務局，2021年５月20日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
機関拠点型基幹研究「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」，2016年度～2021年度
③　機構
広領域連携型基幹研究プロジェクト「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」民博ユニット「文明社会における食の布置」（代表：野林 厚志）

三　社会活動等

1　館外における各種委員
日本遺産北総四都市江戸紀行活用協議会 委員，公益財団法人佐倉国際交流基金 評議員，公益財団法人味の素食の文化センター 評議員，大和郡山市 水木十五堂賞選考委員会委員，千葉県教育委員会 スーパーサイエンス

ハイスクール（千葉県立佐倉高等学校）運営指導協議員，日本郵便株式会社 郵便切手アドバイザリー・グループ委員

3　マスコミ

「寄稿 年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」『Alma Mater白陵』No.41，p.4，白陵会，2022年３月

4　社会連携

③　講演会・シンポジウム

文化講演会「「フィールドで考えたこと」―日本から中国への軌跡―」学校法人三木学園 白陵中学・高等学校，2021年11月20日

令和３年度佐倉市民カレッジ「これからの博物館で必要なこと・歴博を楽しむ」佐倉市立中央公民館，2021年12月17日

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

今年度もコロナ禍により千葉県勝浦市の定期市を中心に出店者への聞き取り，店先に並ぶ品物の記録・収集ならびに調査データの作成を行った。また，11月には秋田県の五城目朝市での調査を行い，生活文化の地域性，多様性を比較検討する機会を持つことができた。

[研究部]（50音順）

青木　隆浩　AOKI Takahiro　准教授（2008.10～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2010～）

【学歴】法政大学文学部地理学科（1993年卒業），明治大学大学院文学研究科地理学専攻博士前期課程（1996年修了），東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士後期課程（2000年修了）

【職歴】国立歴史民俗博物館民俗研究部助手（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2008），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2010）

【学位】学術博士（東京大学）（2000年取得）【専門分野】地理学，民俗学，産業史【主な研究テーマ】酒造業，化粧品・トイレタリー産業，商家経営，社会規範【所属学会】日本民俗学会，社会経済史学会，経営史学会，日本地理学会，東京地学協会，人文地理学会，歴史地理学会，酒史学会【研究目的・研究状況】主要な関心は，近現代の清酒製造業を事例として，中小零細企業の多い伝統的な産業が長く経営を維持してきた要因を，商家の組織や，技術継承の方法，組合や品評会，戦時統制などの政策の影響といった複合的な要因から明らかにすることである。また，近代の禁酒運動や未成年者喫煙禁止法をおもな対象として，社会規範の形成過程を追いかけている。他にも，近年は観光化を目的とした景観保護が，地域の生活や文化にどのような影響を与えているか，近代以降に人々の衛生観や美容観がどのように変化したかといった研究テーマに取り組んでいる。

●主要業績

1．【著書】青木隆浩『近代酒造業の地域的展開』276頁，吉川弘文館，2003年12月
2．【編著】国立歴史民俗博物館＋青木隆浩編『地域開発と文化資源』185頁，岩田書院，2013年３月
3．【編著】国立歴史民俗博物館＋青木隆浩編『人と植物の文化史』180頁，古今書院，2017年３月
4．【研究報告特集号】青木隆浩編著『地域開発における文化の保存と利用』国立歴史民俗博物館研究報告第193集，303頁，2015年２月
5．【展示図録】青木隆浩編著『身体をめぐる商品史』国立歴史民俗博物館平成28年度企画展示図録，125頁，2016年12月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

7　その他

「くらしの植物苑特別企画『伝統の桜草』について」『国立歴史民俗博物館友の会ニュース』214，国立歴史民俗博物館振興会，pp.3-4，2021年
「くらしの植物苑特別企画「伝統の古典菊」について」『国立歴史民俗博物館友の会ニュース』217，国立歴史民俗博物館振興会，p.3，2021年10月5日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基幹研究「近代日本における産業・労働の展開とジェンダー」（研究代表者：横山百合子），2019～2021年度
基盤研究「歴博研究映像の制作・保存・活用―苧麻文化の映像記録化を中心に」（研究代表者：春日聡），2019～2021年度
基盤研究「日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築」（研究代表者：青木隆浩），2020～2022年度

2　外部資金による研究

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「醸造業による農村工業化と和食文化の形成に関する地域比較研究」（研究代表者：井奥成彦），2017～2022年度

4　主な展示・資料活動

くらしの植物苑　特別企画「季節の伝統植物」展示プロジェクト代表
総合展示第５・６展示室リニューアル展示プロジェクト委員

三　社会活動等

1　館外における各種委員

歴史地理学会評議員
歴史地理学会編集委員

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

第４展示室「理想の身体」を展示替えするため，化粧品・トイレタリー産業の研究を継続的におこなった。また，来年度の科研申請に向けて，近代の修学旅行に関する資料の収集と整理をおこなった。酒造業については，来年度論文を書く必要があるので，文献や資料の再確認をおこなった。

荒木　和憲　ARAKI Kazunori　准教授（2015.7～）

生年：1978

【学歴】九州大学文学部史学科日本史学専攻（2001年卒業），九州大学大学院人文科学府歴史空間論専攻日本史学専修修士課程（2003年修了），九州大学大学院人文科学府歴史空間論専攻日本史学専修博士後期課程（2006年修了）
【職歴】独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館学芸部研究員（2008），文化庁文化財部美術学芸課文部科学技官（2009），独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館学芸部研究員（2012），同主任研究員（2013），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2015.7～）
【学位】博士（文学，九州大学）（2006年取得）【専門分野】日本中世史・東アジア交流史【主な研究テーマ】中世日本と東アジアとの交流史，日朝交流史【所属学会】史学会，九州史学研究会，韓日関係史学会【研究目的・研究状況】https://researchmap.jp/araki-k

●主要業績

1．【著書】荒木和憲『中世対馬宗氏領国と朝鮮』山川出版社，329頁，2007年
2．【著書】荒木和憲『対馬宗氏の中世史』吉川弘文館，289頁，2017年
3．【論文】荒木和憲「中世日朝通交貿易の基本構造をめぐって」『朝鮮史研究会論文集』51，pp.79-109，2013年
4．【論文】荒木和憲「中世前期の対馬と貿易陶磁」（『貿易陶磁研究』37，pp.3-26，2017年
5．【論文】荒木和憲「己酉約条の締結・施行過程と対馬の「藩営」貿易」韓日文化交流基金編『壬辰倭乱から朝

鮮通信使の道へ』韓国・景仁文化社，pp.107-142，2019年

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

2　論文

「室町期北部九州政治史の展開と特質」『日本史研究』712，pp.3-25，2021年12月20日（査読有）

「朝鮮初期における陶磁器の生産と貢納・流通」田中大喜編『中世武家領主の世界』，勉誠出版，pp.260-300，2021年８月20日

3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など

渡辺美季・荒木和憲・辻大和・岡本真・須田牧子・林慶俊『明清中国関係文書の比較研究』東京大学史料編纂所研究成果報告書，115頁，2021年８月31日

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発

2021年度企画展示図録『中世武士団』，国立歴史民俗博物館，2022年３月15日

5　学会・外部研究会発表

「東アジア公文書の押印方法をめぐって」明清史合宿（オンライン），2021年８月７日

「中世壱岐の国際的位置―海上交通の視点からみた―」九州史学会シンポジウム，2021年12月11日

7　その他

「仙台藩士青田家文書」『古文書研究』91，pp.143-146，日本古文書学会，勉誠出版，2021年６月

「中世の「唐船」と感染症」『REKIHAKU』４号，pp.23-25，国立歴史民俗博物館，2021年10月

「対馬宗氏の偽造印と日朝関係」『日本歴史』884，日本歴史学会，吉川弘文館，pp.28-35，2022年１月

「和解への道―「壬辰戦争」を終結に導いた論理―」『人文知 NEWS LETTER』1，2022年２月

「倭寇の盛衰と日麗・日朝関係」『歴史研究』698，pp.24-29，戎光祥出版，2022年３月

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基盤研究「日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築」（研究代表者：青木隆浩，2020～22年度，共同研究員）

②　他の機関

東京大学史料編纂所一般共同研究「中世におけるトカラ･奄美･琉球関係史料の学際的研究」（研究代表者：国立歴史民俗博物館 村木二郎，2021年度）

③　機構

機関拠点型基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」（研究代表者：西谷大，2016～2021年度，共同研究員）

ネットワーク型基幹研究プロジェクト「ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書の調査研究･活用」（研究代表者：国際日本文化研究センター クレインス・フレデリック，2016～2021年度，共同研究員）

2　外部資金による研究

基盤研究（A）「琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家」（研究代表者：村木二郎，2018～2021年度，研究分担者）

4　主な展示・資料活動

2021年度企画展示「中世武士団」展示プロジェクト副代表

館蔵中世古文書データベース（更新中）

5　教育

非常勤講師　九州大学大学院人文科学府・文学部

非常勤講師　立教大学文学部

学位審査（副査）　九州大学大学院地球社会統合科学府

講師「分野別演習B（歴史）」歴史民俗資料館等専門職員研修会，オンライン，2021年11月11日

三　社会活動等

1　館外における各種委員

九州史学研究会 編集委員（2012年度～）
福岡市史編集委員会中世専門部会 専門委員（2008年度～）
韓国・江原史学会 編集委員（2017年度～）
日本貿易陶磁研究会 世話人（2017年度～）

3　マスコミ
テレビ出演「ドキュメンタリー鄭起龍」韓国・安東MBC PLUS，2021年12月19日放送・配信

上野　祥史　UENO Yoshifumi　准教授（2009.10～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2010～）

【学歴】京都大学文学部史学科考古学専攻（1996年卒業），京都大学大学院文学研究科考古学専修修士課程（1999年修了），京都大学大学院文学研究科考古学専修博士後期課程（2000年中退）
【職歴】国立歴史民俗博物館考古研究部助手（2000），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2009），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2010）
【学位】文学修士（京都大学）（1999年取得）【専門分野】東アジア考古学【主な研究テーマ】漢三国六朝期の古代東アジア世界の展開Archaeological Study of Ancient East Asia【所属学会】史学研究会，考古学研究会，日本中国考古学会【研究目的・研究状況】漢三国六朝期，つまり弥生時代から古墳時代にかけての時期を対象に，東アジア世界各地の相互交渉を研究の目的の一つとしている。鏡や装身具などの金工具を検討し，価値・観念・製作技術という視点から，中国大陸と日本列島の社会動態を描き出すことに取組んでいる。

●主要業績

1．【共編著】『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集，総624頁，2012年
2．【編著】『祇園大塚山古墳と５世紀という時代』六一書房，総136頁，2013年
3．【編著】『古代東アジアにおける倭世界の実態』国立歴史民俗博物館研究報告第211集，総512頁，2018年
4．【編著】『東アジアと倭の眼でみた古墳時代』国立歴史民俗博物館研究叢７，総192頁，2020年
5．【編著】『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』六一書房，総274頁，2022年

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書
編著『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』274頁，六一書房，2022年３月

2　論文
「社会の変動と動物表象・造形の変化」『心とアートの人類史』松本直子編，雄山閣，pp.83-94，2022年３月
「金鈴塚古墳出土の遺物」編著『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』六一書房，pp.23-66，2022年３月（査読有）
「金鈴塚古墳と古墳時代後期の社会」編著『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』六一書房，pp.219-236，2022年３月（査読有）

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発
国立歴史民俗博物館　紹介映像（HP掲載，YouTube）
総合展示音声ガイドアプリ制作

5　学会・外部研究会発表
「朝鮮半島西南沿岸航路の相対的評価を求めて」歴博共同研究，オンライン，2021年４月25日
「弥生時代の金属器と古墳時代の金属器―「違い」を評価する視点―」歴博共同研究，オンライン，2021年６月６日
「鏡の分与・分配と器物の伝世について」科研基盤研究（B），オンライン，2021年８月21日
「封泥の所作と文字行為の復元」歴博共同研究，観峰館，2021年11月12日
「漢墓に副葬した「情報伝達」の所作」中國出土資料学會，オンライン，2021年12月４日

「『身体』でとらえた銅鐸の検討：考古学研究における視覚情報の相対化」科研新学術領域研究，オンライン，2022年１月８日
「金属器の制作と利用からみた生産の変革：画期の評価をめぐって」歴博共同研究（公開セミナー），オンライン，2022年２月23日
「『身体感覚』と銅鐸：考古学と心理学のコラボレーション／銅鐸をめぐる行為の復元と視覚情報の相対化」科研新学術領域研究，オンライン，2022年３月10日

7　その他
「同じ」なかに「違い」をみせる」『REKIHAKU』５号，国立歴史民俗博物館，pp.76-77，2022年２月26日
「金属器の制作と利用からみた生産の変革：画期の評価をめぐって」pp.95-101，公開セミナー資料，2022年２月23日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博
基盤研究「秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究」副代表（2021～2023年度）
基盤研究「近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属生産と社会」副代表（2019～2021年度）
基盤研究「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」副代表（2019～2021年度）

2　外部資金による研究
鹿島財団研究助成（「美術に関する調査研究」）「六朝装身具の復元研究」申請者（2021年度）
基盤研究（C）「高精細X線CTスキャナ活用を中心とする古代中国の封泥の作成方法に関する総合的研究」研究分担者（2021～2023年度）
基盤研究（B）「器物の「伝世・長期保有」・「復古再生」の実証的研究と倭における王権の形成・維持」研究分担者（2019～2022年度）
新学術領域研究（研究領域提案型）「心・身体・社会をつなぐアート／技術」研究分担者（2019～2023年度）

4　主な展示・資料活動
総合展示第１室「Ⅳ倭の登場」「Ⅴ倭の前方後円墳と東アジア」展示プロジェクト委員
企画展示「加耶―古代東アジアを生きた，ある王国の歴史―」展示副代表

5　教育
上智大学非常勤講師「東洋考古学」
女子美術大学非常勤講師「文化遺産学A・B」「比較文化論」「芸術文化ゼミⅡ」

三　社会活動等

1　館外における各種委員
日本考古学会監査・日本中国考古学会幹事・木更津市史編集部会員

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
中国における秦漢時代から三国両晋南北朝時代の出土資料を集成し，物質文化論的視点から中国古代・中世社会の構造を検討し，中国文物を通じて，朝鮮半島・日本列島との交流についての検討を進めた。中国での検討は，河南省・山東省を対象に空間分析を進めた。本年度の研究成果は，一部は『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』（六一書房，印刷中）等で公開し，各種論考を執筆し公開に向けて準備を進めている。

4　その他
今年度は，これまでの研究成果の情報発信に努めた。弥生時代から古墳時代への変革に対しては，共同研究「近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属生産と社会」にて，時代の画期を前提とした評価の相対化を目的とした報告をおこない，金属器の生産という視点では弥生と古墳の間に断層といえるほど大きな変革が見いだせないことを指摘した。古墳時代については，『金鈴塚と古墳時代社会の終焉』を編集するなかで，前方後円墳の築造終焉は各地で連動した斉一の現象でありながら，地域社会の運営主体内部での競覇的な動きがあることを指摘した。古墳時代社会から古代社会への変革が，円滑に順調に進行したのではなく，競争原理に支えられた側面があることを指摘した。いずれも，時代の変革を局面で評価したものである。

一方で，新学術領域科研では，『心とアートの人類史』所載論文やポスター発表において，弥生中期から古墳後期に至る長期の時間を射程に置き，造形と意識と行為の相互作用について検討を深めた。弥生から古墳府にかけての造形の変化，推移は，東アジア文化の受容と社会の複雑化という視点でとらえられることが多いが，ものと人とのかかわりを検討することで，「進化論」的視点での評価を相対化した。

東アジア国際環境については，共同研究「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」の報告において，３世紀以後の楽浪（朝鮮半島北部）周辺の交通状況に注目し，倭（日本列島）がアクセスした東アジア世界の実態について予察をおこなった。これは，先の研究課題での成果（研究報告第221集所載論文）を発展させ，東夷諸集団と中国との関係についての，検討の深化と位置付けている。

東アジアを主体的に扱う研究では，共同研究「秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究」において，文字を書く所作を文房具の相互関係からとらえ，文献史学や簡牘学（出土文字資料学）とも異なる視点で，行為の復元，行動形態の検討をおこなった。その一部は，中國出土資料学會にて，「漢墓に副葬した「情報伝達」の所作」と題した研究報告にて公開・発信している。

いずれも，行為・所作の復元とそこに投影された意識の相互作用に注目することは共通しており，それを時空を違えて複合的に検討したと認識している。

内田　順子　UCHIDA Junko　教授（2020.4～），博物館資源センター長（2021～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2020～）

【学歴】東京芸術大学音楽学部楽理科（1990年卒業），東京芸術大学大学院音楽研究科音楽学専攻（1993年修了，総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程（1997年修了）
【職歴】国際日本文化研究センター中核的研究機関研究員（1997），日本学術振興会特別研究員（1997），国立歴史民俗博物館民俗研究部助手（1999），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館民俗研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2009），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館民俗研究部教授（2020），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2020）
【学位】学術博士（総合研究大学院大学）（1997年取得）【専門分野】音楽学，民俗学【主な研究テーマ】音楽の伝承過程についての研究／資料批判に基づいた映像研究【所属学会】東洋音楽学会，日本音楽学会，沖縄文化協会，日本民俗学会【研究目的・研究状況】ある社会において神聖なものの位地に置かれている音楽の伝承過程や伝承方法を明らかにするため，宮古島をフィールドとして調査研究を継続している。また，歴史的な映像を資料批判的研究に基づいて再解釈することをとおして，映像の歴史資料としての可能性と限界を考察する研究を実施している。

●主要業績

1．【著書】
内田順子（編）・国立歴史民俗博物館（監修）『映し出されたアイヌ文化―英国人医師マンローの伝えた映像』160頁，吉川弘文館，2020年
『宮古島狩俣の神歌―その継承と創成―』思文閣出版，2000年

2．【論文】
「与えられたことば―宮古島狩俣における神歌の継承―」，斎藤英喜編『呪術の知とテクネー―世界と主体の変容―』，森話社，pp.107-136，2003年

3．【調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など】
『国立歴史民俗博物館研究報告』第168集（「マンローコレクション研究―写真・映画・文書を中心に―」），299頁，2011年

4．【展示図録・資料図録・映像・DB】
民俗研究映像「AINU Past and Present―マンローのフィルムから見えてくるもの」（ビデオ，102分，監督：内田順子・鈴木由紀，制作：内田順子・岡田一男），2007年

5．【その他】
「平成17年度 国立歴史民俗博物館 民俗研究映像『AINU Past and Present―マンローのフィルムから見えてく

るもの―』：映画フィルムの資料批判的研究に関連する研究ノート」，『国立歴史民俗博物館研究報告』150，国立歴史民俗博物館，pp.179-192，2009年

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

7　その他

「歴博映像フォーラム15『映画とアイヌ文化』開催にあたって」・「映画制作の主体とは―旧アイヌ民族博物館の記録映像制作をとおして」，歴博映像フォーラム15「映画とアイヌ文化」国立歴史民俗博物館，pp.2-5・pp.12-14，2021年5月15日

「市のたのしみ　第３回」『REKIHAKU』３号，国立歴史民俗博物館，pp.104-105，2021年６月26日

「宮古の歴史からみた音楽と芸能」『宮古・八重山・琉球の芸能』パンフレット，公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団，pp.6-8，2022年３月13日

「（演目解説）雨乞いのあぁぐ，トーガニアヤグ，なりやまあやぐ，中立ちぬミガガマ」『宮古・八重山・琉球の芸能』パンフレット，公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団，pp.9-17，2022年３月13日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

「映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究―制作とアーカイブスの実践的方法論の検討」（2021年度～2023年度）共同研究員

「定期市からみた地域の生活文化の歴史と多様性に関する研究」（2020年度～2022年度）研究副代表

「歴博研究映像の制作・保存・活用―苧麻文化の映像記録化を中心に」（2019年度～2021年度）研究副代表

②　他の機関

国立民族学博物館共同研究「民博所蔵東洋音楽学会資料に基づく日本民俗音楽の再構成と再活性化」（2021年10月～2024年３月）共同研究員

国立アイヌ民族博物館調査研究プロジェクト「近現代アイヌ民族史（誌）と博 物館展示をめぐる実証的研究」（2021年度）共同研究員

③　機構

機構基幹研究プロジェクト（広領域連携型基幹研究プロジェクト：日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築）「地域における歴史文化研究拠点の構築」（2016～2021年度）共同研究員

2　外部資金による研究

科研挑戦的研究（萌芽）「沖縄/日本/アメリカ，女/男の分断を超えた視点の構築―作曲家・金井喜久子を中心に」（2021～2023年度）研究代表者

科研基盤研究B「文化の主体的継承のための民俗誌の構築―マルチメディアの活用と協働作業を通じて」（2018～2022年度）研究分担者

4　主な展示・資料活動

総合展示第４室「『民俗』へのまなざし」展示プロジェクト委員

総合展示第５室「近代」展示プロジェクト委員

5　教育

國學院大学非常勤講師「映像文化論」

三　社会活動等

2　講演・カルチャーセンターなど

歴博映像フォーラム15「映画とアイヌ文化」国立歴史民俗博物館，2021年５月15日

「市場と人びと」第36回歴博映画の会，国立歴史民俗博物館，2021年７月10日

4　社会連携

③　講演会・シンポジウム

写真パネル展示「教えてください　勝浦と朝市のこと」（2021年７月15日～８月31日，於：かつうら商店，主催：一般社団法人勝浦市観光協会・国立歴史民俗博物館・千葉県立中央博物館）

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

今年度も，新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から，予定していた北海道での調査は実施できなかった。2021年５月15日（土）に，コロナ禍により延期となっていた歴博映像フォーラム15「映画とアイヌ文化」を開催し，関連する映像資料を対象としてアイヌ関係の映画についての研究成果を発信した。また，総合展示第４室に展示している「木製aynu語カルタ」をもとに，音声・イラスト・館蔵資料の画像資料等を組み合わせて制作したデジタル・コンテンツについて，人間文化研究機構　可視化・高度化事業関連展示「地域社会との連携による展示実践―人間文化研究の可視化・高度化―」（2022年１月18日～２月13日）において展示するため，解説パネルを作成して公開した。

大久保　純一　OKUBO Junichi　教授（2008.4～），副館長（2020.4～2022.3）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2008～），生年：1959

【学歴】東京大学文学部第二類（史学）美術史学専修課程（1982年卒業），東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻修士課程（1984年修了）
【職歴】名古屋大学文学部助手（1985），東京国立博物館研究員（1987），跡見学園女子大学文学部助教授（1995），国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授（2000），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2001），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2008），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2008），博物館資源センター長併任（2009～2010，2016～2018），副館長併任（2012～2013，2020～2021），町田市立国際版画美術館館長（非常勤，2019～）
【学位】博士（文学）（東京大学）（2006年取得）【専門分野】日本近世絵画史【主な研究テーマ】浮世絵，江戸後期の風景表現【所属学会】美術史学会，国際浮世絵学会【研究目的・研究状況】浮世絵を江戸時代絵画史，出版文化史および江戸の都市史の中に位置づけて考察すること。

●主要業績

1．【著書】大久保純一『広重と浮世絵風景画』317頁，東京大学出版会，2007年４月
2．【著書】大久保純一『浮世絵出版論　大量生産・消費される〈美術〉』226頁，吉川弘文館，2013年４月
3．【概説書】大久保純一『千変万化に描く　北斎の冨嶽三十六景』127頁，小学館，2005年９月
4．【概説書】大久保純一『カラー版　浮世絵』（岩波新書），196頁，岩波書店，2008年11月
5．【概説書】大久保純一『カラー版　北斎』（岩波新書），194頁，岩波書店，2012年５月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書

「錦絵とは」藤本幸夫編『書物・印刷・本屋　日中韓をめぐる本の文化史』勉誠社，pp.136-152，2021年６月21日

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発

「鯰絵の異版・重板・類板」特集展示図録『黄雀文庫所蔵　鯰絵のイマジネーション』国立歴史民俗博物館，pp.104-107，2021年７月13日

7　その他

「師宣と初期浮世絵」平木浮世絵財団監修『平木浮世絵コレクション大全』小学館，2021年５月
「歌川広重の風景画と花鳥画」平木浮世絵財団監修『平木浮世絵コレクション大全』小学館，2021年５月
「歴博への招待状　特集展示　黄雀文庫所蔵　鯰絵のイマジネーション」『REKIHAKU』３号，国立歴史民俗博物館，pp.87-88，2021年６月26日
「洗い髪の図像学」国立歴史民俗博物館編『〈洗う〉文化史「きれい」とは何か』，吉川弘文館，pp.187-192，2022年２月10日
「型染を描く」『REKIHAKU』５号，国立歴史民俗博物館，pp.88-89，2022年２月26日

「Nishiki-e and War Prints」『Fanning the Flames：Propaganda in Modern Japan』Hoover Institution Press, Stanford University，pp.57-63，アメリカ合衆国，2021年６月１日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

③　機構

「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」，2016年度～

３　国際交流事業

イギリス・ウエールズ国立博物館における，日本の歴史展示構築のための調査研究（代表）

４　主な展示・資料活動

特集展示「黄雀文庫所蔵　鯰絵のイマジネーション」展示代表，2021年７月13日～９月５日，国立歴史民俗博物館

特集展示「江戸のビスタ」展示代表，2021年12月21日～2022年年１月30日，国立歴史民俗博物館

企画展示「江戸の滑稽―幕末風刺画と大津絵―」展示企画，2022年３月12日～４月10日，町田伊市立国際版画美術館

三　社会活動等

１　館外における各種委員

佐倉市美術館運営委員，太田記念美術館浮世絵研究助成選考委員，国際浮世絵学会理事長，平木浮世絵財団評議員，日本版画協会理事

２　講演・カルチャーセンターなど

「山種コレクション浮世絵の魅力―広重を中心に―」2021年７月17日，山種美術館（オンライン）

「鯰絵のイマジネーション」2021年７月29日，歴博友の会特別オンライン講座

「”彩”と”趣”―広重・清親・巴水をつなぐもの―」2021年８月７日，町田市立国際版画美術館

４　社会連携

①　刊行物

「浮世絵を生む「場」としての芝界隈」『港区史　近世下』東京都港区，pp.200-220，2021年５月

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

前年度に引き続いての新型コロナ感染拡大の影響で予定していた関西方面の博物館や美術館の現地調査は十分行えなかったが，都内近県の施設を中心に，展覧会の調査をおこなった。また文献や公開データベースを通して，近世絵画作品に関しての知見を深めた。

小倉　慈司　OGURA Shigeji　教授（2021.11～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2021～）

【学歴】東京大学文学部国史学専修課程（1990年卒業），東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程（1992年修了），東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程（1995年単位修得退学）
【職歴】放送大学非常勤講師（1995），日本学術振興会特別研究員（PD）（1996），宮内庁書陵部編修課研究員（1996），同主任研究官（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2010），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2021.11），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2021.11）
【学位】博士（文学）（東京大学）（1999年取得）【専門分野】日本古代史，史料学【主な研究テーマ】古代神祇制度の研究，禁裏・公家文庫の研究，延喜式の研究，渡辺村史研究【所属学会】木簡学会，日本歴史学会，日本史研究会，大阪歴史学会，出雲古代史研究会，正倉院文書研究会，古代学協会，東方学会，史学会，日本古文書学会

●主要業績

1．【著書】『古代律令国家と神祇行政』340頁，同成社，2021年６月
2．【論文】「皮革生産賤視観の発生」（『日本史研究』第691号，pp.1-21，査読有，2020年３月）
3．【概説書】小倉慈司『事典　日本の年号』432頁，吉川弘文館，2019年６月
4．【展示図録】小倉慈司編著『文字がつなぐ―古代の日本列島と朝鮮半島―』国立歴史民俗博物館平成26年度企画展示図録，247頁，2014年10月
5．【科研】基盤研究（B）「史料学的検討を重視した『延喜式』の基礎的研究」16H03485，2016年４月～2020年３月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書

「『延喜式』にみえる食品とその特徴」三舟隆之・馬場基編『古代の食を再現する』，312頁，吉川弘文館，pp.15-25，2021年６月10日

『古代律令国家と神祇行政』340頁，同成社，2021年６月20日

（編）『「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」講演会記録集１・２』，133頁，2022年３月10日

2　論文

「古代天皇与神祇祭祀」『日本学研究』32　社会科学文献出版社，pp.3-27，2022年１月，（程茜訳）

「讃岐国司解端書（いわゆる「藤原有年申文」）の再検討」田島公編『禁裏・公家文庫研究』８　思文閣出版，pp.3-19，2022年３月31日

3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など

「東山御文庫本マイクロフィルム内容目録（稿）（３）」田島公編『禁裏・公家文庫研究』８　思文閣出版，pp. 249（172）-25（396），2022年３月31日

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発

延喜式関係論文目録DB増補

デジタル延喜式DB

5　学会・外部研究会発表

「古代日本における「文書」の誕生」「中世文書の様式と東アジアにおける国際比較」オンライン，2021年11月20日

「『延喜式』写本研究と現代語訳･英訳」「異分野融合による「総合書物学」の構築　シンポジウム「総合書物学」の現在」オンライン，2021年12月26日

「写本の再調査による大日本古記録本『小右記』の補訂」『小右記』シンポジウム，オンライン，2021年12月18日

「平城京大寺院における僧侶の生活―西大寺食堂院と僧房をめぐって」「西大寺食堂院跡の古代食再現！」シンポジウム，オンライン，2022年３月３日

7　その他

コラム「かな日記と『土佐日記』」『REKIHAKU』３号, pp.31-33, 国立歴史民俗博物館, 2021年６月26日（査読有）

新刊紹介「西本昌弘編著『日本古代の儀礼と神祇・仏教』」『歴史評論』859，p.94，歴史科学協議会，2021年11月１日

口絵解説「葦浦継手手実（解説）」『正倉院文書研究』17，吉川弘文館，pp.101-102，2021年11月10日（査読有）

「散る桜の花びら」『REKIHAKU』５号，pp.78-79，国立歴史民俗博物館，2022年２月26日

「修復された史料―国立歴史民俗博物館所蔵史料から」『古文書を科学する　料紙分析　はじめの一歩』東京大学史料編纂所，p.14，2022年２月28日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」分担者（2016～2021年度）

「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究」分担者（2020～2022年度）

②　他の機関

国際日本文化研究センター共同研究「日文研所蔵井上哲次郎関係書簡の研究――国民国家の始発と終焉」共同研究員（2021年10月～2022年３月）

③　機構

基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」ユニット「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」代表（2016～2021年度）

２　外部資金による研究

科学研究費基盤研究（B）「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」研究代表者，2020～2022年度予定

科学研究費基盤研究（S）「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明」研究分担者，2017～2021年度

科学研究費基盤研究（C）「出雲国造北島家文書の総合的研究」研究分担者，2018～2021年度

科学研究費基盤研究（A）「人権と差別をめぐる比較宗教史」研究分担者，2019～2021年度

科学研究費基盤研究（A）「「国際古文書料紙学」の確立」研究分担者，2019～2022年度予定

科学研究費基盤研究（A）「東アジアにおける古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病」研究分担者，2020～2024年度予定

４　主な展示・資料活動

2022年度企画展示「いにしえが，好きっ！―近世好古図録の文化誌」展示プロジェクト委員

５　教育

法政大学大学院史学専攻非常勤講師（日本史学研究Ⅰ）

「『延喜式』とはなにか／『延喜式』の写本・版本」総研大文化科学研究科共通科目「総合書物論」，国文学研究資料館

特別講義「天皇制の歴史」ミスル科学技術大学言語翻訳学部日本語学科，エジプト・アラブ共和国，2021年４月10日

三　社会活動等

１　館外における各種委員

日本歴史学会評議員･理事，同学会誌『日本歴史』編集代表，正倉院文書研究会委員，『史学雑誌』編集委員，日本古文書学会評議員

２　講演・カルチャーセンターなど

「伊勢物語の世界―その歴史的背景を探る」朝日カルチャーセンター千葉，2021年７月17日

四　活動報告

２　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの

人間文化研究評価システム検討委員会作業部会委員

３　研究・調査プロジェクト報告

研究成果をまとめて刊行した著書を購入し，関係研究者に寄贈頒布した。

川村　清志　KAWAMURA Kiyoshi　准教授（2012.4～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2014.4～）生年：1968

【学歴】大阪大学文学部（1992年３月卒業）京都大学人間・環境学研究科大学院（修士）（1996年３月修了）京都大学人間・環境学研究科大学院（博士）（1999年３月単位取得退学）

【職歴】神戸学院大学人文学部地域研究センターP.D.（2002），札幌大学文化学部日本語・日本文化学科助（准）教授（2005），同教授（2009）大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2012），総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授併任（2014）

【学位】学術博士（京都大学人間･環境学研究科）（2003年取得）【専門分野】文化人類学，民俗学【主な研究テーマ】口頭伝承の近代的展開，祭礼芸能の実践と習得過程の探求，メディアによる民俗文化の再表象過程，現代日本のサブカルチャーと伝統文化など【所属学会】日本文化人類学会，日本民俗学会，日本口承文芸学会，京都民俗学会

●主要業績

1．【単著】『クリスチャン女性の生活史―「琴」が歩んだ日本の近・現代』青弓社，292頁，2011年１月
2．【論文】「近代における民謡の成立―富山県五箇山地方「こきりこ」を中心に」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第165集，pp.175-204，2011年３月）（査読有）
3．【論文】「祭りの習得と実践：子どもによる準備過程を中心に（『比較文化論叢：札幌大学文化学部紀要』25，pp.7-54，2010年12月）
4．【論文】芸能への参入と習得―兵庫県明石市大蔵谷獅子舞の事例から」（後藤静夫編『日本伝統音楽研究センター研究報告５「近代日本における音楽・芸能の再検討」』pp.187-199，京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター，2010年３月）
5．【論文】「移動する身体と故郷の物語の行方―移動によって見いだされた故郷と移動のなかで変容する故郷」（『歴博研究報告［共同研究］人の移動とその動態に関する民俗学的研究』199集，pp.143-170，2015年12月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書
共編著：川村清志，高科真紀『七浦から世界へ―調査・研究・活用の拠点としてのフィールド―』109頁，国立歴史民俗博物館，2021年７月23日

2　論文
「変貌する災害モニュメント―災害をめぐる記憶の動態」小松和彦編『禍いの大衆文化 天災・疫病・怪異』角川学芸出版，pp.309-338，2021年７月１日

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発
共著：北川フラム，南条嘉毅，川村清志『スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」』，104頁，奥能登国際芸術祭実行委員会，現代企画室，2021年11月１日
「鬼滅の鯰絵―表象とコンテクストの比較文化試論」特集展示図録『黄雀文庫所蔵鯰絵のイマジネーション』国立歴史民俗博物館，pp.100-103，2021年７月13日
映像「石川県輪島市皆月の風景と行事―ショウゴロウフィルムから―」国立歴史民俗博物館，2022年３月30日
映像「震災の記憶をつなぐ―あの日の僕，七ヶ浜3.11―」国立歴史民俗博物館，2022年３月30日
映像「「春祭りをもう一度ー皆月青年会の軌跡ー」東京ドキュメンタリー映画祭出品作品，2021年６月21日

5　学会・外部研究会発表
「映像のなかの地域文化」『多角的な視点から捉える地域の文化―博物館における研究の可視化・高度化』人間文化研究機構・国立民族学博物館，2021年５月２日
「今，映像記録に求められること」第16回無形民俗文化財研究協議会，東京文化財研究所，2021年12月17日

7　その他
「ヤマに集いて明日を見つめて３」『REKIHAKU ３　特集･日記がひらく歴史のトビラ』国立歴史民俗博物館，pp.7-75，2021年６月28日（査読有）
共著：北川フラム，南条嘉毅，川村清志他『奥能登国際芸術祭2020+公式ガイドブック ムック』奥能登国際芸術祭実行委員会，「終わりの民具　始まりのアート」，pp.38-39，2021年８月16日
「来訪神の現在―能登のアマメハギを中心に」學士會会報　953，一般社団法人学士会，pp.91-97，2022年３月１日（査読有）
共著：兼城糸絵，川村清志『あの日の僕―七ヶ浜3.11―』国立歴史民俗博物館，52頁，2022年３月11日
共著：川村清志，寺村裕史，和髙智美，関谷久之，末森薫，橋本沙知，河村友佳子「総合討論」『被災文化財を通した地域文化の継承モデル―博物館の視点から』，pp.104-131，2022年３年14日
共著：川村清志，日高真吾「映画会「明日に向かって曳け―石川県輪島市皆月山王祭の現在」」『地域文化を映し出す』河村由佳子・日高真吾編，pp.41-69，2022年３年14日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
③　機構
「地域における歴史文化研究拠点の構築」（研究代表者：川村清志），研究代表（2016年度～2021年度）

2　外部資金による研究

科学研究費基盤研究（B）「文化の主体的継承のための民俗誌の構築―マルチメディアの活用と協働作業を通じて」研究代表（2018年度～2022年度）
科学研究費基盤研究（B）「日本語敬語形成モデルの構築―生成・運用・伝播に注目して―」（研究代表者，中井靖一　富山大学教授），研究分担者（2019年度～2021年度）

4　主な展示・資料活動
「特別展 復興を支える地域の文化―3.11から10年」国立大阪民族学博物館，会期：2021年３月４日～５月18日

5　教育
出張講義「地域文化振興論」2021年６月25日　弘前大学人文社会科学部との協定に基づく講義
大学非常勤講師「比較人間形成論講義I」2022年２月15～18日　東北大学教育学部集中講義

三　社会活動等

2　講演・カルチャーセンターなど
川村清志，日高真吾「みんぱく映画会「明日に向かって曳け―石川県輪島市皆月山王祭の現在」，みんぱく映画会，人間文化研究機構・国立民族学博物館，2021年４月24日
北川フラム，南条嘉毅，川村清志「芸術祭を横断的に学ぶ」北川フラム塾，アートフロントギャラリー，東京，2021年10月11日
「「気仙沼の《魚食》文化」に見る―モバイル展示の領域展開」『地域文化の多様性と横断性―歴史・文化・考古研究の可視化・高度化―』人間文化機構・国立歴史民俗博物館，2022年１月29日

4　社会連携
②　共同研究
受託研究 石川県珠洲市内での民俗調査（2021年度）
③　講演会・シンポジウム
川村清志，天野真志，川邊咲子，泉谷満寿裕，北川フラム，南条嘉毅『スズ・シアター・ミュージアム設立シンポジウム』，ラポルト・珠洲，2021年７月15日

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
モバイル展示「気仙沼の地域と食文化」の展示改善
川村清志「鬼滅の鯰絵―表象とコンテクストの比較文化試論」『展示図録 鯰絵のイマジネーション』国立歴史民俗博物館，pp100-103
川村清志「曳山に集いて，明日を見つめて―祭りの明日へ，皆月山王祭」『REKIHAKU　日記が開く歴史のトビラ』，pp70-75
川村清志編『七浦から世界へ―調査・研究・活用の拠点としてのフィールド―』

小池　淳一　KOIKE Jun’ichi　教授（2011～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2011～），生年：1963

【学歴】東京学芸大学教育学部（1987年卒業）筑波大学大学院博士課程歴史人類学研究科（一貫制）（1992年単位取得退学）
【職歴】弘前大学人文学部講師（1992），弘前大学人文学部助教授（1994），愛知県立大学文学部助教授（2001），国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2011），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2011），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻長（2014-15）
【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学）【専門分野】民俗学（民俗信仰，口承文芸，民俗学史），伝承史【主な研究テーマ】民俗における文字文化の研究，陰陽道の展開過程の研究，地域史における民俗の研究など【所属学会】日本民俗学会，日本宗教学会（理事），日本昔話学会，日本口承文芸学会，日本文化人類学会，地方史研究協議会，

日本史研究会，日本民具学会，儀礼文化学会，青森県民俗の会，福島県民俗学会ほか

●主要業績

1．【編著書】『新陰陽道叢書（第四巻）民俗・説話』635頁，名著出版，2021年10月
2．【著書】『季節のなかの神々―歳時民俗考―』220頁，春秋社，2015年10月
3．【著書】『陰陽道の歴史民俗学的研究』442頁，角川学芸出版，2011年２月
4．【論文】「結節点としての万年筆―筆記具の民俗学へむけて―」『民具マンスリー』51（4），pp.1-11，2018年７月10日
5．【展示図録】歴博企画展示図録『万年筆の生活誌―筆記の近代―』，国立歴史民俗博物館，2016年３月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書

編著『新陰陽道叢書（第４巻）民俗・説話』635頁，名著出版，2021年10月31日

共著『地域文化の可能性』（うち、「はじめに」「地域を見つめ、つなげる―地域文化資源の「発見」と「活用」―」を執筆）勉誠出版，2022年３月25日

2　論文

「「簠簋」とは何か―陰陽道の由来と行方―」『現代思想』49-5, 青土社, pp.112-121, 2021年４月26日（査読なし）

「伝承と文字文化―民俗学的歴史研究の方法―」『日本民俗学』306, 日本民俗学会, pp.69-84, 2021年５月28日（査読なし）

「総論　陰陽道と民俗・説話研究」小池淳一編『新陰陽道叢書（第４巻）民俗・説話』pp.1-42，名著出版，2021年10月31日（査読なし）

「東方朔再考―近世陰陽道書と民俗―」小池淳一編『新陰陽道叢書（第４巻）民俗・説話』pp.167-192, 名著出版，2021年10月31日（査読なし）

「近代における晴明像の再生」林淳編『新陰陽道叢書（第5巻）特論』名著出版，pp.141-166，2021年12月25日（査読なし）

5　学会・外部研究会発表

「『簠簋』の形成に関する一考察―戦国期陰陽道の動態―」日本宗教学会，オンライン，2021年９月８日

「寛永八年版『大ざつしよ』の意義と位置」日本民俗学会，オンライン，2021年10月10日

「昔話録音音源の処理と発信―青森県史における口承文芸調査資料から―」日本口承文芸学会，オンライン，2021年10月30日

7　その他

「蒔絵万年筆の歴史とその美―並木製作所（現パイロット）が生んだ優品―」『REKIHAKU』４号，pp.72-75，国立歴史民俗博物館，2021年10月26日

「次の五〇年のために―地方相互の連携と資料の継承―」長野県民俗の会会報44，pp.231-234，2021年11月26日

「解題」塚本学著「歴史・民俗・博物館」高志書院，pp.297-306，2022年１月15日

「暦注の伝承と民俗―土用から―」木俣元一・近本謙介編『宗教遺産テクスト学の創成』、pp.667-671，勉誠出版，2022年３月30日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基幹研究「地域における歴史文化研究拠点の構築」（2016～2021年度）副代表

③　機構

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」（2016～2021年度）共同代表

2　外部資金による研究

科学研究費基盤研究B「「知識」の再配置と実践―東北の巫者と寺院をめぐって―」（弘前大学, 2020～2022年度）研究分担者

科学研究費基盤研究C「古代～近代陰陽道史料群の歴史的変遷と相互関係の解明」（京都女子大学、2021～2023年）研究分担者

5　教育

成城大学大学院文学研究科非常勤講師（日本民俗学研究）

東邦大学薬学部非常勤講師（民俗学）

三　社会活動等

1　館外における各種委員

日本宗教学会理事

青森県文化芸術推進計画検討会委員

八千代市文化財審議会委員

3　マスコミ

（取材協力）「コロナ神誕生は「自然」」『千葉日報』9面，千葉日報社，2021年７月２日

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

陰陽道や修験道のような高度の宗教思想や儀礼構造が生活世界（＝民俗文化）にどのように浸透し，影響を与えるのか，民俗の生成や伝播という視点で調査研究を進めた。特に暦日とそれに関する知識を記した書物や陰陽師をめぐる伝説を対象とする成果をまとめることができた。

・「「簠簋」とは何か―陰陽道の由来と行方―」（『現代思想』49巻5号，2021年）

・「東方朔再考―近世陰陽道書と民俗―」（拙編『新陰陽道叢書（第四巻）民俗・説話』，名著出版，2021年）

・「近代における晴明像の再生」（林淳編『新陰陽道叢書（第五巻）特論』，名著出版，2021年）ほか

小島　道裕　KOJIMA Michihiro　教授（2008～2022）

併任：総合研究大学院大学日本文化歴史専攻教授（2008～2022），生年：1956

【学歴】京都大学文学部（国史学）（1980年卒業）京都大学大学院文学研究科博士課程（国史学）（1985年単位取得退学）【職歴】京都大学研修員（1985），京都大学文学部助手（1986）国立歴史民俗博物館歴史研究部助手（1989），同助教授（1994），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（1999）大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007）大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2008），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2008），博物館資源センター長（2011～2013），総研大日本歴史研究専攻・専攻長（2008～2010），総研大文化科学研究科・研究科長（2015～2017），2022年３月31日定年により退職

【学位】文学博士（京都大学）（2006年取得）【専門分野】日本中世史，博物館教育【主な研究テーマ】日本中近世の都市と社会，洛中洛外図屏風，古文書様式，歴史展示と教育プログラム【所属学会】日本史研究会，史学研究会，古文書学会，比較都市史研究会，家具道具室内史学会【研究目的・研究状況】日本の中世から近世について，具体的な歴史資料の分析によって，社会のさまざまな側面を明らかにする。洛中洛外図屏風や古文書などを，共同研究や展示で扱いながら，研究を進めると共に，成果を発信し，コンテンツを提供した。http://www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/ kenkyuusya /kojima/index.html

●主要業績

1．【単著】『洛中洛外図屏風―つくられた<京都>を読み解く―』231頁，吉川弘文館，2016年４月

2．【単著】『戦国・織豊期の都市と地域』362頁，青史出版，2005年11月

3．【単著】『イギリスの博物館で―博物館教育の現場から―（歴博ブックレット16）』87頁，歴史民俗博物館振興会，2000年10月

4．【単著】『城と城下―近江戦国誌―』246頁，新人物往来社，1997年５月（再刊：吉川弘文館，2018年10月）

5．【展示図録】国立歴史民俗博物館企画展示図録『日本の中世文書―機能と形と国際比較―』314頁，2018年11月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書

共著：国立歴史民俗博物館監修，「性差の日本史」展示プロジェクト編『新書版 性差の日本史』221頁，集英社インターナショナル，2021年10月12日

2　論文

「戦国大名の印判―公印／個人印の区別をめぐってー」『日本歴史』334，pp.38-43，吉川弘文館，2022年１月

「中世末期～近世初頭における真言宗寺院の本末関係と僧侶の旅―宝金剛寺、千手院、宝珠院の所蔵資料から―」皓月山宝金剛寺，『文化財が紡ぐ佐倉の歴史―宝金剛寺と北条氏勝―』pp.48-54，2022年２月

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発

「益田の城下」企画展示図録『中世武士団』国立歴史民俗博物館，2022年３月15日

『日本の中世文書WEB』「総説　収録文書の全体―日本の「文書史」の中で―」国立歴史民俗博物館，2022年２月７日

7　その他

共著：小島道裕，沢田和人，外山信司，須賀隆章「文化財が紡ぐ佐倉の歴史―宝金剛寺と北条氏勝―掲載資料解説」『文化財が紡ぐ佐倉の歴史―宝金剛寺と北条氏勝―』皓月山宝金剛寺，pp.70-77，2022年２月

「特集展示「年号と朝廷」（調査研究活動報告）」『国立歴史民俗博物館研究報告』pp.181-199，国立歴史民俗博物館，2022年３月25日（査読有）

「日記・文書（もんじょ）としてのツイッター」『REKIHAKU』３号，pp.40-42，国立歴史民俗博物館，2021年６月

「変わり兜」『REKIHAKU』５号，国立歴史民俗博物館，2022年２月

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

③　機構

国際日本文化研究センター共同研究「『かのように』という原理上で変遷してきた文通―『文書』概念や，その様式，記号，表象，意図性の認識を論ず」，2018年度～

3　国際交流事業

「自身の発表論文の成果と課題」国際研究集会「中世文書の様式と東アジアにおける国際比較」国立歴史民俗博物館，2021年11月20日

4　主な展示・資料活動

総合展示第２室「東国と西国」「印刷文化」「大名と一揆」「民衆の生活と文化」「大航海時代の中の日本」展示プロジェクト委員

2020年度企画展示「性差の日本史」展示プロジェクト委員（副代表）

5　教育

愛知県立芸術大学非常勤講師（美術特別研究）

三　社会活動等

1　館外における各種委員

佐倉市市民文化資産運用委員会委員（委員長）　佐倉市文化財保存活用地域計画策定協議会委員　千葉市立郷土博物館協議会委員（副委員長）　東京都江戸東京博物館外５施設指定管理者評価委員会委員　日本学術振興会研究部会委員

2　講演・カルチャーセンターなど

「歴史資料を読み解く―遺跡・古文書・風俗画―」歴博講演会，国立歴史民俗博物館，2022年３月12日

四　活動報告

4　その他

歴史資料研究を引き続き行ない，いくつかのまとめと今後の展望を得た。2020年秋の企画展示「性差の日本史」に参加して以来，絵画資料などについてのジェンダー的な読み解きを進めていたが，『新書版 性差の日本史』の編集を担当し，刊行することができた。古文書については，様式の国際比較について，これまでに刊行

した二冊の図書（『古文書の様式と国際比較』，『国立歴史民俗博物館研究報告』第224集「中世文書の様式と機能および国際比較と活用に関する研究」）に基づいた国際研究集会を行なって執筆者間で討議し，新たな方向性を共有した。退任記念となる歴博講演会では，館における歴史資料研究を振り返ると共に，史学史を意識しつつ，史料学がその個別性を乗り越えて総合性・全体性を確保するために，「不在史料論」の提起を試みた。

小瀬戸　恵美　Koseto-Horyu, Emi　准教授（2010.1～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2013～）

【学歴】東京大学理学部化学科（1995年卒業），東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻博士後期課程（2000年中途退学）【職歴】アメリカ合衆国ゲティ保存研究所グラジュエイトインターン（1999）
国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（2000），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授（2013～）
【学位】文化財修士（東京藝術大学）（1998年取得）【専門分野】保存科学，文化財保存学【主な研究テーマ】展示評価の手法と検討，博物館施設における資料劣化原因・過程に関する研究【所属学会】文化財保存修復学会，日本文化財科学会，国際博物館会議（International Committee of Museum，ICOM），International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC）【研究目的・研究状況】博物館における研究展示において視線計測などの非接触・非言語による展示評価手法の検討と考察を目的としている。同時に，文化財を対象に自然科学的手法による分析・調査を行い，他分野との協業によって文化財構成物質の流通や人の文化的交流についての考察をおこなっている。

●主要業績

1．【論文】「常呂川河口遺跡墓壙出土ガラスの自然科学的分析」（『常呂川河口遺跡』８，pp.297-303，2008年３月）
2．【論文】「２．連携研究機関における生物被害対策の現状と課題　国立歴史民俗博物館の生物生息調査」（『有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成』pp.125-132，2008年２月）
3．【論文】「ラマンイメージング装置による伊勢市版歌川派錦絵および版木の色材分析」（共著／坂本 章，落合周吉，東山尚光，増谷浩二，木村淳一）（『国立歴史民俗博物館研究報告』第153集，pp.1-19，2009年３月）（査読有）
4．【論文】「Raman studies of Japanese art objects by a portable Raman spectrometer using liquid crystal tunable filters」（共著 Akira Sakamoto，Shukichi Ochiai，Hisamitsu Higashiyama，Koji Masutani，Jun-ichi Kimura，Mitsuo Tasumi）（『Journal of Raman Spectroscopy』，Vol.43，pp.787-792，2012年 6 月，published online on October 27）（査読有）
5．【論文】「A Pilot Study on the Museum Visitors'Interest by using Eye Tracking System」The Eighth Conference of Japanese Association for Digital Humanities（JADH2018）proceeding，pp.129-131，2018年9月9日（査読有）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

二　主な研究教育活動

２　外部資金による研究
令和元年度博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業連携活動
「展示効果の高度化とその検証」代表・西谷大

５　教育
令和３年度企画展示「学びの歴史像―わたりあう近代―」（2021年10月12日～12月12日）展示プロジェクト委員（関連イベント企画・立案）
歴史民俗資料館等専門職員研修会（歴民研修）講師，オンライン，2021年11月

三　社会活動等

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

前年度までに取得した，視線検出及び視線検出ポイントのデータ解析を被験者の分析を試みて再解析したが，被験者別での有意な解析結果を得ることが出来なかった。これは，取り付け型機器を用いたことにより，データの精度が要素分析に耐えうるほどではなかったことに起因する。次年度以降，本年度導入されたグラス型視線計測機器及び他メーカーのグラス型機器，取り付け型機器との同時測定・分析をおこなう予定である。

後藤　真　GOTO Makoto　准教授（2015.9～）

生年：1976

【学歴】岡山大学文学部歴史文化学科（2000年卒業），大阪市立大学大学院文学研究科哲学歴史学専攻前期博士課程（2002年修了），大阪市立大学大学院文学研究科哲学歴史学専攻後期博士課程（2007年修了）
【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2007.４～2008.３），花園大学文学部文化遺産学科　専任講師（2009.４～2014.９），大学共同利用機関法人人間文化研究機構本部特任助教（2014.９～2015.８），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2019.４～）
【学位】博士（文学）（大阪市立大学）（2007年取得）【専門分野】人文情報学・総合資料学・日本古代史【主な研究テーマ】歴史資料の情報化による高度活用【所属学会】日本史研究会・正倉院文書研究会・木簡学会・情報処理学会・Alliance of Digital Humanities Organizations（ADHO），Japanese Association for Digital Humanities,

●主要業績

１．【著書】『歴史情報学の教科書』後藤真・橋本雄太（共編著），文学通信，208頁，2019年３月
２．【著書】『情報歴史学入門』後藤真，田中正流，師茂樹，金壽堂出版，184頁，2009年３月
３．【著書】（分担執筆）『歴史研究と〈総合資料学〉』後藤真「日本における人文情報学の全体像と総合資料学」208頁，2018年２月
４．【論文】「アーカイブズからデジタル・アーカイブへ―「デジタルアーカイブ」とアーカイブズの邂逅―」後藤真（『アーカイブのつくりかた』NPO知的資源イニシアティブ編，勉誠出版，2012年11月）
５．【学会・外部研究会発表】
2015年７月２日，“Digitalization of Shosoin Monjo and Extraction of Knowledge”，Makoto GOTO，Motomu NAITO，（Annual international conference of the Alliance of Digital Humanities Organizations（ADHO），University of Western Sydney, Australia）（査読有）

●2021年度の研究教育活動（成果を出す以前の研究・調査途中のものも含む）

一　研究業績

１　著書（単著・共著・編著・監修）
２　論文（査読あり，なしを明記）
３　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
４　展示図録・資料図録・映像・ＤＢ・デジタル・コンテンツ開発
５　学会・外部研究会発表
６　総研大リーフレット
７　その他（歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュース，『本郷』など）

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況
①　歴博（基幹・基盤・開発型，国内交流事業）
②　他の機関
③　機構（基幹研究プロジェクト）
人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」，2016～2021年度
人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史に関する研究資源の共同利用基盤構築」，副代表，2016～2021年度（2020年度より研究代表者）

2　外部資金による研究（科学研究費などの外部資金，各種補助金による研究，企業・自治体による研究）
「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」科学研究費補助金（特別推進研究），（代表者：奥村弘）研究分担者，2019～2023年度
「「国際古文書料紙学」の確立」科学研究費補助金（基盤研究（A）），（代表者：渋谷綾子）研究分担者，2019～2023年度
「日本語コーパスに対する情報付与を核としたオープンサイエンス推進環境の構築」科学研究費補助金（挑戦的研究（開拓）），（代表者：小木曽智信）研究分担者，2019～2021年度
「統合史資料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創出」科学研究費補助金（基盤研究（A））（代表者：山田太造）研究分担者，2018～2022年度
「多面的な時空間範囲の同定と記述法の開発―緯度・経度／年月日からの脱却」科学研究費補助金（基盤研究（A））（代表者：関野樹）研究分担者，2020～2023年度
3　国際交流事業（国際交流協定にもとづく事業，国際シンポジウム・集会など）
4　主な展示・資料活動（展示・資料・ＤＢなど）
5　教育
千葉大学普遍教育科目「博物館から歴史を読み解く」
國學院大学非常勤講師
長崎大学大学院多文化社会学研究科　非常勤講師（総合資料学）
「2020年度　科学技術社会分野方法論S1」東京工業大学環境･社会理工学院社会･人間科学コース，オンライン，2020年６月23日

三　社会活動等

1　館外における各種委員
内閣府知的財産戦略本部　デジタルアーカイブジャパン推進実務者検討委員，Japanese Association for Digital Humanities（JADH）理事，情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会　幹事，情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム2020　プログラム委員，京都国立博物館　客員研究員，文化庁　国立近現代建築資料館　有識者会議委員
4　社会連携（国内）
①　刊行物（自治体など地方公共団体刊行のもの：市史，発掘調査報告書など）
②　共同研究（自治体からの委託研究や産業界との共同研究）
③　講演会・シンポジウム（自治体など地方公共団体主催のもの）
④　デジタル・コンテンツ開発（自治体の経費で開発したもの）
5　国際連携（日本国内で行われたものも含む）
①　JICA
②　国際交流基金
③　その他

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
　コロナ禍ではあったが，地域歴史資料の活用という観点から研究を推進することができた。与論島での地元自治体との連携事業等を進め，2022年度から開始する研究へも貢献することができた。また，データ構築等についても，山形県上山市のデータ公開などを含め，複数のデータ構築と公開を進めることができた。

齋藤　努　SAITO Tsutomu　教授（2009.4～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2009～），生年：1961

【学歴】東京大学理学部化学科（1983年卒業），東京大学大学院理学系研究科化学専攻博士課程（1988年修了）
【職歴】東京大学教養学部非常勤講師（1988），国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（1988），同助教授（1999），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部

准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2009），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2009），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻長併任（2010～2011），広報連携センター長併任（2013～2015，2018～2019）
【学位】理学博士（東京大学）（1988年取得）【専門分野】文化財科学【主な研究テーマ】歴史資料の自然科学的手法による分析（材質，技法，産地）【所属学会】日本文化財科学会，文化財保存修復学会【研究目的・研究状況】美術品・工芸品・考古遺物などの歴史資料を対象として自然科学的な手法を用いて調査を行い，人文科学的な研究結果とあわせることによって，原料の流通や人の交流，使用されていた技術などについて考察を加える。また，伝統技術に関する実地調査や再現実験なども実施している。

●主要業績

1．【単著】
『金属が語る日本史―銭貨・日本刀・鉄炮―』歴史文化ライブラリー355，吉川弘文館（単著），205頁，2012年11月

2．【論文】
齋藤努，高橋照彦，西川裕一「古代銭貨に関する理化学的研究　－「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析－」IMES Discussion Paper No.2002-J-30，2002年９月（査読なし）

3．【論文】
齋藤努，土生田純之，亀田修一，福尾正彦，鄭仁盛，高田寛太，風間栄一，藤尾慎一郎，柳昌煥，趙榮濟「鉛同位体比分析による古代朝鮮半島・日本出土青銅器などの原料産地と流通に関する研究 ―韓国嶺南地域出土・東京大学所蔵楽浪土城出土・宮内庁所蔵の資料などを中心に―」『考古学と自然科学』59，pp.57-81，2009年６月（査読あり）

4．【論文】
「刀匠の継承する伝統技術の自然科学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第177集，pp.127-178，2012年11月（査読あり）

5．【論文】
齋藤努，坂本稔，高塚秀治「大鍛冶の炉内反応に関する検証と実験的再現」『国立歴史民俗博物館研究報告』第177集，pp.179-229，2012年11月（査読あり）

6．【論文】
単著「江戸期小判などの色揚げに関する自然科学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第183集（開館三〇周年記念論文集Ⅱ），pp.1-51，2014年３月（査読あり）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

2　論文
齋藤努，竹下聡史，反保元伸，土居内翔伍，橋本亜紀子，梅垣いづみ，久保謙哉，二宮和彦，三宅康博「負ミュオンを用いた丁銀の色付に関する非破壊分析」『文化財科学』84，pp.1-16，2022年２月（査読あり）
齋藤努「山形県内で採取した近世鉛顔料資料の鉛同位体比分析結果」『国立歴史民俗博物館研究報告』230，pp.169-178，2021年12月（査読あり）

3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
齋藤努「金井下新田遺跡出土資料の鉛同位体比分析結果」『金井下新田遺跡《古墳時代以降編》分析・論考編』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第689集，pp.393-394，2021年７月

5　学会・外部研究会発表
齋藤努「鉛同位体比からみる中世青銅製品と北宋銭」2021年度日本地球化学会年会，オンライン，2021年９月10日
齋藤努「中世青銅製品と北宋銭」第５回文理融合シンポジウム「量子ビームで歴史を探る―加速器が紡ぐ文理融合の地平―」，オンライン，2021年９月９日
齋藤努，村木二郎，反保元伸，大森信宏，土居内翔伍，橋本亜紀子，久保謙哉，竹下聡史，三宅康博「負ミュオン特性X線分析法による中世青銅製品の内部組成非破壊分析」日本文化財科学会第38回大会，pp.38-39，2021年９月19日

齋藤努「負ミュオンを用いた丁銀の深さ方向分析」第６回文理融合シンポジウム「量子ビームで歴史を探る―加速器が紡ぐ文理融合の地平―」，オンライン，2022年１月８日
齋藤努，竹下聡史，反保元伸，土居内翔伍，橋本亜紀子，梅垣いづみ，久保謙哉，二宮和彦，三宅康博「負ミュオンを用いた歴史資料の非破壊元素分析」日本物理学会第77回年次大会，2022年３月18日

二　主な研究教育活動

２　外部資金による研究
機構間連携・異分野連携研究プロジェクト「負ミュオンによる歴史資料の非破壊内部元素組成分析」（研究代表　齋藤努）高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所との共同研究，2018～2021年度
科学研究費補助金・新学術研究「負ミュオンビームを用いた新たな非破壊元素分析法」（研究代表　二宮和彦）研究分担者，2018～2022年度
科学研究費補助金・基盤研究（A）「琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家」（研究代表　村木二郎）研究分担者，2018～2021年度
科学研究費補助金・基盤研究（A）「考古学・人類学・文化財科学の学際的研究による縄文社会論の再構築」（研究代表　山田康弘）研究分担者，2018～2021年度
科学研究費補助金・基盤研究（B）「佐波理製柄鏡の総合調査をもとにした佐波理製作技術の起源に関する研究」（研究代表　清水康二）研究分担者，2018～2021年度
科学研究費補助金・基盤研究（B）「古代鉄の放射性炭素年代測定：金属鉄から錆びた鉄への適用拡張と測定の高精度化」（研究代表　中村俊夫）研究分担者，2017～2021年度

５　教育
「知りたいこととすべきこと」『歴史研究の最前線』自然科学からみる歴史資料，23，pp.8-29，2022年２月28日

三　社会活動等

１　館外における各種委員
国立文化財機構外部評価委員

３　マスコミ
「隕石鍛造　ツタンカーメンの剣　エジプト国外からの贈り物？」朝日新聞（夕刊），p.9，朝日新聞大阪本社，2022年２月16日
「ツタンカーメン王　墓から出土の鉄剣　エジプト国外からの贈答品か」朝日新聞（夕刊），p.9，朝日新聞東京本社，2022年２月16日
「ツタンカーメン王の鉄剣、隕石を低温で鍛造か　千葉工大が化学分析」朝日新聞デジタル，2022年２月16日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告
古代に採掘が行われていた山口県内鉱山や周辺の製錬関連遺跡から出土した遺物から鉛を単離し，同位体比測定を行うことによって，各資料の原料の産地を推定した。

坂本　稔　SAKAMOTO Minoru　教授（2013～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2013～）

【学歴】東京大学理学部化学科（1989年卒業），東京大学大学院理学系研究科化学専攻修士課程（1991年修了），東京大学大学院理学系研究科化学専攻博士課程（1994年修了）
【職歴】国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（1994），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2013），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2013），総合研究大学院大学文化学研究科日本歴史研究専攻長（2016-2018）
【学位】博士（理学）（東京大学）（1994年取得）【専門分野】文化財科学【主な研究テーマ】同位体分析に基づく年

代測定【所属学会】日本文化財科学会，文化財保存修復学会，日本AMS研究協会，応用物理学会【研究目的・研究状況】炭素14年代法を中心に，数値年代の獲得と精度向上に研究の重点を置く。

●主要業績

1．【著書】坂本稔・横山操編『樹木・木材と年代研究』147頁，朝倉書店，2021年３月
2．【論文】Sakamoto Minoru, Hakozaki Masataka, Nakao Nanae, Nakatsuka Takeshi「Fine structure and reproducibility of radiocarbon ages of middle to early modern Japanese tree rings.」『Radiocarbon』59巻６号，pp.1907-1917，2017年12月
3．【共同研究】坂本 稔編『歴史資料研究における年代測定の活用法に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館研究報告176，178頁，2012年12月
4．【外部資金】2018～2021年度科学研究費補助金（基盤A）「単年輪14C測定による較正曲線の地域効果・微細構造の解明」研究代表者

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

2　論文

山田康弘，瀧上舞，坂本稔，木下尚子，藤尾慎一郎「熊本大学医学部所蔵縄文時代の人骨の年代学的調査―浜ノ州貝塚・沖ノ原貝塚・カキワラ貝塚・境崎貝塚・尾田貝塚―」『国立歴史民俗博物館研究報告』234，国立歴史民俗博物館，pp.121-147，2022年３月31日（査読有）

藤尾慎一郎，木下尚子，坂本稔，瀧上舞，篠田謙一「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.3-14，2021年10月29日（査読有）

濵田竜彦，瀧上舞，坂本稔「鳥取県内所在古墳群出土人骨の年代学的調査（１）」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.127-143，2021年10月29日（査読有）

竹中正巳，坂本稔，瀧上舞「鹿児島県西之表市田之脇遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.153-159，2021年10月29日（査読有）

竹中正巳，坂本稔，瀧上舞「鹿児島県鹿屋市に所在する地下式横穴墓から出土した人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.161-167，2021年10月29日（査読有）

竹中正巳，坂本稔，瀧上舞「鹿児島県西之表市小浜遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.169-173，2021年10月29日（査読有）

竹中正巳，坂本稔，瀧上舞「鹿児島県南九州市高取遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.183-187，2021年10月29日（査読有）

木下尚子，坂本稔，瀧上舞「沖縄貝塚時代の貝殻集積等出土貝殻の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.189-246，2021年10月29日（査読有）

木下尚子，坂本稔，瀧上舞「沖縄貝塚時代出土人骨等の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』229，国立歴史民俗博物館，pp.247-277，2021年10月29日（査読有）

5　学会・外部研究会発表

Sakamoto Minoru, Tokanai Fuyuki, Mitsutani Takumi「Single-year radiocarbon dating of Japanese tree rings of the 10th century including the 946CE eruption of the Baitoushan Volcano.」15th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry（AMS-15），オンライン，2021年11月15－29日，オーストラリア（英語）

坂本稔，箱﨑真隆，中尾七重「較正曲線IntCal20と樹木年輪」日本文化財科学会第38回大会WG，オンライン，2021年９月18日

坂本稔，中塚武，門叶冬樹「日本産樹木年輪の単年輪14C測定―AD1600～1800」日本文化財科学会第38回大会，オンライン，2021年９月18－19日

「日本産樹木年輪と較正曲線IntCal20」第82回応用物理学会秋季学術講演会，2021年９月11日，オンライン

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

②　他の機関

機構間連携・異分野連携研究プロジェクト「日本列島における人間・文化の起源とその発展に関する総合

的研究」（研究代表者：斎藤成也）共同研究者，2018～2021年度

③　機構

ネットワーク型機関研究プロジェクト（北東アジア地域研究推進事業）「自然環境と文化･文明の構造」（代表：池谷和信）事業分担者，2016～2021年度

2　外部資金による研究

科学研究費補助金（基盤A）「単年輪14C測定による較正曲線の地域効果・微細構造の解明」研究代表者，2018～2021年度

科学研究費補助金（基盤A）「考古学・人類学・文化財科学の学際的研究による縄文社会論の再構築」（研究代表者：山田康弘）研究分担者，2018年度～2021年度

科学研究費補助金（基盤A）「ヘルレン川流域を中心とした匈奴国家中枢地の研究」（研究代表者：臼杵勲）研究分担者，2018年度～2022年度

科学研究費補助金（基盤A）「過去３万年の極端気候・極端災害史の精密編年に向けた新しい年輪年代法の基盤研究」（研究代表者：箱崎真隆）研究分担者，2020年度～2024年度

科学研究費補助金（基盤B）「東アジア新石器文化の実年代体系化による環境変動と生業･社会変化過程の解明」（研究代表者：小林謙一）研究分担者，2018年度～2022年度

科学研究費補助金（基盤B）「高精度14C年代測定にもとづく先史時代の人類活動と古環境の総合的研究」（研究代表者：工藤雄一郎）研究分担者，2018年度～2021年度

科学研究費補助金（萌芽）「エジプト遺跡出土織物資料データベース構築―京都モデルの提案」（研究代表者：横山操）研究分担者，2019年度～2021年度

5　教育

千葉大学非常勤講師（博物館資料保存論）

武蔵大学人文学部専門科目「文化財科学」講師

三　社会活動等

1　館外における各種委員

日本AMS研究協会運営委員（2017年度～）

「日本のたてもの―自然素材を活かす伝統の技と知恵」（独立行政法人日本芸術文化振興会）企画選定委員（2021年度）

3　マスコミ

「科捜研の女 Season21 第６話」年代測定監修，テレビ朝日，2021年11月25日

4　社会連携

③　講演会・シンポジウム

「未知への挑戦：若手が語る最先端研究」2021年度総研大社会連携事業，長野県飯田高校，2021年11月14～16日（担当教員）

「過去を測る時間のものさし―炭素14年代法―」大人が楽しむ科学教室2021，千葉市科学館，2022年１月16日

「炭素14年代法」『令和３年度中堅技術者研修（A班）』文化財建造物保存技術協会，2022年３月16日，国立歴史民俗博物館（Zoom）

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

令和３年12月10日，佐倉市教育委員会による佐倉市志津城跡出土古瀬戸灰釉瓶子の調査において，年代測定に関する技術指導を行った。本プロジェクトの一環として，瓶子中の炭化物の炭素14年代測定を実施した。

澤田　和人　SAWADA Kazuto　准教授（2009.10～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2013～）

【学歴】大阪大学文学部美学科（1996年卒業），大阪大学大学院文学研究科芸術史学専攻博士前期課程（1998年修了）
【職歴】財団法人大和文華館学芸部（1998），国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（2002），大学共同利用機関

法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2009），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2013）
【学位】文学修士（大阪大学）（1998年取得）【専門分野】染織史，服飾史，絵画史（絵巻）【主な研究テーマ】中世を中心とする染織および服飾・衣装風俗に関する研究，野村正治郎に関する研究【所属学会】美術史学会

●主要業績

1．【論文】「十徳の変遷―中世を中心に」（『美術史』147号，pp.36-53，1999年11月）
2．【編著】『［染］と［織］の肖像―日本と韓国・守り伝えられた染織品』（国立歴史民俗博物館平成20年度企画展示図録，208頁，2008年10月）
3．【編著】『紅板締め―江戸から明治のランジェリー』（国立歴史民俗博物館平成23年度企画展示図録，164頁，2011年７月）
4．【編著】『野村コレクション　服飾Ⅰ』（国立歴史民俗博物館資料図録９，348頁，2013年３月）
5．【編著】『野村コレクション　服飾Ⅱ』（国立歴史民俗博物館資料図録10，356頁，2014年３月）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書
共編著：澤田　和人，吉村　郊子『REKIHAKU　5　ファッション×博物館』112頁，国立歴史民俗博物館，2022年２月26日

2　論文
「宝金剛寺の袈裟二件」『七条袈裟・横被修復記念　文化財が紡ぐ佐倉の歴史―宝金剛時と北条氏勝』宝金剛寺，pp.40-47，2022年２月，査読なし

7　その他
くらしの植物苑特別企画「伝統の桜草」『友の会ニュース』216，p.2，国立歴史民俗博物館振興会，2021年８月
特集展示「もの」からみる近世「和宮ゆかりの雛かざり」『友の会ニュース』219, p.2, 国立歴史民俗博物館振興会，2022年２月

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基盤研究「歴博研究映像の制作・保存・活用―苧麻文化の映像記録化を中心に」（研究代表：春日　聡）共同研究者（2019年度～2021年度）
基盤研究「日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築」（研究代表：青木隆浩）研究副代表（2020年度～2022年度）
③　機構
基幹研究プロジェクト「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用」（研究代表：日高　薫）共同研究者（2016～2021年度）

4　主な展示・資料活動
くらしの植物苑特別企画「季節の伝統植物」展示プロジェクト副代表
第３室特集展示「和宮ゆかりの雛かざり」（2022年２月22日～４月３日）展示プロジェクト代表

5　教育
総研大フォーラム「あそびを多角的にみつめる」にて報告「あそびとよそおい」（2021年12月５日，オンライン）

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
「野村正治郎とアメリカ人の顧客―ルーシー・トゥルマン・アルドリッチの売場合」と題する論考を刊行予定の『日本染織コレクションの形成とその美術史的価値観の確立に関する研究（仮題）』（小山弓弦葉編）に寄稿した。

島津　美子　Shimadzu Yoshiko　准教授（2018.4～）

【学歴】金沢大学理学部卒（1999），東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻（システム保存学）修士課程修了（2001）
【職歴】東京文化財研究所修復技術部研究補佐員（2001），オランダ文化遺産研究所（Instituut Collectie Nederland）プロジェクト研究員（2004），独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所特別研究員（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2013.7），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2018）
【最終学位】Ph.D.（アムステルダム大学）（2015年２月取得）
【専門分野】保存科学【主な研究テーマ】歴史資料の彩色技法材料の調査研究【所属学会】文化財保存修復学会，国際文化財保存学会，国際博物館会議保存国際委員会【研究目的・研究状況・メールアドレス】彩色材料およびその製造方法，彩色技法等を明らかにし，資料の帰属する時代や地域における技術レベルや素材の流通などを探る。現在は，国内の近世から近代にかけての彩色材料についての調査分析を実施中。

●主要業績

1．【論文】島津美子，岡田靖，研究ノート「近世・近代の木彫仏像に施された彩色の技法材料―山形県龍泉寺，塩田行屋，法来寺の事例―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第206集，pp.61-87，2017年３月）
2．【論文】研究ノート「幕末明治期の錦絵に用いられた色材調査―赤色，黄色，緑色について―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第200集，pp.83-96，2016年１月）
3．【調査報告】「第２窟壁画の材料および製作技法の調査」（東京文化財研究所編『アジャンター壁画の保存修復に関する調査研究―第２窟，第９窟壁画の保存修復と自然科学調査（2009～2011年）―』，pp.97-120，東京文化財研究所，2014年３月）
4．【調査報告】Chapter ８; Painting Materials and Techniques of the Ajanta Wall Paintings. In：Aoki S. et al.（eds）Conservation and Painting Techniques of Wall Paintings on the Ancient Silk Road. Cultural Heritage Science. Springer, Singapore. Pp.137-156，2021.02.
5．【報告書】Chemical and optical aspects of appearance changes in oil paintings from the 19th and early 20th century，Molart Reports 15. University of Amsterdam，02/2015.

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書
共編著『国立歴史民俗博物館研究報告　第230集［共同研究］日本近世における彩色の技法と材料の受容と変遷に関する研究』244頁，2021年12月25日
平井松午・島津美子編『〈稿本・大名家本〉伊能図研究図録』344頁，創元社，2022年３月７日

2　論文
「近世近代における群青と洋紅」『国立歴史民俗博物館研究報告』第230集, pp.215-244, 2021年12月25日（査読有）
島津美子・岡田靖「近世・近代の木彫仏像に施された彩色の技法と色材」『国立歴史民俗博物館研究報告』第230集，pp.135-167，2021年12月25日（査読有）

3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
「伊能図にみられる彩色材料と技法」，『〈稿本･大名家本〉伊能図研究図録』（平井松午･島津美子編），創元社，pp.323-330，2022年３月７日

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発
「錦絵の摺りの技法と鯰絵の絵の具」企画展示図録『鯰絵のイマジネーション』国立歴史民俗博物館，pp.108-109，2021年７月13日

5　学会・外部研究会発表
「伊能図の彩色材料と彩色技法」日本地理学会春季学術大会シンポジウム「伊能図を検証する―伊能忠敬の地図作製―」，2022年３月19日

7　その他

「化学の視点で歴史をみる」『REKIHAKU』４号，国立歴史民俗博物館，pp.76-79，2021年10月26日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基幹研究「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成」（研究代表者：松木武彦），共同研究者，2019年度～2021年度

基盤研究「日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築」（研究代表者：青木隆浩），共同研究者，2020年度～2022年度

基盤研究「秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究」（研究代表者：下田誠），共同研究者，2021年度～2023年度

基盤研究「高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究 ―額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に―」（研究代表者：下村周太郎），共同研究者，2021年度～2023年度

２　外部資金による研究

科研基盤（C）19世紀の日本における絵具素材の移り変わり，研究代表者，2021年度～2023年度

科研基盤（B）自然科学的調査手法を用いた黄檗様彫刻の国内受容と変容に関する総合的研究（研究代表者：長谷洋一（関西大学）），研究分担者，2019年度～2021年度

科研基盤（A）伊能図の成立過程に関する学際的研究―忠敬没後200年目の地図学史的検証―（研究代表者：平井松午（徳島大学）），研究分担者（2019年度～），2018年度～2021年度

三　社会活動等

１　館外における各種委員

文化財保存修復学会理事

２　講演・カルチャーセンターなど

「伊能図を彩るさまざまな絵具」伊能図完成200年記念シンポジウム「伊能図の魅力を科学する！」佐原文化会館／神戸市立博物館，2021年７月17日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

彩色彫刻など資料の現地調査を予定していたが，COVID-19感染拡大による移動制限等の期間が長く，現地調査はほとんど実施できなかった。次年度の資料調査に向けて，文献調査やポータブルの分析調査器材の準備等を行った。

鈴木　卓治　SUZUKI Takuzi　教授（2017.1～）

併任：総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授（2017～），生年：1965

【学歴】電気通信大学電気通信学部情報数理工学科（1988年卒業），電気通信大学大学院電気通信学研究科情報工学専攻博士後期課程（1994年単位取得退学），千葉大学大学院融合科学研究科情報科学専攻博士後期課程（2015年修了）【職歴】国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（1994），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2016），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2017），国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2017），博物館資源センター長併任（2019～2020）

【学位】博士（学術）（千葉大学）（2015年取得）【専門分野】ソフトウェア学，色彩と画像の数理【主な研究テーマ】博物館における研究・展示・広報を支援するシステムの研究，とくにネットワーク，データベース，色彩と画像の情報処理【所属学会】情報処理学会，日本ソフトウェア科学会，日本色彩学会，情報知識学会

●主要業績

1．【論文】鈴木卓治・安達文夫・大久保純一・小林光夫：「錦絵資料の測色画像データベースの構築と色彩分析の試み」，『人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん2004）論文集』，IPSJ Symposium Series, Vol.2004，No.17，pp.75-82（2004―12）．（平成17年度情報処理学会山下記念研究賞（人文科学とコンピュータ研究会推薦）受賞対象論文）
2．【論文】Takuzi Suzuki, Misaki Kan'no, Noriko Yata, Yoshitsugu Manabe：Detection of transition of red colours on Nishiki-e printings from colour-corrected digital images, Journal of the International Color Association, Vol.14，pp.57-66（2015-04-27）
3．【論文】鈴木卓治：「蒔絵万年筆資料のマルチアングル画像撮影ならびに展開図作成のための技術開発」，『国立歴史民俗博物館研究報告』206号，pp.39-59，2017年３月
4．【展示】歴博常設展示の第３，第６，第４室各室のリニューアルならびに数多くの企画展示における情報端末の設置ならびに情報コンテンツの提供に関する業務に従事
5．【展示】2016年度企画展示「デジタルで楽しむ歴史資料」，国立歴史民俗博物館，展示プロジェクト代表，2017年３月14日～５月７日

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発
鈴木卓治，樋口雄彦：教化・啓蒙から初等・中等教育へ，「さわらずめくり」による非接触型めくりコンテンツ，企画展示「学びの日本史」，国立歴史民俗博物館，2021年10月12日～12月12日
鈴木卓治，樋口雄彦：伝統の継承と「江戸」の追憶，「さわらずめくり」による非接触型めくりコンテンツ，企画展示「学びの日本史」，国立歴史民俗博物館，2021年10月12日～12月12日
鈴木卓治，樋浦郷子：明治期における西洋音楽の受容と教育，「めくりジュークボックス」およびWebコンテンツによる非接触型めくり音楽再生コンテンツ，企画展示「学びの日本史」，国立歴史民俗博物館，2021年10月12日～12月12日

5　学会・外部研究会発表
「「どこでもオンライン」構想とオンライン配信端末の試作」「画像電子学会第３回デジタルミュージアム・人文学（DMH）研究会」オンライン，2022年３月10日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
③　機構
機関拠点型基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」（研究代表者　西谷大），地域連携・教育ユニット，研究分担者
広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」（主導機関：国文学研究資料館）「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」（2016～2021年度）（研究代表者　小倉慈司），研究分担者
ネットワーク型基幹研究プロジェクト日本関連在外資料調査研究・活用「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」（2016～2021年度）（プロジェクト代表者　日高　薫），研究分担者

4　主な展示・資料活動
［総合展示］第１室，第３室，第４室，第５・６室各展示プロジェクト委員（情報端末）
企画展示「歴博色尽くし（仮称）」（2023年秋開催予定）展示プロジェクト代表

三　社会活動等

1　館外における各種委員
人間文化研究機構総合情報発信センター情報部門会議委員（2016年４月より継続中）
人間文化研究機構総合情報発信センター高度連携情報技術委員会委員（資源共有化事業委員会から改称，2013年４月より継続中）
人間文化研究機構情報セキュリティ委員会委員（2016年４月より継続中）
一般社団法人日本色彩学会代議員（関東支部選出，2021年５月より継続中）
一般社団法人日本色彩学会画像色彩研究会主査（2014年４月より継続中）

一般社団法人日本色彩学会学会誌広報委員会委員（2016年７月より継続中）

四　活動報告

２　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの

可視化高度化経費による「どこでもオンライン」事業の実施。「どこでもオンライン」事業では，歴博の教職員がいる場所はどこでも情報発信の拠点とする，というコンセプトのもとに，次の３種類のWeb会議端末の設計・試作を実施した。「どこでも展示解説」端末，「どこでも展示解説ミニマム」端末については2022年度に操作マニュアルを整備し，館内の教職員利用に供する予定である。

1．「どこでもシンポジウム」：Web会議参加のための（インターネット接続やバッテリーを含む）機器一式を人間がもって運べるアタッシェケースに詰め込んだ，どこにいてもシンポジウムのパネラーになれる可搬型端末。

2．「どこでも展示解説」：歴博の常設展示室・企画展示室のどこからでもWeb会議に参加でき，展示場の画像ならびに解説者の音声および解説画面を配信することができる（機器一式をワゴンに積んだ）移動型端末。展示室の参加者と別会場の参加者が同じ展示解説を楽しむことができる。

3．「どこでも展示解説ミニマム」：野外（考古の発掘現場等を想定）からWeb会議に参加でき，現場の映像ならびに解説者の音声を配信することができる（スマートフォンを利用した）携帯型端末。解説者が端末を操作して現場中継を行い，参加者は別会場で画像・音声を視聴する形を想定している。

３　研究・調査プロジェクト報告

可視化高度化経費による「どこでもオンライン」事業にともない，端末試作のための工具類を主に購入した。（機材・部品類は可視化高度経費から購入し，本経費は資料固定・回転撮影用冶具の制作にも利用できる工具の購入に充当した。）

関沢まゆみ　SEKIZAWA Mayumi　副館長・研究総主幹（2021～），教授（2011～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2011～），生年：1964

【学歴】東京女子大学文理学部史学科（1986年卒業），筑波大学大学院地域研究研究科日本文化研究コース修士課程（1988年修了）

【職歴】帝京大学文学部非常勤講師（1993），早稲田大学オープンカレッジ非常勤講師（1993），東京家政学院大学人文学部非常勤講師（1994），東京学芸大学教育学部非常勤講師（1994），筑波大学第二学群非常勤講師（1996），国立歴史民俗博物館民俗研究部助手（1998），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2005），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2011），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2011），研究推進センター長併任（2013～2014，2017～2019），副館長併任（2021～2022）

【学位】文学博士（筑波大学）（2001年取得）【専門分野】民俗学【主な研究テーマ】社会・信仰・儀礼に関する民俗学的研究，高度経済成長と民俗の変化【所属学会】日本民俗学会，日本文化人類学会，比較家族史学会【研究目的・研究状況】高度経済成長と民俗の変化に関する共同研究による，資料情報の蓄積と論文作成，また戦後民俗学でやや等閑視されてきた比較研究法の有効性を再確認する実践例を示す試みなどが中心的課題となっている。

●主要業績

1．【単著】『宮座と老人の民俗』266頁，吉川弘文館　2001年２月
2．【単著】『隠居と定年―老いの民俗学的考察―』196頁，臨川書店　2003年３月
3．【単著】『宮座と墓制の歴史民俗』305頁，吉川弘文館　2005年２月
4．【単著】『現代「女の一生」―人生儀礼から読み解く―』244頁，NHK出版　2008年６月
5．【単編著】『民俗学が読み解く葬儀と墓の変化』（国立歴史民俗博物館研究叢書２），160頁，朝倉書店，2017年３月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書

編著『講座日本民俗学４　社会と儀礼』209頁，朝倉書店，2021年12月１日

2　論文

「総論」『講座日本民俗学４　社会と儀礼』朝倉書店，pp.1-8，2021年12月１日

「村落」『講座日本民俗学４　社会と儀礼』朝倉書店，pp.9-28，2021年12月１日

「葬送と墓制」『講座日本民俗学４　社会と儀礼』朝倉書店，pp.163-175，2021年12月１日

「祭礼と祭祀組織」『講座日本民俗学３　行事と祭礼』，朝倉書店，pp.163-180，2021年10月１日

「葬儀の変化に対する地域ごとの対応の差」『国立歴史民俗博物館研究報告』234，国立歴史民俗博物館，pp.297-310，2022年３月31日（査読有）

「入浴習俗の実態と特徴―近代の農村「奈良県風俗志」の分析から―」『〈洗う〉文化史―「きれい」とは何か―』吉川弘文館，国立歴史民俗博物館・花王株式会社編，pp.42-61，2022年２月20日

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発

映像：関沢まゆみ・新谷尚紀「久礼八幡宮秋季例大祭　御神穀祭」毎日映画社，2022年

7　その他

「外食の意味と魅力」『vesta』123，味の素食の文化センター，pp.20-25，2021年８月１日

「総論　民俗伝承の現場から」（民俗を尋ねて第Ⅳ期）『學史會会報』952，學史會，pp.97-102，2022年１月１日

「若狭大島のニソの杜」『學史会會報』952，學史會，pp.103-109，2022年１月１日

「花見の民俗」『くらしの植物苑だより』415，pp.1-2，2022年３月26日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基幹研究「水をめぐる生活世界―実用と信仰の視点から―」代表，2020～2022年度

「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成」(松木武彦研究代表)副代表，2019～2021年度

4　主な展示・資料活動

総合展示第６室「高度経済成長と生活の変貌」担当

5　教育

東京女子大学国際教養学部非常勤講師（民俗学）

國學院大学大学院文学研究科兼任講師（民俗学特論）

三　社会活動等

1　館外における各種委員

島根県古代文化センター企画運営委員，栃木県重要文化財保護審議委員，新宿区文化財保護審議会委員，川崎市文化財審議会委員，千葉県博物館協議会委員，昭和館運営専門委員会委員，文化審議会専門委員（文化財分科会），文化財保存活用専門委員会専門委員

2　講演・カルチャーセンターなど

「出産と禁忌―民俗学の視点から―」八千代市らいてうの会・男女共同参画センター共催講座，八千代台東南公共センター，2021年11月７日

「葬儀の変化と盆行事―民俗調査の現場から―」夏安居，千葉市稲毛区毘沙門堂，2021年６月２日

「お盆の話１―盆行事の地域差とその意味―」らいてうの会，八千代台東南公共センター，2021年５月27日

「お盆の話２―葬儀の変化とお盆の意味―」らいてうの会，八千代台東南公共センター，2021年７月15日

「花見の民俗」第276回くらしの植物苑観察会，くらしの植物苑，2022年３月26日

4　社会連携

②　共同研究

花王株式会社との産学共同研究「清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究」代表，2017～2022年

③　講演会・シンポジウム

令和３年度食文化機運醸成事業オンラインシンポジウム，2022年３月７日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

高度経済成長と民俗の変化を意識して,『講座日本民俗学４　社会と儀礼』（朝倉書店　2021年）を編集した。また産学共同研究の成果として国立歴史民俗博物館･花王株式会社編『〈洗う〉文化史―「きれい」とは何か―』（吉川弘文館　2022年）を編集した。

高田　貫太　TAKATA Kanta　教授（2021.1～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2021.1～）生年：1975

【学歴】岡山大学文学部史学科（1997年卒業），岡山大学大学院文学研究科史学専攻修士課程（1999年修了），大韓民国慶北大学校大学院考古人類学科博士課程（2004年修了）
【職歴】大韓民国慶北大学校考古人類学科非常勤講師（2003），岡山大学埋蔵文化財センター助手（2004），奈良文化財研究所都城発掘調査部研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2011），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2021.1），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2021.1）
【学位】文学博士（大韓民国慶北大学）（2005年取得）【専門分野】考古学【主な研究テーマ】古墳時代における日本列島と朝鮮半島の交流史【所属学会】韓国嶺南考古学会，韓国考古学会【研究目的・研究状況】近年は，朝鮮半島栄山江流域と倭の交流史について日朝双方の視点からその特色を浮き彫りにすることに努めている。

●主要業績

１．【単著】『古墳時代の日朝関係』吉川弘文館，363頁，2014年３月
２．【単著】『海の向こうから見た倭国』講談社，304頁，2017年２月
３．【単著】『「異形」の古墳　朝鮮半島の前方後円墳』KADOKAWA，286頁，2019年９月
４．【単著】『アクセサリーの考古学　倭と古代朝鮮の交渉史』吉川弘文館，273頁，2021年５月１日
５．【論文】「古墳出土龍文透彫製品の分類と編年」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集, pp.121-141, 2013年３月）（査読付き）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

１　著書

『アクセサリーの考古学　倭と古代朝鮮の交渉史』吉川弘文館，273頁，2021年５月１日

２　論文

「咸安末尹山13号墳出土の直弧文付骨（鹿角）製品について」『咸安末尹山13号墳と周辺古墳』，東亜細亜文化財研究院，pp.366-379，2021年12月24日

「日本考古学からみた新徳古墳群の学術的意義」『咸平禮徳里新徳古墳の文化遺産価値と保存政策方向』（함평예덕리 신덕고분의 문화유산가치와 보존 정책방향），大韓民国全羅南道・大韓文化財研究院，pp.119-142，2021年11月21日

「咸平新徳１号墳出土冠・飾履について」『咸平禮徳里新徳古墳―論考篇―』，韓国国立光州博物館・全羅南道・咸平郡，pp.24-43，2021年５月３日（査読有）

「考古学による日朝関係史から見た「磐井の乱」」『国立歴史民俗博物館研究報告』231，pp.245-266，2022年２月25日（査読有）

５　学会・外部研究会発表

「アクセサリーからみた倭と古代朝鮮の交渉史―５世紀～６世紀前葉における九州地域の事例―」弘益財団主催，e-Conference call https://www.youtube.com/watch?v=RSaoD１yw-rA&t=115s, https://www.youtube.com/watch?v=uNICOvL０BOk&t=46s，韓国　弘益財団，2021年12月３日

「日本考古学からみた新徳古墳群の学術的意義」国際学術大会「咸平禮徳里新徳古墳の文化遺産価値と保存政策方向」オンライン，2021年10月21日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基盤研究「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」（2019～2021年度）研究代表者

③　機構

人間文化研究機構　基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「北東アジア地域研究」（拠点　国立民族学博物館）

3　国際交流事業

「国立文化財研究所との相互交流事業」（研究代表者：大久保純一，相手機関：韓国国立文化財研究所，2015～2020年度）※2015年３月に学術交流協定を延長

「先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究Ⅱ」（研究代表者：高田貫太，相手機関：韓国国立中央博物館，2019～2021年度）※2016年４月に学術交流協定を延長

4　主な展示・資料活動

総合展示第１室展示プロジェクト委員

国際企画展示『加耶―東アジアを生きた，ある王国の歴史―』展示プロジェクト委員代表

5　教育

東洋大学文学部非常勤講師

三　社会活動等

1　館外における各種委員

群馬県立歴史博物館企画展示「綿貫観音山古墳のすべて」展示プロジェクト委員

韓国考古学会会誌『韓国考古学報』編集委員

韓国嶺南考古学会誌『嶺南考古学』編集委員

韓国湖南考古学会誌『湖南考古学』編集委員

韓国中央文化財研究院発行専門雑誌『中央考古』編集委員

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業　委託研究者

2　講演・カルチャーセンターなど

「アクセサリーからみた倭と古代朝鮮の交渉史」令和３年度岡山県古代吉備文化財センター・岡山県立図書館連携講演会，オンライン，2022年１月22日

「朝鮮半島の前方後円墳」歴史と文化を学ぶ会シンポジウムホテルメトロポリタン高崎，2021年10月31日

「古墳時代のアクセサリー――百舌鳥･古市古墳群が営まれた頃の倭と古代朝鮮―」令和３年度世界遺産「百舌鳥･古市古墳群」の魅力を味わう市民講座，羽曳野市市民会館ホール，2021年11月20日

四　活動報告

2　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの

第四期将来計画委員会委員

国立人間文化研究機構将来構想検討委員会委員

3　研究・調査プロジェクト報告

国際企画展示「加耶」の開催に向けて，展示や図録の内容の充実に向けて，調査研究を行った。コロナ禍の影響のため韓国における調査はかなわなかったが，韓国国立中央博物館との協議，研究を進める中で，2022年10月４日に展示を開催することを合意し，図録の内容などについてもほぼ確定することができた。

田中　大喜　TANAKA Hiroki，准教授（2014.4～）

併任：総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授（2014.10～），生年：1972

【学歴】学習院大学文学部史学科（1996年３月卒業），学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士前期課程（1999年３月修了），学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程（2005年３月修了）【職歴】学習院大学文学

部助手（2005年４月～2006年３月），東京大学史料編纂所研究機関研究員（2005年４月～2006年３月），駒場東邦中学校・高等学校教諭（2006年４月～2014年３月），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2014年４月～），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2014年10月～）【学位】博士（史学，学習院大学）（2005年取得）【専門分野】日本中世史【主な研究テーマ】中世武士団･武家政権論，中世地域社会論【所属学会】歴史学研究会，日本史研究会，日本歴史学会，地方史研究協議会，鎌倉遺文研究会，学習院史学会【研究目的・研究状況】武士団・武家政権の研究を通して，およそ700年間にわたり武士の支配が継続した歴史を持つ日本社会の特質を追究することを目的とする。2019年度より，東国武士団の西遷・北遷に関する共同研究を実施している。【メールアドレス】daiki-t@rekihaku.ac.jp

●主要業績

１．【単著】『中世武士団構造の研究』376頁，校倉書房，2011年８月
２．【単著】『新田一族の中世　「武家の棟梁」への道』230頁，吉川弘文館，2015年９月
３．【単著】『対決の東国史３　足利氏と新田氏』226頁，吉川弘文館，2021年12月
４．【編著】田中大喜『中世武家領主の世界　現地と文献・モノから探る』352頁，勉誠出版，2021年８月
５．【共編】田中大喜・荒木和憲・村木二郎『企画展示　中世武士団　地域に生きた武家の領主』184頁，国立歴史民俗博物館，2022年３月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

１　著書
単著『対決の東国史３　足利氏と新田氏』吉川弘文館，226頁，2021年12月26日
編著『図説　鎌倉幕府』戎光祥出版，204頁，2021年６月10日
編著『中世武家領主の世界　現地と文献・モノから探る』352頁，勉誠出版，2021年８月20日

２　論文
「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』所収文書群の書誌的考察」『藤波家旧蔵史料の調査・研究　二〇一九年度・二〇二〇年度一般共同研究　研究成果報告書』pp.47-104，東京大学史料編纂所，2021年11月30日（査読無）

４　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発
共編著：企画展示図録『中世武士団　地域に生きた武家の領主』184頁，国立歴史民俗博物館，2022年３月15日

５　学会・外部研究会発表
「シモン・チェルカフスキ『ボン大学の地頭データベース』へのコメント」，国際研究集会「日本中世史データベースの国際比較」，オンライン，2021年５月28日

７　その他
「初期鎌倉幕府の政変と武蔵武士」『歴史研究』696号，戎光祥出版，pp.24-32，2021年11月25日
「源頼朝は最初から武家の棟梁だったのか」『NHK大河ドラマ歴史ハンドブック　鎌倉殿の13人〈北条義時とその時代〉』NHK出版，pp.62-67，2022年１月５日
監修『大河ドラマ鎌倉殿の13人　北条義時とその時代』「よくわかる鎌倉幕府　鎌倉時代がわかるとドラマも10倍面白くなる」，pp.49-127，宝島社，2021年12月25日
「本当は胴丸なのですが……」『REKIHAKU』５号，国立歴史民俗博物館，pp.80-81，2022年２月26日
「歴博への招待状　企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」『REKIHAKU』５号，国立歴史民俗博物館，pp.103-104，2022年２月26日
「田中　大喜，高橋　秀樹，木下　聡：鼎談　変貌する東国史を読み解く」『本郷』158号，吉川弘文館，pp.2-15，2022年３月１日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況
①　歴博
「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究」（代表：家永遵嗣）共同研究員（副代表），2020～2022年度
②　他の機関

東京大学史料編纂所一般共同研究「藤波家旧蔵史料の調査・研究」（代表：高橋秀樹）共同研究員，2021年度
東京大学史料編纂所一般共同研究「中世におけるトカラ･奄美･琉球関係史料の学際的研究」（代表:村木二郎）共同研究員，2021年度

2　外部資金による研究
科学研究費補助金基盤研究（A）「琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家」（代表:村木二郎）研究分担者，2018～2021年度
科学研究費補助金基盤研究（B）「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」研究代表者，2019～2022年度
科学研究費補助金基盤研究（C）「中世東国武家本領の構造的特質に関する復元的研究」（代表：高橋修）研究分担者，2021～2024年度

4　主な展示・資料活動
2020年度新･特集展示「海の帝国琉球―八重山･宮古･奄美からみた中世―」（展示代表:村木二郎）展示プロジェクト委員
2021年度企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」展示プロジェクト委員（展示代表）
企画展示「陰陽道と暦（仮）」（展示代表：小池淳一）展示プロジェクト委員

5　教育
上智大学文学部非常勤講師，「古文書学特論」担当
東京都立大学人文社会学部非常勤講師，「日本史学特殊講義Ⅰ」担当
東邦大学理学部非常勤講師，「総合演習Ⅳ」担当
筑波大学附属高等学校「総合的な探究の時間」評価講師

三　社会活動等

2　講演・カルチャーセンターなど
「源氏三代将軍の朝廷『外交』」，「鎌倉・源氏三代将軍の時代―承久の乱への軌跡」朝日カルチャーセンター千葉教室，2021年４月17日
「中世関東の街道と武士」，「中世人の物流と移動を考える」朝日カルチャーセンター千葉教室，2021年９月24日
「中世の地域社会と武家の領主」早稲田大学エクステンションセンター早稲田校，2021年９月27日・10月11日・10月25日・11月１日・11月15日・11月29日
「企画展示『中世武士団―地域に生きた武家の領主―』への招待」，朝日カルチャーセンター千葉教室，2022年３月19日
「中世の古文書を読む」朝日カルチャーセンター千葉，通年

3　マスコミ
『中世武家領主の世界　現地と文献・モノから探る』山陰中央新報（朝刊），2021年９月５日
『図説　鎌倉幕府』朝日新聞（朝刊），2022年１月15日
『対決の東国史３　足利氏と新田氏』朝日新聞（夕刊），2022年１月26日

4　社会連携
③　講演会・シンポジウム
「中世をのこすまち益田―共同研究からみえた姿―」，日本遺産シンポジウム「中世の宝庫　益田を語ろう」益田市人権センター，2022年３月27日

四　活動報告

2　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの
准教授候補者選考委員会委員
プロジェクト研究員選考委員会委員

3　研究・調査プロジェクト報告
胎内市教育委員会所蔵の地籍図の調査・撮影を行い，越後国奥山荘故地の地理情報を収集した。また，肥前国小城郡故地と奥山荘故地の現地調査を実施し，当該地域における中世武家領主の本拠景観復元に向けた情報を収集した。

4　その他

2019年度から開始した科学研究費補助金基盤研究（B）「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」の今年度の研究経過・成果については，「外部資金による研究」の章を参照のこと。

仁藤　敦史　NITO Atsushi　教授（2008～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2008～）

【学歴】早稲田大学第一文学部日本史学専攻（1982年卒業），早稲田大学大学院文学研究科史学（日本史）専攻博士前期課程（1984年修了），早稲田大学大学院文学研究科史学（日本史）専攻博士後期課程（1989年満期退学）【職歴】早稲田大学第一文学部助手（1989），国立歴史民俗博物館歴史研究部助手（1991），同助教授（1999），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2008），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2008），【役職】総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻長（2012-13），広報連携センター長（2017-2018）【その他】国立歴史民俗博物館三十年史編纂委員長（2011-2014）【学位】博士（文学）（早稲田大学1998取得）【専門分野】日本古代史【主な研究テーマ】都城制成立過程の研究／Establishment process of Japanese ancient capital cities，古代王権論／Theoretical study of ancient sovereignty，古代地域社会論／Ancient local societies【所属学会】歴史学研究会，木簡学会，史学会，日本史研究会，条里制・古代都市研究会

●主要業績

1．【著書】『卑弥呼と台与』山川出版社，90頁，2009年10月
2．【著書】『都はなぜ移るのか―遷都の古代史―』吉川弘文館，246頁，2011年12月
3．【著書】『古代王権と支配構造』吉川弘文館，361頁，2012年３月
4．【原著論文】「倭国の成立と東アジア」（『岩波講座　日本歴史』１原始・古代１，岩波書店，pp.137-167，2013年11月）（査読有）
5．【著書】『藤原仲麻呂』中央公論新社，中公新書，258頁，2021年６月25日

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書
単著『藤原仲麻呂』中央公論新社，中公新書，258頁，2021年６月25日
共著「古代国家形成期の王権と東国」『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』，六一書房，2022年３月30日，pp.251-262，査読有り

2　論文
「天平期の疫病と風損―国家による対策と地域―」『静岡県地域史研究』11，pp.61-84，静岡県地域史研究会，2021年９月23日

5　学会・外部研究会発表
「壬生部とミヤケによる開発と渡来人」積石塚・渡来人研究会，山梨県甲府市，2021年７月31日
（要旨は，「講演会から」『山梨新報』2021年８月13日朝刊，２面に掲載）

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博
基幹研究「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成」（研究代表者：松木武彦）分担者（2019～2021年度）
館蔵資料型基盤研究「高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究―額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に―」副代表（2021～2023年度）
報告「額田寺伽藍并条里図の研究史」オンライン研究会，2021年11月21日

③　機構

基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」ユニット「古代の百科全書『延喜式』の多文野協働研究」分担者（2016～2021年度）

2　外部資金による研究

科学研究費基盤研究（C）「古代荘園と在地社会についての高度情報化研究」（研究代表者, 2020年度～2022年度）

科学研究費基盤研究（B）「格･式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」（研究分担者, 2020年度～2022年度）

桜井市纒向学研究センター共同研究員（2013年度～）

3　国際交流事業

「古代公文書の成立前史―漢字・暦・印・文書様式―」国際研究集会「中世文書の様式と東アジアにおける国際比較」 2021年11月20日（土），Zoom開催

4　主な展示・資料活動

2022年度企画展示「いにしえが，好きっ！―近世好古図録の文化誌―」展示プロジェクト委員

2022年度企画展示「加耶―古代東アジアを生きた，ある王国の歴史―」展示プロジェクト委員

正倉院文書複製事業

5　教育

明治大学大学大学院文学研究科兼任講師（日本史特論）通年

早稲田大学文化構想学部非常勤講師（国家形成論）後期

三　社会活動等

1　館外における各種委員

条里制・古代都市研究会評議員

正倉院文書研究会委員

奈良県桜井市纒向学研究センター共同研究員

島根県古代文化センター企画運営委員

2　講演・カルチャーセンターなど

「百済三書の成立と史料批判」全５回，トンボの眼連続講座，2021年４月４日･５月１日･６月５日･７月３日，ZOOM講座

「聖徳太子の虚像と実像―同時代史料から考える―」朝日カルチャーセンター立川，立川ルミネ，2021年７月７日・21日

「邪馬台国論争の現在と課題」全３回，令和アカデミー倶楽部，新橋校，2021年７月10日・９月４日・10月13日

「変革期の王権と外交―継体･欽明朝を考える―」全５回，早稲田大学イクステンションセンター，八丁堀校，2021年７月29日・８月５日・８月19日・８月26日・９月２日

「天平期の疫病とその対策―国家と地域―」全２回，朝日カルチャーセンター新宿，新宿三井住友ビル，2021年８月19日・９月９日

「ヤマト王権の成立と外交」全５回，トンボの眼連続講座，2021年８月22日・９月11日・10月９日・11月３日・12月11日，ZOOM講座

「藤原仲麻呂からみた奈良時代史―異能の政治家の生涯―」全２回, 朝日カルチャーセンター立川, 立川ルミネ, 2021年10月６日・10月20日

「遷都の古代史―歴代遷宮から平安定都まで―」第177回　奈良学文化講座，東京都品川区メルパルクホール東京，2021年11月28日

「七世紀前半の王権と外交」全６回，早稲田大学イクステンションセンター，八丁堀校，2022年12月11日・2022年１月27日・２月３日・２月10日・２月17日・２月24日，ZOOM講座

「推古期の王権を考える」全５回，トンボの眼連続講座，2022年２月11日・３月13日，ZOOM講座

「邪馬台国論の現状と課題」全４回，朝日カルチャーセンター立川，立川ルミネ，2022年３月２日・３月30日

3　マスコミ

「卑弥呼死後の騒乱と新女王・台与の治世」『週刊朝日ムック　歴史道』18，朝日新聞出版，pp.76-79，2021年11月

「解く　邪馬台国への道　当時の中国の世界像」読売新聞文化部編『史書を旅する』中央公論新社，P.17，2021年10月

宮代栄一「ひもとく―古代史最前線―」朝日新聞朝刊，（『藤原仲麻呂』書評）2121年10月２日

今谷明「書評　藤原仲麻呂」『週刊エコノミスト』，2021年８月27日号

四　活動報告

２　特別委員会委員など館長からの委嘱を受けたもの
運営会議委員・人事委員

３　研究・調査プロジェクト報告
古代の王権および都城を研究するため，木簡学会への参加により最新の発掘情報および出土文字資料の情報収集をすることができた。また，関係書籍を購入した。

林部　均　HAYASHIBE Hitoshi　教授（2013～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2013～），生年：1960

【学歴】関西大学文学部史学地理学科（1983年卒業）
【職歴】奈良県立橿原考古学研究所嘱託（1983），奈良県立橿原考古学研究所（奈良県教育委員会）技師（1985），同主任研究員（1992），同総括研究員（2006），関西大学文学部非常勤講師（2002～2005），三重大学人文学部非常勤講師（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2010），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2013～），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2013～），研究推進センター長（2014～2016），副館長・研究総主幹（2017～2020），専修大学文学部非常勤講師（2013），早稲田大学大学院非常勤講師(2014)，専修大学大学院非常勤講師(2015)，東京大学大学院人文社会系研究科客員教授(2020～)
【学位】博士（文学）（奈良女子大学）（2001年取得）【専門分野】日本考古学【主な研究テーマ】東アジアの古代宮都（王宮・王都）の研究，考古学からみた地域社会の研究【所属学会】日本考古学協会，考古学研究会，日本史研究会，条里制・古代都市研究会

●主要業績

１．【著書】『古代宮都形成過程の研究』378頁，青木書店，2001年３月
２．【著書】『飛鳥の宮と藤原京―よみがえる古代王宮―』259頁，歴史文化ライブラリー249，吉川弘文館，2008年３月
３．【論文】「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」（『考古学雑誌』72-１，pp.31-71，日本考古学会，1986年９月）（査読あり）
４．【論文】「古代宮都と郡山遺跡･多賀城―古代宮都からみた地方官衙論序説―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集，pp.99-131，2011年３月）（査読あり）
５．【調査報告書】編著『飛鳥京跡Ⅲ―内郭中枢の調査―』253頁，奈良県立橿原考古学研究所，2008年３月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

３　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など
「飛鳥宮跡とその周辺」『古代日本対外交流史事典』pp.110-121，八木書店，2021年11月
「東アジアの都城制」『古代日本対外交流史事典』pp.274-285，八木書店，2021年11月

７　その他
「飛鳥宮跡を調査する」『飛鳥の風たより』pp.6-13，飛鳥を愛する会，2021年12月

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基幹研究プロジェクト（広領域型）「異分野融合による総合書物学の構築」（主導機関：国文学研究資料館）「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」（研究代表者　小倉 慈司）共同研究員，2016年度～2021年度
基幹研究「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成」（研究代表者　松木武彦）共同研究員，2019年度～2021年度

基幹研究「交流・環境から見たオホーツク文化・擦文文化，アイヌ文化―その成立・展開過程―」（研究代表者　北海道博物館鈴木琢也）副代表，準備研究（2021年３月13日　北海道博物館）

②　他の機関

基幹研究プロジェクト「地域研究推進事業・北東アジア地域研究」国立民族学博物館（研究代表者：池谷和信）共同研究員，2016～2021年度

４　主な展示・資料活動

総合展示第１室「原始・古代」新構築プロジェクト委員

５　教育

東京大学大学院人文社会系研究科　客員教授（2021.4.１～2022.3.31），「考古学特殊講義ⅩⅦ・ⅩⅧ」「日本古代の考古学１・２」

三　社会活動等

１　館外における各種委員

条里制・古代都市研究会評議委員，考古学研究会全国委員（関東），文化審議会専門委員（文化財分科会第一専門調査会），古墳壁画の保存活用に関する検討会委員（文化庁），日本学術会議連携会員（史学委員会　文化財の保存と活用に関する文科会　第25期），奈良県立橿原考古学研究所共同研究員，国立民族学博物館共同研究員，上野国府等調査委員会委員（前橋市教育委員会），総社古墳群調査検討委員会委員（前橋市教育委員会），松山市文化財保護審議会久米官衙遺跡群調査検討部会委員（松山市教育委員会），福原長者原遺跡調査指導委員会委員（行橋市教育委員会），粕屋町文化財調査指導委員会委員（粕屋町教育委員会），史跡鋳銭司跡調査検討委員会委員（山口市教育委員会），史跡鋳銭司跡保存活用計画策定委員会委員（山口市教育委員会），史跡秋田城跡環境整備指導委員会副委員長（秋田市教育委員会）

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

列島の各地は，多様な自然環境，歴史的条件に規制され，様々な地域文化を形成してきた。地域文化形成の要因はどこにあるのか，また，歴史的条件は何かということを明らかにすべく研究を実施した。本年は，岐阜県岐阜市で木曽三川，山形県米沢市で最上川舟運と黒井堰，茨城県境町で利根川舟運，兵庫県神戸市で伊能忠敬にかかわるモノ資料や古文書，遺跡の調査等を実施し，それぞれの地域のもつ多様性，ならびに地図資料などによる地域認識の把握につとめた。多様となる要因は，それぞれの地域によって様々であり，それが何であるのかを検討した。また，それらが，前近代から現代へと，どのように展開したのかという現代までを視野に入れた研究を進めた。そして，現代にも残る地域社会の多様性について検討した。

樋浦　郷子　HIURA Satoko　准教授（2016～）

【学歴】神戸大学大学院国際協力研究科博士前期課程（1998年修了），京都大学大学院教育学研究科修士課程（2006年修了），京都大学大学院教育学研究科博士課程（2011年修了）
【職歴】帝京大学専任講師（総合基礎科目・教職課程）（～2016年３月），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2016～）
【学位】博士（教育学・京都大学）（2011年取得）【専門分野】教育史【主な研究テーマ】朝鮮と台湾における日本植民地期の教育と宗教の関係に関わる歴史【所属学会】教育史学会，朝鮮史研究会，歴史学研究会，日本教育史研究会

●主要業績

１．【著書】『신사・학교・식민지 지배를 위한 종교－교육
（神社・学校・植民地　支配のための宗教―教育）』高麗大学出版文化院（韓国），387頁，2016年２月
２．【著書】『神社・学校・植民地―逆機能する朝鮮支配―』京都大学学術出版会，373頁，2013年３月
３．【論文】「학교의식에 나타난 식민지 교육：현대일본의“국가신도”논쟁과 관련하여」
（学校儀式に見る植民地の教育：現代日本の「国家神道」論争と関連して）『翰林日本学』25号，翰林大学（韓国）日本学研究所，pp.59-71，2014年12月

4．【論文】「植民地朝鮮の『御真影』：初等教育機関の場合」『日本の教育史学』57号，教育史学会，pp.84-96，2014年10月
5．【学会・外部研究会発表】
「台湾の天皇崇敬教育―新化の学校をめぐるモノ資料を手がかりに―」，“上學去―近代教育與臺灣社會”臺灣教育史國際學術研討會，文化部・国立台湾歴史博物館，2019年１月19日
「未完の朝鮮扶余神宮が果たした役割と意味」“The Role and the Meaning of Unfinished Buyeo Sin Gung（Fuyo Jingu）Imperial Shrine in the Wartime Korea”（英語・日本語による），History of education and language in late Chosôn and Colonial-era Korea Workshop，九州大学，2016年２月20日

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書
国立歴史民俗博物館編『〈洗う〉文化史―「きれい」とは何か―』224頁，「帝国日本の清潔と清潔感」pp.62-78，吉川弘文館，2022年２月８日
2　論文
（研究ノート）「韓国併合直後の公立普通学校―「草渓公立普通学校沿革誌」を手がかりとして―」『教育史フォーラム・京都』16，pp.85-98，2021年６月30日，（査読有）
4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発
共編著：企画展図録『学びの歴史像　わたりあう近代』219頁，国立歴史民俗博物館，2021年10月
5　学会・外部研究会発表
「帝国日本の身体髪膚」『International Conference on Body and Modern Sport History in East Asia 近代東亜體育世界與身体』成功大学（台湾），オンライン，2021年５月14日
「「誓わせる教育」の展開について―通過点･転換点としての「皇国臣民ノ誓詞」―」，教育史フォーラム･京都，第47回研究会，京都大学，オンライン，2022年３月７日
7　その他
「運動会のなぞ」『REKIHAKU』４号，国立歴史民俗博物館，pp.96-97，2021年10月26日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
2021年度基幹共同研究「産業・労働の展開とジェンダー」2019年～
2　外部資金による研究
科研　19K02493　基盤C「帝国日本における学校儀礼教育の歴史：声・音の検討を中心に」
3　国際交流事業
『International Conference on Body and Modern Sport History in East Asia 近代東亜體育世界與身体』2021年５月13日-14日，成功大学・国立台湾歴史博物館と国立歴史民俗博物館との共催（台湾成功大学オンライン）
4　主な展示・資料活動
第５展示室展示リニューアル委員
2020年度特集展示「東アジアを駆け抜けた身体―スポーツの近代」展示プロジェクト代表
2021年度企画展示「学びの歴史像―わたりあう近代―」展示プロジェクト副代表
2021年度基幹共同研究「産業・労働の展開とジェンダー」代表（2021年10月２日～2022年３月31日）
5　教育
歴博・千葉大学留学生プロジェクト

三　社会活動等

1　館外における各種委員
教育史学会編集委員（2021年10月から現在）
4　社会連携
②　共同研究
山川出版社との共同研究

花王株式会社との産学共同研究「清潔と清浄をめぐる総合的歴史文化研究」2017年から2022年

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

新型コロナウィルス拡大の影響により，海外での調査が困難となったために，十分な研究ができなかった。しかし国内においてできることを遂行し本プロジェクト経費を下記のように生かすことができた。

＊発表

「帝国日本の身体髪膚」(国際シンポ)「近代東亜体育世界與身体」(台湾成功大学, オンライン開催), 2021年５月14日。

「「誓わせる教育」の展開について―通過点･転換点としての「皇国臣民ノ誓詞」―」教育史フォーラム･京都（オンライン開催），2022年３月７日

＊企画展示および展示図録

「学びの歴史像　わたりあう近代」，2021年10月12日～12月12日

＊分担執筆

「帝国日本の清潔と清潔感」『〈洗う〉文化史「きれい」とは何か』（歴博・花王株式会社編），2022年２月

樋口　雄彦　HIGUCHI Takehiko　教授（2011～），専攻長（2020～2021）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2011～），生年：1961

【学歴】静岡大学人文学部人文学科日本史学専攻（1984年卒業）

【職歴】沼津市明治史料館学芸員（1984），同主任学芸員（1997），国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授（2001），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2011），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2011），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻長併任（2020～2021）

【学位】博士（文学）（大阪大学）（2007年取得）【専門分野】日本近代史【主な研究テーマ】明治期の社会・文化と旧幕臣の動向【所属学会】明治維新史学会，洋学史学会，全国歴史資料保存利用機関連絡協議会，静岡県近代史研究会，静岡県地域史研究会

●主要業績

1．【著書】『旧幕臣の明治維新　沼津兵学校とその群像』吉川弘文館，206頁，2005年11月
2．【著書】『沼津兵学校の研究』吉川弘文館，661頁，2007年10月
3．【著書】『敗者の日本史17　箱館戦争と榎本武揚』吉川弘文館，288頁，2012年11月
4．【著書】『幕末の農兵』現代書館，206頁，2017年12月
5．【著書】『幕末維新期の洋学と幕臣』岩田書院，404頁，2019年８月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

2　論文

「駿河府中藩の地方役所と旗本陣屋の転用」『静岡県近代史研究』46，pp.24-41，静岡県近代史研究会，2021年10月16日（査読有）

3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など

「沼津兵学校」洋学史学会監修『洋学史研究事典』思文閣出版，p.339，2021年９月30日

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発

「第２章　明治の文化・教育と旧幕臣」企画展示図録『学びの歴史像―わたりあう近代―』220頁，pp.45-96，国立歴史民俗博物館，2021年10月12日

7　その他

「企画展示「学びの歴史像―わたりあう近代―」」『国立歴史民俗博物館友の会ニュース』217，pp.1-２, 一般財団法人歴史民俗博物館振興会，2021年10月５日

「企画展示「学びの歴史像―わたりあう近代―」について」『REKIHAKU』４号，国立歴史民俗博物館，pp.81-82，2021年10月26日
「開成所物産学入学姓名記」『日本歴史』882，日本歴史学会，2021年11月１日
「「官軍」の軍装　戊辰戦争に従軍した土佐藩士」『REKIHAKU』５号，pp96-97，国立歴史民俗博物館，2022年２月26日

二　主な研究教育活動

２　外部資金による研究
科研費・基盤研究C「幕府瓦解後の旗本土着をめぐる研究」（2019～2021年度）研究代表者

４　主な展示・資料活動
総合展示第５室・第６室リニューアル委員会代表
2021年度企画展示「学びの歴史像―わたりあう近代―」展示プロジェクト委員会代表

三　社会活動等

１　館外における各種委員
静岡市文化財保護審議会委員
千葉県文化財保護審議会委員

２　講演・カルチャーセンターなど
「クリスチャン・ポラック氏講演「箱館戦争とフランス人たち」ディスカッサント」日仏会館・フランス国立日本研究所主催オンライン講演会，オンライン，2021年11月22日
「明治を生き抜いた旧幕臣　①明治の東京と旧幕臣」東京都立大学オープンユニバーシティ，オンライン，2021年５月22日
「明治を生き抜いた旧幕臣　②旧幕臣の女性たち」東京都立大学オープンユニバーシティ，オンライン，2021年５月29日
「勝海舟と東京・静岡」静岡大学岳陵会東京支部総会記念講演，オンライン，2021年６月19日
「企画展示「学びの歴史像―わたりあう近代―」」歴博友の会オンライン講座，国立歴史民俗博物館，オンライン，2021年11月17日
「江川太郎左衛門の砲術と江戸　①幕臣になった江川坦庵の子飼いたち」東京都立大学オープンユニバーシティ，飯田橋キャンパス，2022年１月29日
「江川太郎左衛門の砲術と江戸　②芝新銭座の大小砲習練場」東京都立大学オープンユニバーシティ，飯田橋キャンパス，2022年２月５日
「敗者ではなかった旧幕臣―徳川家臣団にとっての明治維新―」朝日カルチャーセンター新宿教室，オンライン，2022年３月３日

３　マスコミ
NHK・総合テレビ　ファミリーヒストリー「名場面スペシャル　あの感動が再び」（2021年６月28日放送）

４　社会連携
①　刊行物
「上條上と上條源次郎―沼津勤番組に属した兄弟―」『沼津市明治史料館通信』145，pp.1-３，沼津市明治史料館，2021年４月25日
「静岡藩と明治２年の旧百官名・国名使用禁止」『静岡県近代史研究会会報』513，pp.2-５，静岡県近代史研究会，2021年６月10日
「幕府海軍士官鈴木録之助と昌光丸沈没事件」『沼津市明治史料館通信』146，pp.2-３，沼津市明治史料館，2021年７月25日
「描かれた沼津八景」『沼津市明治史料館通信』147，pp.1-３，沼津市明治史料館，2021年10月25日
「女婿福井菊三郎と海軍中将小倉鋲一郎」『沼津市明治史料館通信』147，pp.3-４，沼津市明治史料館，2021年10月25日
「旗本の静岡移住と没落―『幕末明治旗本困窮記』に寄せて―」『静岡県近代史研究会会報』518，pp.7-８，静岡県近代史研究会，2021年11月10日
「沼津兵学校の余暇と遊び」『沼津市明治史料館通信』148，pp.1-３，沼津市明治史料館，2022年１月25日
「共立学校と沼津藩の人脈」『沼津市明治史料館通信』148，pp.3-４，沼津市明治史料館，2022年１月25日

「杉亨二と静岡藩・静岡県」『沼津史談』73，pp.60-72，沼津郷土史研究談話会，2022年３月30日
「沼津兵学校関係人物履歴集成　その十」『沼津市博物館紀要』46，沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館，pp.1-20，2022年３月31日
「民権ネットワーク　旧幕臣」『自由民権』35，pp.92-93，町田市立自由民権資料館，2022年３月31日
「旗本小野次郎右衛門家の幕末明治」『成田市史研究』46，pp.1-６，成田市教育委員会，2022年３月

② 講演会・シンポジウム
「佐倉藩士と沼津兵学校」佐倉市民カレッジ，佐倉市中央公民館，2021年８月31日
「渋沢栄一と静岡藩の群像」静岡商工会議所・渋沢栄一翁顕彰講演会「静岡の明治維新」浮月楼，2021年11月11日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

新型コロナウイルス感染症の拡大により，出張することがほとんどできず，予定していた公益財団法人江川文庫（伊豆の国市）での資料調査は叶わなかった。沼津市明治史料館での資料調査は１回だけ実施できた。その代わり，複写・購入などにより関係する文献・資料の収集につとめた。

日高　薫　HIDAKA Kaori　教授（2010～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2010～）

【学歴】東京大学文学部第二類（史学）美術史学専修課程（1985年卒業），東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻修士課程（1987年修了），東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻博士課程（1990年単位取得退学）
【職歴】杉野女子大学非常勤講師（1988），東京大学文学部美術史研究室助手（1990），共立女子大学国際文化学部日本文化研究研究助手（1992），国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手（1994），同助教授（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)，文部科学省研究振興局学術調査官併任(2004～2006)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2010），広報連携センター長併任（2011～2012）
【学位】博士（文学）（東京大学2008年）【専門分野】漆工芸史【主な研究テーマ】蒔絵を中心とする漆工芸史および日本の装飾芸術の特質に関する研究，交易品としての漆器をめぐる文化交流に関する研究【所属学会】美術史学会，漆工史学会

●主要業績

１．【著書】『異国の表象―近世輸出漆器の創造力―』475頁，ブリュッケ，2008年３月
２．【概説書】編著『海を渡った日本漆器Ⅱ―18・19世紀―』（『日本の美術』427号，98頁，至文堂，2001年12月
３．【論文】Maritime Trade in Asia and the Circulation of Lacquerware（「アジアの海と漆器流通」），Rupert Faulkner，Shayne Rivers 編，East Asian Lacquer：Material Culture, Science and Conservation（東洋漆器―その文化史，科学と保存修復），pp.5-9，London，2011年２月
４．【論文】「蒔絵の「色」―絵画と工芸のはざまで」(玉蟲敏子編『講座　日本美術史５　<かざり>と<つくり>の領分』pp.165-197，東大出版会，2005年10月）
５．【資料図録】編著『紀州徳川家伝来楽器コレクション』国立歴史民俗博物館資料図録３,414頁，国立歴史民俗博物館，2004年３月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

③　機構

人間文化研究機構基幹研究プロジェクト 日本関連在外資料調査・活用事業
「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」（2016年度～）研究代表者

三　社会活動等

1　館外における各種委員
漆工史学会理事，千葉市美術品等収集審査委員，千葉県伝統工芸品産業振興協議会委員，静岡県富士山世界遺産センター専門委員，文化庁文化審議会文化財分科会第一専門調査会専門委員（工芸品部門）

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
新型コロナウイルス感染拡大のため，予定していた調査をおこなうことが困難となったため，国内に伝世する古代から中世にかけての漆工品の調査をおこない，技術の詳細を確認した。
また，ウィーン万国博以前の万国博覧会における日本資料の展示実態や現地での評価，技術伝習等に関して，日欧双方の文献記録を収集のうえ検討し，いくつかの新知見を得ることができた。

福岡　万里子　FUKUOKA Mariko，准教授（2014.4～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2014.10～）

【学歴】東京大学教養学部（2003年３月卒業）東京大学大学院総合文化研究科（修士）（2005年３月修了），東京大学大学院総合文化研究科（博士）（2011年２月修了）【職歴】日本学術振興会特別研究員DC２（2007-09），日本学術振興会特別研究員PD（2011-14），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2014-），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2014-）
【学位】博士（学術）（東京大学）（2011年取得）【専門分野】19世紀日本外交史，東アジア国際関係史【主な研究テーマ】19世紀日本・東アジアをめぐる外交史・国際関係史，タウンゼント・ハリスの伝記的研究，19世紀アジアで活動したドイツ・スイス系外交官及び商人に関する研究【所属学会】史学会，日本政治学会，日本国際政治学会，明治維新史学会，洋学史学会，日本ドイツ学会【研究目的・研究状況】近世近代転換期の日本・東アジアを取り巻く国際関係の変動過程を，マルチアーカイヴァルな手法を基に，東アジア比較・世界史の視点から考察していければと考えている。引き続き，ハリスの伝記をまとめるべく準備中。

●主要業績

1．【単著】福岡万里子『プロイセン東アジア遠征と幕末外交』448頁，東京大学出版会，2013年３月
2．【論文】福岡万里子「ドイツ公使から見た戊辰戦争―蝦夷地と内戦の行方をめぐるブラントの思惑」，奈倉哲三・保谷徹・箱石大編『戊辰戦争の新視点（上）世界・政治』吉川弘文館，pp.61-81，2018年１月
3．【論文】Mariko Fukuoka, “Prussia or North Germany? The Image of “Germany” during the Prusso- Japanese Treaty Negotiations in 1860-1861.” In：Sven Saaler, Kudō Akira, Tajima Nobuo（eds.），Mutual Perceptions and Images in Japanese German Relations, 1860-2010. Brill’s Japanese Studies Library Nr.59, Leiden：Brill, June 2017, pp.65-88
4．【論文】Mariko Fukuoka,“German Merchants in the Indian Ocean World：From Early Modern Paralysis to Modern Animation.” In：Angela Schottenhammer（ed.），Early Global Interconnectivity across the Indian Ocean World, vol.I：Commercial Structures and Exchanges. Palgrave Mcmillan, February 2019, pp.259-292
5．【調査研究活動報告】福岡万里子・日高薫・澤田和人「スミソニアン研究機構所蔵の幕末日本関係コレクション―ペリー・ハリス・遣米使節団」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集，pp.101-165，2021年３月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書
共編著『REKIHAKU４　特集「歴史のなかの疫病」』112頁，国立歴史民俗博物館，2021年10月26日
3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など

「万延元（1860）年遣米使節団が見せようとした「日本」（The ‘Japan’ Presented by the 1860 Japanese Embassy to the United States）」，国立歴史民俗博物館編『海外で《日本》を展示すること―在外資料調査研究プロジェクト報告書』pp.123-139，2022年

5　学会・外部研究会発表

福岡万里子「徳川幕府からアメリカ大統領への贈り物（1860）」，日仏文化講座「再発見！フォンテーヌブロー宮殿の日本美術―徳川幕府からフランス皇帝への贈り物」，オンライン，2021年４月17日

澤井勇海氏「文明標準の「成立」：日本・清朝と西洋の国際法法律家，1873-1881」へのコメント，日本政治学会，オンライン，2021年９月25日

7　その他

「世界周航航海」「ドンケル＝クルツィウス」「オイレンブルク」『洋学史研究事典』洋学史学会監修，思文閣出版，p.51・p.77・p.80，2021年９月30日

「「正義」を貫く性格　列強と対立」『史書を旅する』読売新聞文化部編，p.209，中央公論新社，2021年10月18日

「史料の魅力に導かれて」『UP』588号，pp.7-12，東京大学出版会，2021年10月

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

歴博基盤研究「番方旗本家に関する総合的研究―大番士・儒者杉原家文書を中心に―」（研究代表者：三野行徳）副代表，2019年度～

③　機構

機構基幹研究プロジェクト「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」（研究代表者：日高薫）共同研究員

2　外部資金による研究

基盤研究C「日本開国史の再構築―「開国のかたち」をめぐる国際的相克の解明」（研究代表者：福岡万里子）2020～2023年度

基盤研究B「明治政治外交史の完成を目指して：極東の国際関係と薩長交代」（研究代表者：五百旗頭薫）2020～2023年度：研究分担者

3　国際交流事業

国際交流協定先のルツェルン応用科学芸術大学アート・デザイン学部（スイス）教授アレクシス・シュヴァルツェンバッハ氏と英語による共著論文”Between Trade and Diplomacy：The Commercial Activities of the Swiss Silk Merchants Siber & Brennwald in late Edo and early Meji Japan”の刊行準備（初校チェックを終え，2022年４月現在刊行待ち）

4　主な展示・資料活動

総合展示第５室・第６室リニューアル委員

三　社会活動等

1　館外における各種委員

横浜開港資料館ブレンワルド・ダイアリー翻訳プロジェクト委員，東京大学史料編纂所日蘭交渉史研究会メンバー

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

令和３年度は，当該研究課題に関する研究文献や資料の購入及び複写，外国語史料の翻刻の外注，史料調査・収集のための国内資料館への出張，PCでの情報整理に必要なPC備品の購入などを行った。

4　その他

2016～18年度に主催した歴博基盤研究「近世近代転換期東アジア国際関係史の再検討―日本・中国・シャムの相互比較から」の成果論文集（『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号「近世近代転換期東アジアの外交と通商―海域世界の秩序変動（仮）」）の刊行を準備している（2022年４月現在，収録する８本の論考の査読修正がほぼ終わった段階）。

藤尾　慎一郎　FUJIO Shin'ichiro　教授（2008.11～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2009～）　生年：1959

【学歴】広島大学文学部卒（1981），九州大学大学院修士課程修了（1983），九州大学大学院博士課程後期単位取得退学（1986）
【職歴】九州大学文学部助手（1986），国立歴史民俗博物館考古研究部助手（1988），同助教授（1999），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2008），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2009）【役職】研究推進センター長併任（2011～2012），副館長・研究総主幹併任（2013～2016）【学位】博士（文学）（広島大学文学部2002）【専門分野】日本考古学【主な研究テーマ】弥生文化，鉄，農耕のはじまり，年代研究，DNA考古学【所属学会】日本考古学協会，考古学研究会，九州考古学会，たたら研究会【受賞歴】なし

●主要業績

1．【単著】『弥生文化像の新構築』275頁，東京：吉川弘文館，2013年５月
2．【単著】『弥生時代の歴史』250頁，講談社現代新書2330，東京：講談社，2015年８月
3．【編著】設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦『弥生文化誕生』弥生時代の考古学2，226頁，2009年１月
4．【原著論文】「弥生文化の輪郭」（『開館30周年記念論文集１』国立歴史民俗博物館研究報告第178集，pp.85-120，2013年３月）（査読有）
5．【編著】『弥生ってなに?!』2014年度歴博企画展示図録，128頁，2014年７月15日

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書

単著『日本の先史時代―旧石器･縄文･弥生･古墳時代を読みなおす―』中公新書2654，299頁，中央公論新社，ISBN978-４-12-102654-5，2021年８月25日

編著『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集，277頁，国立歴史民俗博物館，2021年10月29日

2　論文

「「初期青銅器弥生時代」の提唱―鉄器出現以前の弥生時代―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第231集，国立歴史民俗博物館，pp.267-298，2022年２月25日（査読有）

藤尾慎一郎，木下尚子，坂本稔，瀧上舞，篠田謙一『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集，pp.3-14，国立歴史民俗博物館，2021年10月29日（査読有）

山田康弘，木下尚子，瀧上舞，坂本稔，藤尾慎一郎，篠田謙一「熊本大学医学部所蔵縄文時代の人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第234集，pp.121-147，国立歴史民俗博物館，2022年３月31日（査読有）

「土器とDNA―伊勢湾沿岸地域における水田稲作民と採集・狩猟民」『科学』1074，pp.125-132，岩波書店，2022年２月１日

3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など

篠田謙一，神澤秀明，角田恒雄，安達登，清家章，藤尾慎一郎「한국 경북 영천 완산동 고분군　　출토 삼국시대 인골의 DNA분석（韓国慶北永川完山洞古墳群出土三国時代人骨のDNA分析）」『영천-신경주 복선전철１공구 내 영천 완산동 산28-５번지 유적（永川-新慶州複線銑鉄１工区内永川完山洞山28-５番地遺跡）』，㈶ウリ文化財研究院，pp.439-453，2022年１月31日

5　学会・外部研究会発表

「炭素14年代測定によって明らかになった縄文・弥生時代の歴史」2020年度　第29回放射線利用総合シンポジウム，2021年１月18日，大阪

「韓国新石器時代・三国時代のDNA分析からわかったこと―慶尚道出土人骨を中心に―」「第87回日本考古学協会総会　セッション３「古代DNA解析と考古学の接点」日本考古学協会，2021年５月23日，東京

「日本考古学と北方地域」コメント，国立アイヌ民族博物館シンポジウム『ビーズの魅力を探る　その１：玉からみたアイヌモシリ』，2021年10月24日，国立アイヌ民族博物館，苫小牧

「弥生長期編年時代の二重構造論」二重構造論発表30周年記念講演会，国際日本文化研究センター，11月28日，

京都
人間文化研究機構　可視化・高度化事業関連シンポジウム『地域文化の多様性と横断性―歴史・文化・考古研究の可視化・高度化―』2022年１月30日，国立歴史民俗博物館，「地域文化の多様性と交流からみた新たな社会像―楽浪以前の日本列島―」
国立民族学博物館『日本列島における焼畑再考―過去・現在・未来―』2022年３月21日，民博，コメント，大阪

6　総研大リーフレット
齋藤努・降幡順子・藤尾慎一郎「特集３　鼎談　自然科学からみる歴史資料」『歴史研究の最前線』vol.23，pp.49-58，2022年２月28日

7　その他
「稲作以前の考古学」『季刊民族学』177，pp.20-24，千里文化財団，2021年７月31日
「1400年前の巻貝で作ったブレスレット」『REKIHAKU』５号，国立歴史民俗博物館，pp.72-72，2022年２月26日
「著書紹介１―藤尾慎一郎（B01班研究代表者　国立歴史民俗博物館）『日本の先史時代―旧石器・縄文・弥生・古墳時代を読みなおす―』中公新書」，『Yaponesian』第３巻あき号，pp.4-7，2021年11月24日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
③　機構
ネットワーク型基幹研究プロジェクト 地域研究推進事業 北東アジア地域研究（国立民族学博物館拠点）

2　外部資金による研究
日本学術振興会平成30年度科学研究費補助金新学術領域「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」研究代表者，2018～2022年度
日本学術振興会科学研究費基盤研究S「酸素同位体比年輪年代法の高精度化による日本列島の気候・生産・人口変動史の定量化」研究分担者，（研究代表者　中塚武）2021～2025年度

3　国際交流事業
国立釜山大学校博物館学術交流（研究代表者　藤尾慎一郎）
国立ソウル大学校学術交流（研究代表者　藤尾慎一郎）

4　主な展示・資料活動
総合展示第１室「先史・古代」解説ビデオ「環壕集落」「弥生のまつり」
資料調査研究プロジェクト代表「青森県槻ノ木遺跡出土縄文晩期資料の整理」

三　社会活動等

1　館外における各種委員
考古学研究会全国委員，たたら研究会関東委員，日本学術会議連携会員（史学委員会文化財の保護と活用に関する分科会）

2　講演・カルチャーセンターなど
「日本考古学と北方地域」国立アイヌ民族博物館第３回特別展示／国立民族学博物館巡回展関連イベント「ビーズの魅力を探る　その１：玉からみたアイヌモシリ」2021年10月24日

3　マスコミ
紙面協力：藤尾慎一郎，篠田謙一，斎藤成也「特集　ヤポネシア　17都道府県人のゲノムが明かす日本人の起源」『日経サイエンス』51-８，pp.30-37，日経サイエンス社，2021年８月１日

4　社会連携
③　講演会・シンポジウム
「弥生時代研究の変革―ヤポネシアゲノムと考古学―」シンポジウム「続・倭人の真実―青谷上寺地遺跡に暮らした人々―」，pp.10-14，鳥取県，2021年10月30日

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
2021年度もコロナ禍のため，韓国での調査が行えなかったので，国内調査を行った。

- 鹿児島県十島村宝島大池遺跡A地点出土土器の年代測定結果に対する報告書作成のため，調査協力者の鹿児島県志布志市教育委員会・相美伊久雄氏との協議を志布志市において行った。2023年２月末締め切りの国立歴史民俗博物館研究報告通常号に投稿予定である。
- 福岡県糸島市新町遺跡出土，弥生早・前期人骨の年代測定とDNA分析を来年度行うための予備調査を３月25日に実施した。国指定遺跡の新町遺跡の遺跡整備を，最新の自然科学的調査結果もふまえて行いたいという糸島市教育委員会の要望をふまえ，DNA分析を行うことの意味と，どういうことがわかるのか，といった点などを含めて説明を行った。
- 石川県能見町和田山５号噴出土鉄板の調査を行った。

４　その他

2019年３月にリニューアルオープンした総合展示第１室「先史・古代」において展示した，時代と時代の移行期について，一冊の新書にまとめて刊行した（『日本の先史時代』中公新書，８月25日刊行）。

コロナ禍のため，韓国に行くことはできなかったが，渡来系弥生人の出自について重要な成果を得ることができた。これまで，渡来系弥生人は，韓半島青銅器時代人と在来系（縄文）の人びとの混血によって成立したと考えてきたが，約6300年前の釜山付近には，渡来系弥生人にきわめて近い核ゲノムをもつ人びとがいたことが明らかになった。この人たちと在来（縄文）系弥生人の人びとが混血しても，渡来系弥生人が生まれることはなく，生まれるのは，これまで西北九州型と呼んでいた在来系と渡来系のハイブリットの人たちであった。だとすれば，渡来系弥生人が生まれるためには，もっと大陸北部の人びとが在来(縄文)系弥生人と混血するか，6300年前に釜山付近に存在した渡来系弥生人に類似する核ゲノムをもつ人びと自身がやってきていた可能性が出てくる。九州北部で確認されているもっとも古い渡来系弥生人は，水田稲作が始まってから250年以上たった前期中ごろなので，依然として，水田稲作開始期にどういう人びとが存在していたのか，課題のままである。

松尾　恒一　MATSUO Koichi　教授（2010～）

生年：1963

【学歴】國學院大學文学部日本文学科（1985年卒業），國學院大學大学院文学研究科博士前期課程（1987年修了），國學院大學大学院文学研究科博士後期課程（1995年修了）
【職歴】國學院大學文学部専任講師（1996），大倉山精神文化研究所非常勤研究員（1997），國學院大學文学部助教授（1999），同大學日本文化研究所兼担助教授（1999），国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授（2004），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2010），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2010～2019，2021）
【学位】文学博士（國學院大學）【専門分野】民俗宗教，儀礼・芸能史【主な研究テーマ】民俗宗教・民間信仰，権門寺院の儀礼・芸能，寺院に奉仕する職能者の研究，アジアにおける宗教・信仰の交流史と民俗【所属学会】日本民俗学会，民俗芸能学会，芸能史研究会，儀礼文化学会【研究目的・研究状況】中国大陸・台湾・アメリカ等，海外の民俗・歴史学研究者・研究機関とも交流を推進しつつ，フィールドワークと歴史資料を中心とする調査，研究を進めている。

●主要業績

１．【著書】『日本の民俗宗教』288頁，筑摩書房，2019年11月
２．【著書】『物部の民俗といざなぎ流』250頁，吉川弘文館，2011年６月
３．【著書】『儀礼から芸能へ　狂騒・憑依・道化』237頁，角川学芸出版，2011年９月
４．【編著】『東アジア世界の民俗　変容する社会・生活・文化』（『アジア遊学』215，272頁，勉誠出版），2017年10月
５．【編著】『神楽の中世』392頁，三弥井書店，2021年６月

●2021年度の研究教育活動（成果を出す以前の研究・調査途中のものも含む）

一　研究業績（公開，発表，刊行済みのもの）

1　著書（単著・共著・編著・監修）

共編著：山本ひろ子・松尾恒一・福田晃『神楽の中世』三弥井書店，392頁，2021年６月28日

「仮面の呪術，祭祀，芸能としての神楽の生成―東アジアの視角より中世の神楽を考える」pp.245-268,

2　論文（査読あり，なしを明記）

「餓鬼・孤魂―祀り手のない死霊―と疫病」儀礼文化学会編『儀礼文化学会紀要』第9・10号（通巻第50号），pp.13-23，2022年３月25日（査読有）

松尾恒一・中村和正「調査報告：長崎市外海，かくれキリシタン伝承地域の山の神」儀礼文化学会編『儀礼文化学会紀要』第9・10号（通巻第50号），pp.179-217，2022年３月25日（査読有）

「戦う翁, 祟る翁〈新羅明神〉―園城寺と異国の護法神―」『藝能』28, 藝能学会, pp184-197, 2022年３月31日（査読有）

「長崎外海地域におけるスペイン托鉢修道会系の布教の伝承―『ドソンのオラショ』『天地始之事』に注目して―」『藝能』28，藝能学会，pp.254-269，2022年３月31日（査読有）

「民具的研究与展示――博物馆・美术馆・大学的作用与文化资源化的可能性」周永明・王暁葵編『遺産』第４輯中国南方科技大学社会科学高等研究院，pp.127-149，2021年８月（査読有）

「鎮護国家の仏教と列島の景観―仏法・王法相依の儀礼と地域統治」近本謙介編『ことば・ほとけ・図像の交響―法会・儀礼とアーカイヴ』勉誠出版，pp.441-460，2022年３月31日

「南シナ海の海盗―張保仔と女海賊鄭一嫂」染谷智幸編『はじめに交流ありき　東アジアの文学と異文化交流東アジア文化講座１』，pp.364-368，文学通信，2021年３月（査読無）

4　展示図録・資料図録・映像・ＤＢ・デジタル・コンテンツ開発

映像“Izanagi-ryu, A Local Religion of Japan”（民俗研究映像『物部の民俗といざなぎ流』英語版）制作

5　学会・外部研究会発表

本國「民俗」展示的對象及方式－日本國立歴史民俗博物館・民俗展示（自国の民俗をいかに展示するか－国立歴史民俗博物館における民俗展示）台湾国立雲林科技大学“雲林県地方文化館館長年会暨専題講座”，台湾，2021年11月24日

「佛教东渡日本及其与护国的结合―王权和仪礼（日本への仏教伝来と護国の仏教―王権と儀礼―）」四川大学国際シンポジウム「东亚汉文献与文化交流国际学术研讨会（東アジア漢文献と文化交流国際学術会議研討会）」，四川大学，中国，2021年10月31日

「能は神楽か，世阿弥の言説をめぐって―巫女より男性宗教者の神楽へ―」2021年度 藝能学会大会，二松学舎大学，東京，2021年12月４日

「長崎外海地域のかくれキリシタン―中近世, 日･中･欧の交流の歴史と伝承」『柳田国男と女性民俗学―“妹の力”論の再検討―：生活と信仰の狭間に立つ女性―妹の力の新しい地平を求めて―』シンポジウム第４回（永池健二代表），Cafeチャイハナ光が丘，東京，2021年12月28日

7　その他（歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュース，『本郷』など）

「佛教东渡日本及其与护国的结合―王权和仪礼（日本への仏教伝来と護国の仏教―王権と儀礼―）」『東亜漢文献与文化交流国際学術会議研討会（東アジア漢文献と文化交流国際学術会議研討会）会議論文集』中国四川大学中国俗文化研究所，pp.358-370，2021年10月（査読有）

「民俗信仰と疫病の深いつながり　死霊と疫病の長い関係」『REKIHAKU』４号，国立歴史民俗博物館，pp.26-32，2021年10月26日

「堂童子と花造りの家―花会式を支える人々―」『薬師寺』211号，法相宗大本山薬師寺編pp.11-16，2022年３月１日

「疫病にまつはる信仰と祭礼：京都祇園祭―御霊信仰と夏祭りの始まり―」『月刊 若木』865号，神社本庁，pp.16-17，2021年７月

二　主な研究教育活動

2　外部資金による研究

科研基盤Ｃ「日本仏教と東南アジア仏教との比較研究―政治と権力の視点を中心として」（研究代表者，2019～2021年度）

中国中山大学国家社会科学基金項目「海外藏珍稀中国民俗文物与文献整理研究暨数据库建设（在外中国民俗関係資料の整理・研究とデータベースの構築）」（研究代表者：中国中山大学　王霄冰教授）研究分担者，2016～2021年度

科研「神楽の中世的展開とその変容」（代表：斎藤英喜）

5　教育

千葉大学大学院客員教授（人工物デザイン史論）

國學院大學非常勤講師（伝承文学演習）・國學院大學大学院非常勤講師（儀礼文化論）

上智大学非常勤講師（多様性の日本民俗文化）

法政大学沖縄文化研究所研究員

三　社会活動等

1　館外における各種委員

儀礼文化学会専門委員，儀礼文化紀要編集委員，國學院大學國文學會役員，国立劇場民俗芸能・琉球舞踊公演専門委員（代表），中国国家社科基金重大項目“海外藏珍稀中国民俗文献与文物資料整理，研究暨数据库建设（海外所蔵の民俗関係文献と文物の調査・研究とデータベースの構築）”成果刊行書籍「海外藏中国民俗文化珍稀文献（海外所蔵の中国民俗文化の貴重書籍）」（中国国家重点図書出版項目）編集委員，中国莆田学院媽祖文化研究院刊行『媽祖文化研究』編集委員

5　国際連携

③　その他

国際フォーラム，シンポジウム等，招待公演・研究発表

国際フォーラム招待講演：本國「民俗」展示的對及方式―日本國立歴史民俗博物館・民俗展示（自国の民俗をいかに展示するか―国立歴史民俗博物館における民俗展示）台湾国立雲林科技大学“雲林縣地方文化館館長年會暨專題講座”，台湾，2021年11月24日

国際シンポジウム招待発表：「佛教东渡日本及其与护国的結合―王权和仪礼（日本への仏教伝来と護国の仏教―王権と儀礼―）」四川大学国際シンポジウム「东亚汉文献与文化交流国际学术研讨会（東アジア漢文献と文化交流国際学術会議研討会）」四川大学，中国，2021年10月31日

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

コロナ禍によりフィールドワークは計画通り実施できなかったが，宮崎県の神楽について，実見と，聞き取り調査，記録を実施した。次年度は，本調査に基づいて，学会発表を行う。

また，次の論考等を発表した。

・単著「佛教东渡日本及其与护国的结合―王权和仪礼（日本への仏教伝来と護国の仏教―王権と儀礼―）」（『东亚汉文献与文化交流国际学术研讨会論文集』，pp.245-268，四川大学，2021年10月），（査読有）

・単著「疫病にまつはる信仰と祭礼：京都祇園祭―御霊信仰と夏祭りの始まり―」（『月刊 若木』865号，神社本庁，pp.16-17，2021年７月）・（査読無）

・単著「仮面の呪術，祭祀，芸能としての神楽の生成―東アジアの視角より中世の神楽を考える」（松尾恒一他編『神楽の中世』，pp.245-268，三弥井書店，2021年５月）・（査読有）

・単著「船と女神―ヨーロッパ大航海時代の媽祖・観音・マリア」（藝能学会『藝能』（27），pp72-92，2021年３月　＊実際の刊行は６月）・（査読有）

4　その他

松尾は，近世の寺檀制度のなかでのかくれキリシタンをテーマに，その組織が数多く存続していた長崎の諸地域の聞き取り，遺物調査を進めている。本調査により，外海地域には，特に豊臣秀吉，徳川政権の禁教政策により，イエズス会宣教師が日本より去ったあと，禁教政策下にもかかわらず，フィリピン諸島を統治下に置いたスペインの托鉢会系宣教師が九州に潜入し布教をしたことを反映したオラショや，聖フランチェスコの描かれるフランシスコ会系のものと認められるマリア十五玄義などが伝えられていることを確認した。本調査に基づく研究成果として，日本のキリスト教史，特にローマ教皇と結びついたカトリック史のなかでの位置づけをテーマに考察した論文を執筆し，投稿した（松尾「長崎外海地域におけるスペイン托鉢修道会系の布教の伝承―『ドソンのオラショ』『天地始之事』に注目して―」「藝能』28，2022年３月，「中世後期，カトリック布教における治病―長崎における宣教師の祭儀，呪法，療養院経営を中心に―」上智大学『カトリック研究』2022年8月（刊行済））。

松木　武彦　MATSUGI Takehiko　教授（2014～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2021～）生年：1961

【学歴】大阪大学文学部（国史学）（1984年卒業），大阪大学大学院文学研究科修士課程修了（1987），大阪大学大学院文学研究科博士課程（考古学）（1990年単位取得退学）【職歴】岡山大学助手（1990～），岡山大学准教授（助教授）（1995～）岡山大学教授（2011～）大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2014～）総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2021）【学位】博士（文学）（大阪大学2005年３月）【専門分野】日本考古学【主な研究テーマ】日本列島の古墳研究，戦争の考古学的研究，考古学による国家形成論，進化・認知科学を用いた考古学理論の再構築，ブリテン島を中心とするヨーロッパと日本列島の先史時代に関する比較考古学的研究【所属学会】日本考古学協会，考古学研究会【研究目的・研究状況】日本列島の先史時代を，国家形成理論，進化・認知科学，比較考古学，人口および古気候の復元などをもとに，人類史の中に位置づける試みを進めている。

●主要業績

１．【著書】『日本列島の戦争と初期国家形成』363頁，東京大学出版会，2007年１月
２．【著書】『列島創世記』全集日本の歴史１―旧石器・縄文・弥生―，366頁，小学館，2007年11月
３．【著書】『進化考古学の大冒険』255頁，新潮社，2009年12月
４．【著書】『美の考古学』220頁，新潮社，2016年１月
５．【著書】『縄文とケルト』247頁，筑摩書房，2017年５月10日

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

１　著書

単著『はじめての考古学』筑摩書房，256頁，2021年11月10日

共著『領域の歴史と国際関係(上)―前近代―』（郷土史大系），朝倉書店，370頁，2021年５月21日

共著『レジリエンス人類史』京都大学学術出版会，517頁，2022年３月31日

共編著：松木武彦，吉村武彦，川尻秋生『東アジアと日本（シリーズ 地域の古代日本)』KADOKAWA，264頁，2022年２月16日

共編：松木武彦，吉村武彦，川尻秋生『筑紫と南島（シリーズ 地域の古代日本)』KADOKAWA，272頁，2022年２月16日

監修：譽田亜紀子著『知られざる古墳ライフ』誠文社新光堂，159頁，2021年８月12日

２　論文

「日本列島先史・原史時代における戦いと戦争のプロセス」『年報人類学研究』12，南山大学人類学研究所，pp.124-136，2021年６月30日（査読有）

「特集「新しい戦争の考古学」によせて」『年報人類学研究』12，南山大学人類学研究所，pp.121-123，2021年６月30日（査読有）

松木武彦，青山和夫「古墳文化とマヤ文明：比較考古学事始」『文明動態学研究』１，岡山大学文明動態学研究所，pp.21-38，2022年３月（査読有）

「日本列島先史-原史段階の社会変化と「環境」―歴史変化の定量的把握とメカニズム解明に向けての試論―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第231集，国立歴史民俗博物館，pp.211-244，2022年２月（査読有）

５　学会・外部研究会発表

"The Last 200 Years of the first millennium BCE as the “Axial Age” in prehistoric JAPAN", European Association of Archaeologists 27th Annual Meeting（ヨーロッパ考古学会第27回大会），Kiel（キール，ドイツ），遠隔参加，2021年９月９日

「戦争のランドスケープと先史社会」歴博国際シンポジウム「戦争のランドスケープと先史社会」，国立歴史民俗博物館，2021年11月30日

「あそびの起源―ホモ･サピエンスの社会形成―」，総研大文化フォーラム2021「あそびを多角的に見つめる」，遠隔，2021年12月４日

７　その他

「フィールド紀行 第１回 地域史を解明する」『REKIHAKU』４号，国立歴史民俗博物館，pp.66-71，2021年

10月
「心で考える社会の複合化と戦争」『NEWSLETTER 出ゆーらしあ』vol.02，pp.11-12，2022年３月15日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

①　歴博
基幹研究「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化の形成」研究代表者，2019年度～

２　外部資金による研究
新学術領域研究「集団の複合化と戦争」研究代表者，2019年度～2023年度
新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学（総括班）」2019～2023年度
科学研究費基盤研究S「酸素同位体比年輪年代法の高精度化による日本列島の気候･生産･人口変動史の定量化」2021-2026年度

３　国際交流事業
歴博国際シンポジウム「戦争のランドスケープと先史社会」，国立歴史民俗博物館，2021年11月30日

５　教育
駒澤大学大学院人文科学研究科　非常勤講師　担当科目「考古学講義Ⅶ」

三　社会活動等

１　館外における各種委員
和歌山県文化財審議委員
和歌山県立紀伊風土記の丘協議会委員
日本考古学協会機関誌『日本考古学』編集委員
古代学協会『古代文化』編集委員

２　講演・カルチャーセンターなど
NHK文化センター名古屋総支社 オンデマンド講座「誕生・ヤマト王権」（構成・監修およびうち１回を担当）
栄中日文化センター連続講座「古墳学」（2021年10月-2022年３月，計６回）

３　マスコミ
NHK総合『ミステリアス古墳スペシャル』第３弾，監修・スタジオ出演（2021年５月４日，19:30-20:15）
NHK総合『ミステリアス古墳スペシャル』第４弾，監修・スタジオ出演（2022年３月24日，20:00～20:45）

４　社会連携

③　講演会・シンポジウム
国際シンポジウム「５世紀の倭と東アジア」（主催：堺市博物館）講演，2021年４月３日
公開シンポジウム「大王墓と紀伊の首長墓―百舌鳥・古市古墳群と岩橋千塚古墳群に映し出された政治と社会―」（主催：和歌山県・堺市）講演・コーディネーター，2022年２月13日
「西の明日香村歴史講演会 荒木山古墳とその時代」（主催：真庭市教育委員会）講演，2022年２月22日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告
日本列島の先史社会を人類史的に位置づけるために，日本列島の古墳を含めた先史モニュメントおよびそれと関連する国内外の考古学的事象について，データ収集と踏査を行った。最新の国際的歴史理論を用いたその分析・考察については，査読付１本（共著）を含む論考２編を刊行した。ただし，新型コロナウィルス感染拡大のため，予定していた海外学会での参加はzoomでの発表に変更した。

松田　睦彦　MATSUDA Mutsuhiko　准教授（2014.4～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2021～）生年：1977

【学歴】早稲田大学第一文学部文学科日本文学専修（1999年卒業），成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻博士課程前期（2002年修了），成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻博士課程後期（2007年修了）【職歴】成城

大学民俗学研究所研究員（2007），成城大学非常勤講師（2008），荒川区教育委員会事務局社会教育課文学館調査担当学芸員（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2009），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2014），ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所客員研究員（2016～2017），韓国国立民俗博物館客員研究者（2017），神奈川大学日本常民文化研究所客員研究員（2019～），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2021.4）【学位】博士（文学）（成城大学）（2007年取得）【専門分野】民俗学【主な研究テーマ】生業の技術および生業をとりまく信仰・儀礼・社会組織等の生活文化に関する総合的研究【所属学会】日本民俗学会・日本民具学会・日本文化人類学会【研究目的・研究状況】さまざまな生業の技術や，信仰・儀礼をはじめとする生業にともなう生活文化について総合的視点から明らかにする。また，生業にともなう人の移動に注目し，定住を前提とする従来の民俗学的研究に対し，移動の日常性を前提とする研究を提唱している。現在は日本と韓国との海をめぐる生活文化の比較研究も行っている。

●主要業績

1．【単著】『人の移動の民俗学―タビ〈旅〉から見る生業と故郷』311頁，慶友社，2010年
2．【編著】『人の移動とその動態に関する民俗学的研究』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第199集），261頁，2015年
3．【共編著】『柳田國男と考古学―なぜ柳田は考古資料を収集したのか』158頁，新泉社，2016年
4．【編著】『徳川林政史研究所所蔵「駿州・豆州・相州　御石場絵図」の研究』（2014～2016年度　科学研究費補助金若手研究（B）（課題番号2670299）「安山岩に関する歴史・民俗学的研究」成果報告書），175頁，2017年
5．【映像】民俗研究映像『石を切る―花崗岩採掘の伝統と革新』DVD，200分，国立歴史民俗博物館，2012年度

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

2　論文

「採石場の景観変化―高度経済成長期の石材需要と新技術の導入―」神奈川大学日本常民文化研究所編『歴史と民俗』38，平凡社，pp.13-36，2022年２月18日（査読なし）

「そこに港は存在したのか？―伝承からたどる中世の益田」田中大喜編『中世武家領主の世界―現地と文献・モノから探る―』勉誠出版，pp.189-206，2021年８月20日（査読なし）

4　展示図録・資料図録・映像・DB・デジタル・コンテンツ開発

「伝承にある高津川の川港はどこか？」『企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」』国立歴史民俗博物館，p.64，2022年３月15日

5　学会・外部研究会発表

「육지화되는 섬, 고립되는 섬 - 변화하는 세토나이해（瀬戸内海）의 바닷길 -陸地化する島，孤立化する島―変化する瀬戸内海の海の道―」『2021년 목포대 도서문화연구원 인문한국플러스（HK+）섬 인문학 학술대회 `섬, 위기의 바람과 변화의 물결`（2021年木浦大学校島嶼文化研究院人文韓国プラス（HK＋）島人文学学術大会「島，危機の風と変化の波」)』オンライン，大韓民国，韓国語，2021年４月23日

「일본의 해조류 채취관행과 어업공동체　日本の海藻類採取慣行と漁業共同体」『목포대 도서문화연구원, 목포대 문화와자연유산연구소 인문한국플러스（HK+）섬 인문학 세미나 `어업공동체와 민속지식, 그 지속과 변화`（木浦大学校島嶼文化研究院，木浦大学校文化と自然遺産研究所　人文韓国プラス（HK＋）島人文学セミナー「漁業共同体と民俗知識―その持続と変化」)』オンライン，大韓民国，韓国語，2021年７月７日

コメント，『日本民俗学会第73回年会公開シンポジウム「海が結ぶ日本と世界―渋沢敬三と日本常民文化研究所」』，ハイブリッド，2021年11月９日

7　その他

「旅に出て，ふるさとに生きる―人の移動の民俗学―」和歌山県立紀伊風土記の丘開館50周年記念令和３年度秋期特別展「海に挑み，海をひらく―きのくに七千年の文化交流史―」シンポジウム「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」予稿集・論考集，2021年11月28日

「エビス神　笑顔の神さま，奥深い信仰のかたち」『小原流挿花』71-12，一般財団法人小原流，p.46，2021年12月１日

「漁師の粋」『REKIHAKU』５号，国立歴史民俗博物館，pp.92-93，2022年２月26日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

②　他の機関

神奈川大学日本常民文化研究所基盤共同研究「海域・海村の景観史に関する総合的研究」（研究代表者：安室知〔神奈川大学〕）共同研究員，2019年度～

③　機構

総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築（研究代表者：後藤真），2016～2021年度

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築（主導機関：国立歴史民俗博物館，国立国語研究所）地域における歴史文化研究拠点の構築（研究代表者：小池淳一），2016～2021年度

在外日本資料調査・活用による日本研究と日本文化理解の促進（主導機関：国際日本文化研究センター）「北米における日本関連在外資料調査研究・活用―言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築―」（研究代表者：松田睦彦），2016～2021年度

ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―（研究代表者：日高薫），2016～2021年度

2　外部資金による研究

科学研究費基盤研究B「朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究―イワシをめぐる韓国の文化変化―」（研究代表者：松田睦彦［国立歴史民俗博物館］），2017～2021年度

科学研究費基盤研究A「琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家」（研究代表者：村木二郎［国立歴史民俗博物館］），研究分担者，2018～2021年度

科学研究費基盤研究B「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」（研究代表者：田中大喜［国立歴史民俗博物館］），研究分担者，2019～2022年度

科学研究費基盤研究B「モノ・人・権力の現代民俗学：日中韓の比較に基づく批判的〈民具〉研究の構築」（研究代表者：門田岳久［立教大学］），研究分担者，2021～2024年度

科学研究費基盤研究C「ポスト専業化時代における経験知のマネジメントとその限界性―農山漁業の事例から」（研究代表者：石本敏也［聖徳大学］），研究分担者，2019～2021年度

4　主な展示・資料活動

2020年度特集展示「海の帝国琉球―八重山・宮古・奄美からみた中世」展示プロジェクト委員

2021年度企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」展示プロジェクト委員

総合展示第５室（近代）展示リニューアル委員

三　社会活動等

1　館外における各種委員

【学会】一般社団法人日本民俗学会 理事【市史】木更津市史編集部会 委員，府中市史編さん専門部会 委員【委員】熱海市教育委員会史跡江戸城石垣石丁場跡調査・整備委員会 委員，伊東市江戸城石垣石丁場跡保存活用委員会委員

2　講演・カルチャーセンターなど

「旅に出て，ふるさとに生きる―人の移動の民俗学―」和歌山県立紀伊風土記の丘開館50周年記念令和３年度秋期特別展「海に挑み，海をひらく―きのくに七千年の文化交流史―」連続講座，和歌山県立紀伊風土記の丘，2021年11月21日

「エビスのせかい」国立歴史民俗博物館友の会オンライン講座，2021年12月16日

3　マスコミ

「大漁もたらす「福の神」」毎日新聞（夕刊），p.3，毎日新聞社，2021年12月20日

「全国の「エビス」多彩な表情紹介」毎日新聞（朝刊），p.27，毎日新聞社，2021年９月25日

「エビスさま　各地の信仰様々」朝日新聞（朝刊），p.22，朝日新聞社，2021年11月17日

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

コロナ禍のため，韓国での現地調査についてはおこなうことができなかったが，おもに国内の文献資料を用いて，朝鮮海出漁の背景となる日朝間の外交についての調査・研究を実施した。

三上　喜孝　MIKAMI Yoshitaka　教授（2017.11～），研究推進センター長（2020～2021）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2021～）生年：1969

【学歴】東京大学文学部国史学専修課程卒業（1992年），東京大学大学院人文科学研究科日本史学修士課程修了（1994），東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻課程（1998年単位取得退学）【職歴】山形県立米沢女子短期大学講師（2000.4～），山形大学人文学部助教授（2002.9～），同准教授（2007.4～），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2014），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2017.11），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2021.11），研究推進センター長併任（2020～2021）【学位】博士（文学）（東京大学文学部2001）【専門分野】日本古代史【主な研究テーマ】東アジア文字文化交流史，古代地域社会史，貨幣史【所属学会】木簡学会，史学会，日本史研究会，正倉院文書研究会，東北史学会，韓国木簡学会ほか

●主要業績

1．【単著】『日本古代の貨幣と社会』261頁，吉川弘文館，2005年７月
2．【単著】『日本古代の文字と地方社会』335頁，吉川弘文館，2013年８月
3．【単著】『落書きに歴史をよむ』232頁，吉川弘文館，2014年４月
4．【論文】「古代の辺要国と四天王法」（『山形大学歴史・地理・人類学論集』５，pp.115-126，2004年３月）
5．【論文】「韓国出土木簡と日本古代木簡―比較研究の可能性をめぐって―」（『韓国古代木簡の世界』pp.286-307，雄山閣，2007年３月）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書

（分担執筆）『新書版　性差（ジェンダー）の日本史』集英社インターナショナル新書，2021年10月12日

2　論文

「日本出土の古代木簡　-戸籍と木簡-」『木簡と文字』26，pp.327-334，大韓民国，韓国語，2021年６月（査読有）

「古代日本における人面墨書土器と祭祀」『東西人文』16，pp.301-315，大韓民国，2021年８月（査読有）

「東アジアの木簡」鈴木靖民監修『古代日本対外交流史事典』八木書店，pp.105-109，2021年11月

「韓日木簡からみた古代東アジアの医薬文化」『東西人文』17，pp.177-195，大韓民国，韓国語，2021年12月（査読有）

「古代日本の論語木簡の特質　-韓半島出土の論語木簡との比較を通して-」慶北大学校人文学術院HK+事業団研究叢書１『東アジアにおける論語の伝播と桂陽山城』，pp.341-360，2022年１月31日，韓国語（査読有）

「古代日本における人面墨書土器と祭祀」慶北大学校人文学術院HK+事業団研究叢書２『慶山市所月里木簡の総合的検討』，pp.425-438，2022年１月31日，韓国語（査読有）

「漢字文化の東アジア的展開と列島世界」『地域の古代日本　東アジアと日本』，KADOKAWA，pp.169-205，2022年２月16日

「出土文字資料から見た払田柵の機能」『国立歴史民俗博物館研究報告』第232集，国立歴史民俗博物館，pp.277-286，2022年３月（査読有）

「出土文字資料の集成的研究　平泉出土文字資料へのアプローチ（２）片仮名木簡」『平泉学研究年報』２，岩手県教育委員会，2022年３月

武田幸男，稲田奈津子，三上喜孝「水谷悌二郎日記（抄）」『国立歴史民俗博物館研究報告』第234集，国立歴史民俗博物館，pp.37-120，2022年３月31日（査読有）

3　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など

武田幸男，稲田奈津子，三上喜孝「水谷悌二郎日記（抄）」『国立歴史民俗博物館研究報告』第234集，国立歴史民俗博物館，pp.37-120，2022年３月31日（査読有）

5　学会・外部研究会発表

「古代日本における人面墨書土器と祭祀」韓国・国立慶北大学校人文学術院HK+事業団第３回国際学術大会，韓国・国立慶北大学校人文学術院，2021年４月27日

「出土文字資料の集成的研究」平泉学研究会，岩手大学，2022年２月25日

７　その他

「むかしの落書きにはどんなことが書かれているのですか」国立国語研究所編『日本語の大疑問』幻冬舎新書，pp.225-229，2021年11月25日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

①　歴博

「総合資料学の創成と日本歴史に関する研究資源の共同利用基盤構築」（研究代表者：西谷 大）2016～2021年度

③　機構

「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」（研究代表者：小倉慈司）2016～2021年度

「地域における歴史文化研究拠点の構築」（研究代表者：小池淳一）2016～2021年度

「北東アジア地域研究 自然環境と文化・文明の構造」（研究代表者：池谷和信）2016～2021年度

２　外部資金による研究

科学研究費基盤研究（B）「古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開」研究代表者，2019～2022年度

科学研究費基盤研究（C）「古代の宮中宗教行事に関する日中韓比較研究」（研究代表者：堀裕）研究分担者，2018～2021年度

科学研究費基盤研究（B）「文書群復元と歴史的景観復元の融合による栄山寺および栄山寺領の総合的研究」（研究代表者：下村周太郎）研究分担者，2020～2023年度

科学研究費基盤研究（B）「格・式研究を踏まえた日本古代社会史像の再構築」（研究代表者：小倉慈司）研究分担者，2020～2022年度

科学研究費基盤研究（C）「『日本書紀』の注釈的研究（研究代表者：金沢英之）研究分担者，2020～2022年度

岩手県受託研究「出土文字資料の集成的研究」（研究代表者：三上喜孝）2020～2024年度

３　国際交流事業

慶北大学校人文学術院HK+事業団・国立歴史民俗博物館共同学術大会『古代韓国と日本の文字文化と書写材料』，2022年２月23日（オンライン）

三　社会活動等

１　館外における各種委員

福島県立博物館収集展示委員会委員（福島県）

国史跡上人壇廃寺跡整備委員会委員（福島県須賀川市）

泉官衙遺跡保存整備指導委員会委員（福島県南相馬市）

秋田城跡環境整備指導委員会委員（秋田県秋田市）

郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会委員（宮城県仙台市）

府中市史編さん専門部会委員（東京都府中市）

２　講演・カルチャーセンターなど

「仏堂の落書きにみる中世びとの交流・信仰」NHK文化センター柏教室　2021年８月21日（土）　14：00～15：30（オンライン）

４　社会連携

②　共同研究

岩手県受託研究「出土文字資料の集成的研究」（研究代表者：三上喜孝）2020～2024年度

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

昨年度に引き続き，新型コロナウィルス感染拡大の影響で県外への調査出張が実現できなかったが，代替措置として，館蔵資料の『聆濤閣集古帖』とその関連資料の実見調査と，関連文献の収集につとめた。研究成果については令和４年度末の企画展示で公開する。

村木　二郎　MURAKI Jiro　准教授（2008.10～）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻准教授（2008～），生年：1971

【学歴】京都大学文学部史学科（考古学専攻）（1995年卒業），京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻考古学専修修士課程（1997年修了），京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻考古学専修博士後期課程（1999年中退）
【職歴】国立歴史民俗博物館考古研究部助手（1999），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教併任（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2008），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2008）
【学位】文学修士（京都大学）（1997年取得）【専門分野】日本考古学【主な研究テーマ】日本中世の考古学的研究【所属学会】史学研究会，日本考古学協会【研究目的・研究状況】信仰，都市，生産技術など，考古学の立場から中世史を総合的に研究する。

●主要業績

1．【新・特集展示】『海の帝国琉球―八重山・宮古・奄美からみた中世―』令和２年度歴博新特集展示，展示代表，2021年
2．【企画展示】『時代を作った技―中世の生産革命―』平成25年度歴博企画展示，展示代表，2013年
3．【研究報告特集号】編著「特集号 中世東アジア海域世界における琉球の動態に関する総合的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第226集，305頁，2021年３月
4．【研究報告特集号】編著「特集号 中世の技術と職人に関する総合的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第210集，272頁，2018年３月
5．【編著】『中世のモノづくり』164頁，朝倉書店，2019年３月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

２　論文
「陶磁器からみた中世益田」田中大喜編『中世武家領主の世界』勉誠出版，pp.241-259，2021年８月20日

４　展示図録・資料図録・映像・ＤＢ・デジタル・コンテンツ開発
共著：企画展示図録『中世武士団―地域に生きた武家の領主―』186頁，国立歴史民俗博物館，2022年３月15日

５　学会・外部研究会発表
「陶磁器からみた先島の集落遺跡と琉球帝国」第41回日本貿易陶磁研究会研究集会，オンライン，2021年９月19日

７　その他
「歴史へのアプローチ①中国の記録に見る日本列島p.32-33」山川教科書解説『中学歴史　日本と世界　教師用指導書』（上），pp.64-65，東洋館出版社，2021年４月１日

二　主な研究教育活動

２　外部資金による研究
科学研究費基盤研究Ａ「琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家」（研究代表者：村木二郎）研究代表者，2018～2021年度
科学研究費基盤研究Ｂ「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」（研究代表者：田中大喜）研究分担者，2019～2022年度
東京大学史料編纂所2021年度一般共同研究「中世におけるトカラ・奄美・琉球関係史料の学際的研究」（研究代表者：村木二郎）研究代表者

４　主な展示・資料活動
総合展示第１室「古代国家と列島世界」，第２室「王朝文化」「東国と西国」「大名と一揆」「民衆の生活と文化」「大航海時代のなかの日本」展示プロジェクト委員
2020年度新特集展示「海の帝国琉球―八重山・宮古・奄美からみた中世―」展示プロジェクト委員（代表）

2021年度企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」展示プロジェクト委員
2022年度企画展示「いにしえが，好きっ！」展示プロジェクト委員

三　社会活動等

1　館外における各種委員
中世学研究会世話人
日本学術振興会特別研究員等審査会委員
文化庁中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会委員
熱海市史跡江戸城石垣石丁場跡調査・整備委員会委員
伊東市江戸城石垣石丁場跡保存活用委員会委員
岐阜県古代・中世寺院跡総合調査検討委員会委員
印旛郡市文化財センター理事

2　講演・カルチャーセンターなど
「八重山・宮古・奄美からみた琉球帝国」第432回歴博講演会，国立歴史民俗博物館講堂，2021年４月10日
「海の帝国琉球―特別展「海の帝国琉球」展によせて」朝日カルチャーセンター，新宿，2021年４月14日
「特集展示海の帝国琉球―八重山・宮古・奄美からみた中世―について」友の会講座，国立歴史民俗博物館第一会議室（オンライン），2021年４月23日
「海の帝国琉球―国立歴史民俗博物館特集展示によせて」朝日カルチャーセンター，千葉，2021年５月６日
「中世人のくらしと植物」第268回くらしの植物苑観察会，国立歴史民俗博物館くらしの植物苑，2021年７月24日
「中世の信仰を分析する～堂ヶ谷遺跡の青銅製品から～」静岡県埋蔵文化財センター主催令和３年度「富士山の日」歴史講演会，蒲原生涯学習交流館ホール，2022年２月19日

3　マスコミ
「海の帝国琉球」沖縄タイムス，2021年４月21日

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
　新型コロナ禍のため，予定していた調査出張はすべてキャンセルになってしまった。そのため現地調査に資する関連書籍を購入した。来年度は同テーマでのプロジェクトを実施する予定である。

山田　慎也　YAMADA Shinya　教授（2019.7～），広報連携センター長（2020.4～2022.3）

併任：総合研究大学院大学日本歴史研究専攻教授（2019.7～），生年：1968

【学歴】慶應義塾大学法学部法律学科（1992年卒業），慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻修士課程（1994年修了），慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程（1997年単位取得退学）
【職歴】国立民族学博物館講師（COE非常勤研究員）（1997），東京外国語大学非常勤講師（1997），国立歴史民俗博物館民俗研究部助手（1998），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部准教授（2007），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2019.7～），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2019.7～），広報連携センター長併任（2020.4～2022.3）
【学位】社会学博士（慶應義塾大学）（2000年取得）【専門分野】民俗学・文化人類学【主な研究テーマ】葬制と死生観・儀礼研究【所属学会】日本民俗学会，日本文化人類学会，日本宗教学会，宗教と社会学会，葬送文化学会【研究目的・研究状況】http://www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/kenkyuusya/yamada/index.html

●主要業績

1．【単著】『現代日本の死と葬儀―葬祭業の展開と死生観の変容』350頁，東京大学出版会，2007年９月
2．【編著】国立歴史民俗博物館・山田慎也・鈴木岩弓編『変容する死の文化―現代東アジアの葬送と墓制』226頁，

東京大学出版会，2014年11月
3．【論文】「告別式の平準化と作法書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第205集, pp.137-166, 2017年３月（査読有）
4．【研究報告特集号：編著】『民俗儀礼の変容に関する資料論的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第205集，490頁，2017年３月
5．【資料図録：編著】『ライデン民族学博物館・国立歴史民俗博物館所蔵死絵』，2016年３月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

2　論文

「単身化社会における葬送儀礼とつながりの形成」冠婚葬祭総合研究所論文集（令和２年度），冠婚葬祭総合研究所，pp.26-41，2021年５月31日（査読なし）

5　学会・外部研究会発表

「新型コロナウイルス感染症の流行と火葬」日本民俗学会第73回年会，神奈川大学，2021年10月10日

7　その他

「困窮者の葬儀に対し公的支援が始まったのははぜか：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの22」『月刊住職』269，興山舎，pp.135-139，2021年４月１日

「独居困窮者の葬儀を実現させる自治体支援の可能性：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの23」『月刊住職』270，興山舎，pp.131-135，2021年５月１日

「全市民に終活支援を行う自治体が増え始めている訳：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの24」『月刊住職』271，興山舎，pp.137-141，2021年６月１日

「お盆に去来する精霊の迎え方送り方の現状と変化:葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの25」『月刊住職』272，興山舎，pp.122-126，2021年７月１日

「お盆の時期も期間も地域によることなるのはなぜか：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの26」『月刊住職』273，興山舎，pp.149-153，2021年８月１日

「盆棚の形の変化でお盆の重要な意義も変わりつつある：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの27」『月刊住職』274，興山舎，pp.117-121，2021年９月１日

「家々になぜ仏壇があるのか？その起源から分かること：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの28」『月刊住職』276，興山舎，pp.115-119，2021年11月１日

「江戸時代に庶民が用いた仏壇の形から分かること：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの29」『月刊住職』277，興山舎，pp.141-145，2021年12月１日

「仏壇に祀られている位牌の様々な形と営みで分かること：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの30」『月刊住職』278，興山舎，pp.139-143，2022年２月１日

「白木位牌と紙位牌とがある喪主による位牌分けの役割：葬送の習俗が揺らいでいる深層にあるもの31」『月刊住職』279，興山舎，pp.135-139，2022年３月１日

「お盆という行事」『REKIHAKU』３号，国立歴史民俗博物館，pp.102-103，2021年６月26日

「変わりゆく葬儀　1　花をこしらえる」『REKIHAKU』４号，国立歴史民俗博物館，pp.98-100，2021年10月26日

「死絵　旅立てる役者を描く」『REKIHAKU』５号，国立歴史民俗博物館，pp.94-95，2022年２月26日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基盤研究「家内における死者祭祀・祭具の現在とその歴史的検討：変容するモノ・家族・社会」（研究代表者：土居浩）2020～2022年，副代表

2　外部資金による研究

科学研究費基盤研究（B）「超高齢多死社会を見据えた葬墓制システムの再構築：多様な生前と死後をつなぐために」（研究代表者：山田慎也）2021年度～2024年度，研究代表者

科学研究費基盤研究（A）「死別悲嘆の医療福祉負荷とその要因解明：大規模日本追跡調査及び国際比較」（研究代表者：カール・ベッカー）2018年度～2021年度，研究分担者

科学研究費基盤研究（B）「病院は死者をいかに遇することができるか：医療現場での『無宗教』者への死者

へのケア」（研究代表者：山本佳世子）2021年度～2023年度，研究分担者

4　主な展示・資料活動

特集展示第４室「亡き人と暮らす：位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗」展示代表者，会期：2022年３月15日～９月25日

総合展示第４室「『民俗』へのまなざし」展示プロジェクト委員

総合展示第４室「おそれと祈り」展示プロジェクト委員

5　教育

大正大学文学研究科　学位審査副査 「葬制の変容と住民組織に関する研究―山形県最上郡最上町の契約講と新生活運動―」大場あや，2022年１月31日

「民俗展示リニューアルと葬制展示」歴史民俗資料館等専門職員研修会，オンライン，2021年11月11日

三　社会活動等

1　館外における各種委員

日本宗教学会編集委員会委員

日本葬送文化学会理事

冠婚葬祭総合研究所客員研究員

全国冠婚葬祭互助協会葬儀品質認定制度審査会委員

2　講演・カルチャーセンターなど

「変容する葬送儀礼とその行方」第27回現代仏教塾，高明寺，2021年４月８日

「葬送儀礼の変容と現代における葬儀の意義」真宗大谷派東京２組寺族研修，オンライン，2021年５月10日

「葬送儀礼の変容と現代的課題」真宗大谷派教学館学習会，オンライン，2021年７月８日

「葬儀の変容と死生観」令和３年度教化研修所第四講座，オンライン，2021年９月16日

「仏壇の背景にある先祖供養と仏教を紐解く：バーチャルとリアルの狭間で生き残る仏壇の立ち位置」全日本宗教用具協同組合令和３年度全国研修会，メルパルク京都，2021年10月６日

「葬送儀礼の変遷，葬儀の意味・本質について学ぶ」提携葬儀社スタッフ向け研修会，広島国際ホテル，2021年10月６日

「死生観・葬送儀礼の歴史と変化」真言宗智山派安房第二教区，総持院，2021年11月26日

3　マスコミ

テレビ　NHK『週間まるわかりニュース』「変わり続ける⁉ おせち料理」2021年12月25日

新聞『読売新聞』「コロナ禍かわるお別れ」2021年４月７日朝刊

新聞『朝日新聞』「フォーラム：コロナ下のお別れ」2022年３月20日朝刊

4　社会連携

②　共同研究

「冠婚葬祭と情報化に関する研究」研究代表者山田慎也，冠婚葬祭総合研究所，2021～2023年

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告

葬送儀礼については，都市を中心に，家族葬など近親者を絞り，また通夜や精進落としの会食などがなくなっていった。精進落としの会食はコロナ禍の影響が大きいが，葬儀の小規模化や通夜の廃止などに関してはコロナが直接の要因というよりも，小規模簡略化の流れがコロナ禍によって加速していったことがわかった。

吉井　文美　YOSHII Fumi，准教授（2018.4～）

【学歴】東京大学文学部卒業（2008年），東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了（2010年），同博士課程修了（2014年）

【職歴】東京大学史料編纂所リサーチ･アシスタント（2013～2014年），山形大学人文学部専任講師（2014～2017年），国立台湾師範大学兼任助理教授（2016～2017年），山形大学人文社会科学部専任講師（2017～2018年）

【学位】博士（文学，東京大学）【専門分野】日本近代史，東アジア国際関係史【主な研究テーマ】近代日本の対中

政策とその国際的影響，日本の帝国支配をめぐる外交史的研究【所属学会】史学会

●主要業績

1．【論文】「日本の中国支配と海関政策の展開：人事問題を中心として」『日本歴史』865号（2020年）
2．【論文】「日中戦争下における揚子江航行問題―日本の華中支配と対英米協調路線の蹉跌―」『史学雑誌』第127編第３号（2018年）
3．【共著】『日中戦争の国際共同研究５　中国の戦時経済と変容する社会』（担当範囲：日本の華北支配と開灤炭鉱）（慶應義塾大学出版会，2014年）
4．【論文】「一九三五年の『新生』不敬記事事件」『日本歴史』789号（2014年）
5．【論文】「「満洲国」創出と門戸開放原則の変容―「条約上の権利」をめぐる攻防―」『史学雑誌』第122編第７号（2013年）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

5　学会・外部研究会発表
「日中戦争下の珠江航行をめぐる日英交渉」中国現代史研究会，オンライン，2021年８月21日

7　その他
「遺跡を尋ねて 第Ⅴ期(第４回)中国天津 旧開灤鉱務総局の建物」『學士會報』2021―５，pp.101-106，学士会，2021年９月

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
基幹研究「近代日本における産業・労働の展開とジェンダー」（代表：吉井文美，2021年４月～2021年10月１日），同（代表：樋浦郷子，2021年10月２日～2022年３月）副代表
③　機構
ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用―言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」（代表：朝日祥之）2018年度～2021年度

4　主な展示・資料活動
総合展示第５室・第６室リニューアル委員

5　教育
東京大学文学部非常勤講師（日本史学演習，2021年４月～８月）

三　社会活動等

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
日中戦争期（1937-45年）に日本が華南（中国南部）を支配したことが，現地経済や国際関係に与えた影響について考察した。令和２年度研究・プロジェクトで珠江の事例を取り上げたことを踏まえて，今年度はさらに研究対象を拡大させ，日本の華南支配の特徴を析出することを目指した。研究成果の一部をもとに研究報告を行った。

吉村　郊子　YOSHIMURA Satoko　助教（2007～）

【学歴】奈良女子大学理学部生物学科（1992年卒業），京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程人間・環境学専攻（1994年修了），ナミビア大学学際研究センター社会科学部門（共同研究生：1995～1998年），京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程人間・環境学専攻（2000年研究指導認定退学）【職歴】国立歴史民俗博物館歴史研究部助手（2000），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教（2007）【学位】人間・環境学修士（京都大学）（1994年取得）【専

門分野】生態人類学，文化人類学【主な研究テーマ】日本の山間地域における人・生業・自然に関する人類学的研究，アフリカ南部の牧畜民に関する人類学的研究，自然と信仰・音に関する研究【所属学会】日本文化人類学会，日本アフリカ学会，生態人類学会

●主要業績

1．【分担執筆】「ヒンバの人々の暮らし―「伝統」と現在を生きる」水野一晴・永原陽子編『ナミビアを知るための53章』（2016年）pp.279-283
2．【論文】「遺された／生きる者にとっての墓―牧畜民ヒンバの事例から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第181集（2014年，査読有）pp.81-109
3．【論文】「ナミビアの牧畜民ヒンバと土地のかかわり―その歴史と現在」『国立歴史民俗博物館研究報告』第145集（2008年，査読有）pp.145-229
4．【分担執筆】「第７章　土地と人をつなぐもの―ナミビアの牧畜民ヒンバにとっての墓」田中二郎他編『遊動民（ノマッド）―アフリカの原野に生きる』（明石書店，2004年）pp.439-464
5．【分担執筆】「第４章　炭焼きとして現代を生きぬく」篠原 徹編『現代民俗誌の地平１．越境』（2003年，朝倉書店）pp.70-96

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書
共編著：澤田和人・吉村郊子『REKIHAKU』５号，112頁，国立歴史民俗博物館，2022年２月26日

二　主な研究教育活動

5　教育
早稲田大学非常勤講師（教育学部「文化人類学研究Ⅰ」「文化人類学研究Ⅱ」）
音声ガイドアプリの作成（進行状況・必要物等の全体の整理，音声ファイル再生画面に表示される個別画像の作成と取り纏等）

三　社会活動等

四　活動報告

3　研究・調査プロジェクト報告
　これまでの調査で得られた資料の整理・検討を進めつつ，その比較検討に必要な資料を収集する予定であったが，コロナ禍の影響が続くなか，後者の調査についてはあまり実施できなかった。そのため，昨年度にひき続き，調査で得た画像資料のデータ化と，関連文献の購入・収集を行いつつ，これまでに得た各資料をまとめてデータ化する作業を進めた。そうしたデータの比較検討と考察を進めるために，次年度はできれば現地調査と文献資料調査を行いたく思っている。

［テニュアトラック助教］

橋本　雄太　HASHIMOTO Yuta　テニュアトラック助教（2017.4～）

【学歴】京都大学文学部（2004-2008），京都大学文学研究科修士課程（2008-2010），京都大学文学研究科博士課程課程（2013-2017）
【職歴】株式会社内田洋行社員（2010-2012），大阪大学特任研究員（2015-2017），国立国会図書館委嘱研究員（2015-2021），国立歴史民俗博物館テニュアトラック助教
【学位】博士（文学）（京都大学文学研究科2018年取得）【専門分野】人文情報学，科学史【主な研究テーマ】人文学資料を対象にしたクラウドソーシング，歴史研究に関わる教育ソフトウェア開発，近代西洋数学史
【所属学会】情報処理学会，Japanese Association of Digital Humanities，日本科学史学会【研究目的・研究状況】クラウドソーシング技術を駆使した歴史資料の活用をテーマに研究をおこなっている．前近代日本語史料の市民参

加型翻刻プラットフォーム「みんなで翻刻」や，くずし字解読の学習用アプリケーション「KuLA」の開発にあたっている．「みんなで翻刻」では2022年４月時点で2000万文字の近世史料が翻刻され，KuLAは2016年の公開後20万回以上ダウンロードされている．

【メールアドレス】yhashimoto@rekihaku.ac.jp

●主要業績

１．【著書】共著：「歴史情報学の教科書」文学通信，2019年３月
２．【著書】共著：『アプリで学ぶくずし字 くずし字学習支援アプリKuLAの使い方』笠間書院，2017年２月
３．【論文】「音声読み上げとフォーラム機能を備えた中世文書オンライン展示システムの開発」国立歴史民俗博物館研究報告，224号，pp.311-328，2021年３月（査読あり）
４．【論文】共著：「『みんなで翻刻』の運用成果と参加動向の報告」，人文科学とコンピュータシンポジウム2020論文集，pp.39-46，2020年12月（査読あり）
５．【論文】「AI 文字認識とクラウドソーシングを組み合わせた歴史資料の大規模テキスト化」，人工知能学会誌，Vol. 35，No. ６，pp.754-760，2020年11月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

２　論文

橋本雄太「［動向レビュー］くずし字資料の解読を支援するデジタル技術」カレントアウェアネス･ポータル，No.351，pp.10-13，2022年３月

橋本雄太，金甫榮，中村覚，小風尚樹，井上さやか，茂原暢，永崎研宣「写真資料のクラウドアノテーションシステムの開発：『渋沢栄一伝記資料」別巻第 10 を事例に」人文科学とコンピュータシンポジウム2021論文集，pp.132-137，2021年12月

５　学会・外部研究会発表

橋本雄太「みんなで参加する古文書解読」，日本マーケティング学会 第８回第８回ユーザー・コミュニティとオープン・メディア研究報告会，2022年２月（招待あり）

Yuta Hashimoto「Can Crowdsourcing Boost Data-driven Research in Pre-modern Japanese History」EAJS2021，オンライン，2021年８月

７　その他

橋本雄太，加納靖之「図書館と「みんなで翻刻」」『図書館雑誌』115―８，pp.478-480，日本図書館協会，2021年８月

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

①　歴博

「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」（2017年度～）

２　外部資金による研究

科学研究費助成事業 若手研究「データ駆動型歴史研究のための共用テキストレポジトリ構築」代表者 2018年度～2022年度

科学研究費助成事業 基盤B「近世日本数理科学史の領野横断究の実践」分担者 2020年度～2022年度

科学研究費助成事業 挑戦的研究（開拓）「日本語コーパスに対する情報付与を核としたオープンサイエンス推進環境の構築」分担者 2019年度～2021年度

科学研究費助成事業 基盤A「歴史ビッグデータ研究基盤による過去世界のデータ駆動型復元と統合解析」分担者 2019年度～2021年度

三　社会活動等

１　館外における各種委員

情報処理学会人文科学とコンピューター研究会幹事（2021年４月-）

情報処理学会 論文誌編集委員（2019年４月-）

JADH2021プログラム委員長（2021年）

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

「みんなで翻刻」上で得られた650万文字のテキストに対しマークアップおよびエンティティリンキングを実施するプラットフォーム「みんなでマークアップ」（https://markup.honkoku.org/）を2021年12月に一般公開した。ただし機能面では非常に限定されており，2022年度にかけて改修が必要である．

［特任教授・准教授・助教］

天野　真志　AMANO Masashi　特任准教授（2017.7～）

【学歴】富山大学人文学部人文学科（2004年卒業），東北大学大学院文学研究科博士前期課程（2006年修了），東北大学大学院文学研究科博士後期課程（2010年単位取得退学）
【職歴】東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者（2010-2012），東北大学災害科学国際研究所助教（2012-2017），人間文化研究機構研究推進センター研究員（2017.7～），併任国立歴史民俗博物館特任准教授（2017.7）
【学位】博士（文学，東北大学），【専門分野】日本近世・近代史，資料保存，【主な研究テーマ】日本近世近代移行期における政治・社会史研究，近世・近代社会における地域の由緒に関する研究，地域歴史文化の保全・継承に関する研究，地域歴史文化資料の災害対策に関する研究，【所属学会】文化財保存修復学会，明治維新史学会，歴史学研究会，東北史学会，日本古文書学会，日本アーカイブズ学会，歴史科学協議会

●主要業績

１．【著書】『幕末の学問・思想と政治運動』吉川弘文館，260頁，2021年４月10日
２．【論文】「歴史文化資料の保存・継承に向けた課題と可能性」，Integrated Studies of Cultural and Research Resourcesミシガン大学出版局fulcrum，pp.151-161，2019年３月
３．【論文】「出羽国秋田藩の文書調査と由緒管理」，『常陸大宮市史研究』３，pp.13-32，2020年３月
４．【論文】「災害経験をめぐる記憶の行方」，『歴史学研究』1005，pp.28-33，2021年２月
５．【学会･外部研究会発表】「幕末期の気吹舎情報をめぐる政治･思想関係」2019年度東北史学会大会，東北大学，2019年10月６日

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

１　著書

『幕末の学問・思想と政治運動』吉川弘文館，260頁，2021年４月10日
共編著：天野真志，後藤真『地域歴史文化継承ガイドブック』248頁，文学通信，2022年３月８日
編著：『石黒織紀『膺懲稗史』』255頁，蕃山房，2022年３月31日

２　論文

「とちぎ史料ネットをとりまくネットワークの現況」『日本文化研究』６，pp.102-108，國學院大學栃木短期大学，2021年12月31日
「松代藩士長谷川昭道の思想と政治―幕末維新期松代藩政治史の一断面―」『松代』35，pp.1-13，松代文化施設等管理事務所，2022年３月

５　学会・外部研究会発表

「地域資料保存の現在地点ととちぎ歴史資料ネットワーク」とちぎ歴史資料ネットワーク設立記念シンポジウム，オンライン，2021年８月７日
「歴史文化資料の保存・継承に向けたネットワーク構築とデータ連携の展望」日本デジタル・ヒューマニティーズ学会第11回年次シンポジウム（JADH2021），オンライン，2021年９月６日
「地域資料の保存と継承をめぐる現在」愛媛大学法文学部・愛媛資料ネット公開講演会，オンライン，2021年９月17日

７　その他

「地域歴史文化の継承と「資料ネット」活動」『歴史評論』855，pp.74-82，歴史科学協議会，2021年７月１日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

2021年度「地域歴史資料継承領域」第７回研究会、総合資料学2021年度第１回「地域連携・教育ユニット」研究会「資料保存の実務をめぐるコミュニケーション」オンライン，2022年１月８日

③　機構

広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌･災害からの地域文化の再構築」ユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表者：日高真吾）

2　外部資金による研究

科学研究費若手研究「幕末維新期の角館城下を中核とした知的関係と政治意識の形成」（代表者：天野真志）（2018～2021年度）

科学研究費特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（代表者：奥村弘）（2019～2023年度）

科学研究費基盤研究（A）「「国際古文書料紙学」の確立」（代表者：渋谷綾子）（2019～2022年度）

科学研究費基盤研究（A）「恒久的保存に向けた災害被災資料の特性解明と保存環境の構築」（代表者：松井敏也）（2020～2024年度）

科学研究費基盤研究（B）「近世・近代日本における「富国」論の政治的・社会的機能に関する研究」（代表者：小関悠一郎）（2021～2024年度）

東北大学災害科学国際研究所共同研究助成「多様な環境での保存を想定した被災資料継承の技術的検討」（代表者：天野真志）（2021年度）

東京大学史料編纂所一般共同研究「中近世古文書の多面的分析にもとづく料紙の歴史的変遷の研究」（代表者：天野真志）（2020～2021年度）

岡山大学文明動態学研究所共同研究「地域社会を支える歴史認識及び地域歴史資料学の基礎的研究」（代表者：今津勝紀）（2021年度）

5　教育

愛媛大学法文学部

京都芸術大学藝術学舎

国文学研究資料館アーカイブズカレッジ

三　社会活動等

1　館外における各種委員

福島県相馬市史編さん室調査執筆員

宮城県岩沼市史編纂室編集専門部会 震災部会調査執筆員

茨城県常陸大宮市史編さん委員会専門部会協力員

福島県富岡町アーカイブ施設整備有識者検討部会委員

宮城県岩沼市収集資料保存活用等検討会委員

歴史学協議会編集委員

明治維新史学会大会運営委員

2　講演・カルチャーセンターなど

「近世佐竹家中の歴史意識と常陸の記憶」茨城県立歴史館企画展１「中世佐竹氏の世界―千秋文庫所蔵文書から―」関連講演会，2021年５月15日

「地域の資料を守り伝えるために―珠洲の取り組みを見つめる―」スズ・シアター・ミュージアム設立シンポジウム，ラポルトすず（石川県珠洲市），2021年７月15日

「被災資料から見つめる亘理の歴史」令和３年度 郷土資料館町民講座 ものしり大学院，亘理町立郷土資料館（宮城県亘理町）2021年11月13日

「地域資料のアーカイブ」第23回図書館総合展フォーラム「地域資料と図書館アーカイブ」泉大津市立図書館（大阪府泉大津市），2021年11月18日

「自然災害と歴史文化の救済」愛知県立大学公開講座「被災資料のレスキュー方法を実践的に学ぶ」愛知県立大学（愛知県長久手市），2021年11月24日

４　社会連携
①　刊行物
「記憶の交流―移封後の佐竹家中と常陸―」『広報　常陸大宮』204，p.17，常陸大宮市，2021年９月
「地域の資料を守り伝えるために―珠洲の取り組みを見つめる―」スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」，奥能登国際芸術祭2020＋，2021年11月30日
「近代の林業と縁故引戻地」『小良ヶ浜』，pp.165-174，富岡町教育委員会，2022年３月

亀田　尭宙　KAMEDA Akihiro　特任助教（2019.10～）

生年：1984

【学歴】東京大学工学部システム創成学科（2007年卒業）東京大学大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻（2009年９月修了）東京大学大学院情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻（2012年９月単位取得退学）
【職歴】情報処理推進機構 未踏IT 人材発掘・育成事業 未踏本体 クリエータ（2009.７～2010.３），情報・システム研究機構 技術補佐員（2012.10～2013.３），同 特任研究員（2013.４～2014.９），湘南工科大学　コンピュータ応用学科 非常勤講師（2013.４～2014.９），京都大学地域研究統合情報センター　助教（2014.10～2016.12），京都大学東南アジア地域研究研究所 助教（2017.１～2019.９）
【学位】修士（環境学）（東京大学）（2009年取得）
【専門分野】情報知識学（Linked Dataの構築と活用，自然言語処理による知識抽出，デジタル知識の保存と継承），人文社会情報学
【主な研究テーマ】地域に関わる知識の共有と継承のための情報技術研究
【所属学会】情報処理学会，人工知能学会，言語処理学会，デジタルアーカイブ学会

●主要業績

１．Akihiro Kameda, Kiyoko Uchiyama, Hideaki Takeda, Akiko Aizawa：Extraction of Semantic Relationships from Academic Papers using Syntactic Patterns, The Fifth International Conference on Information, Process, and Knowledge Management, (2013).
２．Akihiro Kameda, Fumihiro Kato, Utsugi Jinbo, Ikki Ohmukai, Hideaki Takeda：Integrate Japanese Red List into LOD of Species, PNC Annual Conference and Joint Meetings 2013 (2013).
３．亀田　尭宙，後藤　真「地域歴史資料情報基盤のデータモデル構築：保存・発見・活用の高度化にむけて」じんもんこん2020，情報処理学会，オンライン，2020年12月13日.

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

二　主な研究教育活動

２　外部資金による研究（科学研究費などの外部資金，各種補助金による研究，企業・自体体による研究）
「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者：奥村弘），研究協力者，2019～2023年度
「インドネシアにおける土地所有権と泥炭地回復」（研究代表者：水野広祐）分担者，2019～2022年度
「インドネシア熱帯泥炭地における災害および水文・気象情報管理システムの構築」（研究代表者：甲山治）分担者，2019年10月～2022年度
「データベースをつうじた地域と科学の知の統合による気候応答型居住環境の創出」（研究代表者：山田協太）分担者，2018～2021年度

三　社会活動等

１　館外における各種委員
セマンティックウェブとオントロジー研究会専門委員（2020-2021年度）

四　活動報告

河合　佐知子　KAWAI Sachiko　特任助教（2021.1～）

【学歴】都留文科大学文学部初等教育学科（1993年卒業），カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校大学院他言語話者に対する英語教授法研究科修士課程（California State University, Los Angeles, MA in Teaching English to Speakers of Other Languages［TESOL］）（2000年修了），南カリフォルニア大学大学院東アジア言語・文化研究科修士課程（University of Southern California, MA in East Asian Languages and Cultures）（2007年修了），南カリフォルニア大学大学院歴史学科博士課程（University of Southern California, Ph.D. in History）（2015年修了）
【職歴】
ハーバード大学東アジア言語・文化学科カレッジ・フェロー（2015年７月～2016年６月），ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所ポスドク研究員（2016年８月～2017年６月），南カリフォルニア大学歴史学部博士研究員及び漢文ワークショップ アシスタント・ディレクター（2018年７月～2019年12月）
【学位】博士（歴史）（南カリフォルニア大学）（2015年取得），【専門分野】日本中世史，女性史・ジェンダー史
【主な研究テーマ】１）中世女院研究；２）前近代温泉文化史，【所属学会】総合女性史研究会，鎌倉遺文研究会，The Association for Asian Studies（AAS），The Asian Studies Association of Australia（ASAA），【研究目的・研究状況】平安･鎌倉期女院所領経営の分析を通して,「権利」（authority）と「力」（power）のギャップに注目し，女院やその周辺の人々が土地における「権利」をどのように使い，政治・経済・宗教・文化・軍事的な影響力を得たのかについて分析した。また，女院と男院のジェンダー的格差に伴う様々な要素が女院荘園経営におけるストラテジーに与えた影響を検討した。現在は，女性史・ジェンダー史の視点を取り入れつつ，前近代温泉文化史研究に取り組んでいる。

●主要業績

1．【論文：単著】「Talking to a Deity：The Royal Lady Hachijō-in at Prayer（八条院告文から見る女院の人生）」（査読済）（『The Medieval History Journal（１　中世史研究）』18巻２号，pp.278-304，Sage Publications，2015年10月）
2．【論文：共著】原始・古代の家族とジェンダー（Gender and Family in the Ancient and Classical Ages）」（『ラウトレッジ版―前近代史（Routledge Handbook for Premodern Japanese History）』，pp.202-215，with Ijūin Yōko［伊集院葉子］，Routledge，2017年６月）
3．【論文：単著】「Nyoin Power, Estates, and the Taira Influence：Trading Networks within and beyond the Archipelago（女院の「力」の再検討―中世荘園・平氏政権・列島を巡る貿易ネットワーク）」（『Land, Power, and the Sacred：The Estate System in Medieval Japan（土地・力・聖―荘園制と中世日本）』pp.281-318，Janet R. Goodwin and Joan R. Piggott, University of Hawaii Press, 2018年）
4．【論文：共著】「建長二年十月宣陽門院領六条殿分公事注進状の成立―『建久二年十月日長講堂領目録』の再検討」（査読有）（『鎌倉遺文研究』45号，pp.24-27, with Endō Motoo [遠藤基郎]，鎌倉遺文研究会，2020年４月）
5．【著書：単著】『Uncertain Powers：Sen'yōmon-in and Landownership by Royal Women in Early Medieval Japan（土地が生み出す「力」の複雑性：中世前期領主としての天皇家女性たち）』（ハーバード大学アジアセンター出版，2021年11月）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書
『Uncertain Powers：Sen'yōmon-in and Landownership by Royal Women in Early Medieval Japan（土地が生み出す「力」の複雑性：中世前期領主としての天皇家女性たち）』（ハーバード大学アジアセンター出版，2021年11月）

2　論文
「Empowering through the Mundane：Royal Women's Households in Twelfth and Thirteenth Century Japan（日常のモノから得られる力の可能性―十二世紀～十三世紀の皇族女性の家）」『Japan Forum』34.1号，DOI：10.1080/09555803.2020.1718180，2022年１月８日（査読有）
「The "Royal Family Roster and Payroll Office Protocols" and Exploring Gender Power Relations at the

Heian Court（『延喜式』第39巻「正親司」の史料的価値を英語圏に伝えるために―ジェンダー的視点を取り入れて）」『国立歴史民俗博物館研究報告』228，pp.41-54，国立歴史民俗博物館，2021年３月31日（査読有）
「『院号定部類記』に関する研究」『東京大学史料編纂所研究成果報告』2021-17，東京大学史料編纂所，2021年３月

5　学会・外部研究会発表
「Strategic Usages of Royal Women's Landholdings—Specific Nyoin Cases in Early Medieval Japan（中世女院から考察する皇族女性の土地経営のストラテジー）」台湾学会『Gendering Transformations（性別化的変遷）』，The National Central Library, the Nordic Institute of Asian Studies, and Taiwanese Feminist Scholars Association，台湾（オンライン，2021年10月28日[台湾時間]）
「BOOK TALK：Uncertain Powers：Sen'yōmon-in and Landownership by Royal Women in Early Medieval Japan」，CJS Thursday Lecture Series，アン・アーバー（ミシガン大学）,アメリカ合衆国（オンライン 2021年３月18日[日本時間]），イベントサイト：https://events.umich.edu/event/91088
パネル司会兼オーガナイザー・報告者「Persistence and Resilience：The Nyoin Institution and Female Contributions to the Continuation of Monarchical Power in Early Medieval Japan（中世前期王権における持続性と柔軟性—女性の歴史的貢献と女院制）」，『Chrysanthemum with Nine Lives? Longevity and Diversity in the Japanese Imperial Institution（天皇制の多様性と変遷—1500年以上も存続された背景を歴史から考える—）』，The Association for Asian Studies Annual Conference, Honolulu（アジア研究協会年次大会）ホノルル，アメリカ合衆国（オンライン，2022年３月26日[ホノルル時間]），イベントサイト：https://www.asianstudies.org/conference/

7　その他
新刊紹介「関口裕子著『日本古代社会の研究』」（『総合女性史研究』39号，pp.60-61，総合女性史学会，2022年３月
コラム「武士の家における妻の役割と立場」国立歴史民俗博物館　企画展示図録『中世武士団—地域に生きた武家の領主—』p.26，国立歴史民俗博物館，2021年３月15日
「オンライン記事：単著】「大変な今だから—「食」や「レシピ」を見つめてみよう（Survive this Challenging Time Together—Rethinking Food, Drink, and the Recipe!）」『くらしに人文知—コロナ時代を生き抜く』人間文化研究機構，（https://www.nihu.jp/jinbunchi/kurashi/index.html，2021年３月
コラム「『女院』から見直す日本史（Rethinking Japanese History through Examining Premier Royal Ladies [Nyoin]）」，『REKIHAKU』４号，pp.56-57，国立歴史民俗博物館，2021年10月26日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博
広領域連携型基幹研究プロジェクト「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」共同研究員，2020年度～2021年度
「外国史としての日本史—アメリカ合衆国における学位取得と教育（Japanese History as the History of a Foreign Country：Getting a Degree and Teaching in the US）」（国際研究集会「国境を越える『延喜式』（Exploring the Importance of Engi shiki on a Global Level）」国立歴史民俗博物館（オンライン，2021年12月18－19日[日本時間]）
基幹研究「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化の形成」の活動に参加2020年度～

②　他の機関
南カリフォルニア大学前近代日本学プロジェクト（USC Project for Premodern Studies）定例研究会・ワークショップ，2020年度～
東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点共同研究員　研究課題名：「院号定部類記」の史料的価値と意味的翻刻に関する研究，2021年度～
日本温泉文化研究会 定例研究会，2019年度～

③　機構
人文知コミュニケーター：共編著：金セッピョル・粂汐里・光平有希・岩崎拓也『くらしに人文知—コロナ時代を生き抜く』オンライン記事，研究会，2020年度～

[I-URIC] フロンティアコロキウム
・総括シンポジウム「多様な研究分野における『ジェンダーの課題』を共に考える共創の場の創出」多様性分科会報告，2021年度大学共同利用機関法人，東京（オンライン，2022年２月16日[日本時間]）
・分科会（多様性：異なるものの間の相互作用 ）の座長として勉強会やイベントを企画

２　外部資金による研究
基盤研究（B）20H01318「格・式研究をふまえた日本古代 社会像の再構築」（代表：小倉滋司）共同研究員，2020～2022年度
基盤研究（B）18H00700「東アジア諸王室における「后位」儀礼比較史の協業的研究」（代表：伴瀬明美）共同研究員，2021～2022年度

３　国際交流事業
国際研究集会「国境を越える『延喜式』Exploring the Importance of Engi shiki on a Global Level」（2021年12月18～19日[日本時間 オンライン]）企画・運営

４　主な展示・資料活動
2021年年度企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」国立歴史民俗博物館，会期：2022年３月15日－５月８日

５　教育
筑波大学筑波大学大学院共通科目「人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える」ティーム・ティーチング，2021年10～11月

三　社会活動等

２　講演・カルチャーセンターなど
大手町アカデミア×人間文化研究機構　講演要旨「『鮨鰒』が伝える食文化と古代日本史　平安時代の行政マニュアル『延喜式』を読み解く」ナビゲーター，2022年２月21日
https://www.yomiuri.co.jp/culture/academia/20211213-OYT８T50141/
サイエンスアゴラ2021「ジェンダーの視点から「生き方」を語り合おう　Let's Discuss "Way of Life" from Gender Perspectives」（URICフロンティアコロキウム「多様性」分科会の活動の一環として）企画運営･司会，2021年11月６日，https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/2021/session/06-c10.html，動画サイト：https://www.youtube.com/watch?v=OAVG９GcXFtM

清武　雄二　KIYOTAKE Yuji　特任助教（2015.2～2022.3）

【学歴】上智大学文学部史学科卒業（1989），國學院大學大学院文学研究科修士課程修了（1995），國學院大學大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学（1999）【職歴】関東学院大学法学部非常勤講師（2001.4～），國學院大學文学部兼任講師（2004.4～），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部特任助教（2015.2～2022.3），人間文化研究機構推進センター研究員，併任国立歴史民俗博物館研究部特任助教（2018.2～2022.3）【学位】修士（歴史学）（國學院大學1995）【専門分野】日本古代史【主な研究テーマ】律令国家の形成と地域社会【所属学会】国史学会【研究目的・研究状況】律令期の食資源に関する貢納体制を加工・調理技術・労働力編成・運搬・保管という視点から検証し，古代国家と地域社会の歴史的関係性の究明を試みる。

●主要業績

１．【著書】「アワビと古代国家　『延喜式』にみる食材の生産と管理（ブックレット〈書物をひらく〉24）」（平凡社，2021年）（単著）
２．【論文】「律令法上の園地規定と班田制」（『國學院雑誌』第114巻５号，pp.35-50，2013年５月）（査読有）
３．【論文】「井上薬師堂遺跡出土木簡の再検討」（『上岩田遺跡調査概報』小郡市文化財調査報告書第142集，pp.62-77，2000年３月）（共著者：平川南・三上喜孝・田中史生）
４．【論文】「藤原部の研究」（『史学研究集録』第22号，pp.5-28，1997年３月）
５．【研究ノート】「古代における長鰒（熨斗鰒）製造法の研究―加工実験・成分分析による実態的考察―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』209，pp.19-41，2018年３月）（査読有）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

２　論文

共著：小風尚樹・中村悟・永崎研宣・渡辺美紗子・戸村美月・小風綾乃・清武雄二・後藤真・小倉慈司「相互運用性を高めた日本歴史資料データ実装：『延喜式』TEI と IIIF を事例として」『じんもんこん2021年論文集』218，人文科学とコンピュータ研究会，pp.294-301，2021年12月27日（査読有）

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

③　機構

広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」（主導機関：国文学研究資料館），「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」（研究代表者：小倉慈司）共同研究員・推進センター研究員，2016～2021年度

４　主な展示・資料活動

歴博モバイルミュージアム「古代国家とアワビ　『延喜式』にみる生産と貢納」，人間文化研究機構　可視化・高度化事業関連展示「地域社会との連携による展示実践―人間文化研究の可視化・高度化―」，2022年１月18日～２月13日，国立歴史民俗博物館企画展示室Ｂ

５　教育

関東学院大学法学部非常勤講師（日本史１，日本史２）

國學院大学文学部兼任講師（史学専門講義（日本史）：６・７世紀の王権と社会，史学基礎演習Ⅰ：出土文字資料からみた日本の古代）

総研大文化科学研究科共通科目「総合書物論」授業担当講師（第11回「『延喜式』と諸国の物産」，第12回「『延喜式』にみえる水産加工食品」）

三　社会活動等

２　講演・カルチャーセンターなど

「『延喜式』にみる野菜・果物」，くらしの植物苑観察会273回，国立歴史民俗博物館くらしの植物苑，2021年12月18日

「「鮨鰒」が伝える食文化と古代日本史～平安時代の行政マニュアル『延喜式』を読み解く～」，大手町アカデミア×人間文化研究機構，2022年２月21日，オンライン（YouTube）

３　マスコミ

「大手町アカデミア×人間文化研究機構　講演要旨「鮨鰒」が伝える食文化と古代日本史～平安時代の行政マニュアル『延喜式』を読み解く～」，読売新聞オンライン，2022年３月10日，オンライン，
https://www.yomiuri.co.jp/culture/academia/20220307-OYT８T50041/

四　活動報告

４　その他

国文学研究資料館が主催する広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」第２回シンポジウム「総合書物学の現在」にて，12月26日（日）に「『延喜式』にみえる水産加工食品の多分野協働研究」と題した口頭発表を行った。

「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」の活動の一環として，古代土器シンポジウム「器名・器形・用途・貢納～正倉院文書・延喜式にみえる土器～」を企画し，2022年３月19日（土）にオンラインにて開催した。同シンポジウムでは個別報告の司会とともに自らも「延喜主計式記載の土器イラスト制作活動報告」と題した口頭発表を行った。

また、昨年度から継続して古代の税物であるアワビのなれ鮨の研究を行った。2021年度は，『延喜式』に記載された供御のなれ鮨の材料比率に着目した製造実験を実施している。『延喜式』記載の供御のなれ鮨の材料比率は，昨年度までに判明している長期保存を前提とした調のなれ鮨と比較すると漬け込み用の米の量が極端に少ない。その要因については，供御のなれ鮨が消費のサイクルにあわせて具材のみを進上するため，調のなれ鮨とは異なり長期保存用の漬け込み米飯を含めての貢納が必要ではないから，と想定した。この場合，漬け込んだ米飯はそのまま次回分に継続使用が可能となるので，記載された材料の米は目減り分を追い足すための

漬け込み米飯分と仮定して，その検証のために追い足し製法によるなれ鮨の製造実験を行った。その結果，同製法でもなれ鮨製造が十分に可能なこと，同実験の前後で実施した成分分析と乳酸菌優占種の同定検査の結果によって優占種となる乳酸菌種が常に同種で安定することも判明した。なお，同研究に際しては，学術協力協定を締結した味の素株式会社食品研究所との協力関係に基づいて随時意見交換の場を設け，同研究所と実験・成分分析等の方針を検討した上で推進している。

この他，準備中の「聆涛閣集古帖」に関する企画展示の展示プロジェクト委員（代表者：三上喜孝）として，その準備活動に参加している。

久留島　浩　KURUSHIMA Hiroshi　特任教授（2020.4～）

生年：1954

【学歴】東京大学文学部第二類（国史学）国史学科（1977年卒業），東京大学大学院人文科学研究科国史学専門課程修士課程（1980年修了），東京大学大学院人文科学研究科国史学専門課程博士課程（1983年単位取得退学）
【職歴】東京大学文学部助手（1983），千葉大学教育学部講師（1985），千葉大学教育学部助教授（1987），国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授（1998），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻助教授併任（1999），国立歴史民俗博物館歴史研究部教授（2003），総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授（2004），国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任（2004～2019），歴史資料センター長併任（2006～2007），博物館資源センター長併任（2007～2009），副館長（館外担当）併任（2010～2012），館長（2014～2019）
【学位】文学博士（東京大学・2002年取得）【専門分野】日本近世史【主な研究テーマ】日本近世後期の地域社会の歴史的性格についての研究，近世社会における儀式・儀礼・祭礼の研究，歴史系博物館の教育プログラムに関する研究【所属学会】歴史学研究会，史学会，日本史研究会，地方史研究会
【メールアドレス】kurushima@rekihaku.ac.jp

●主要業績

1．【編著】久留島浩編『シリーズ近世の身分的周縁５　支配をささえる人々』272頁，吉川弘文館，2000年９月
2．【単著】久留島浩著『近世幕領の行政と組合村』416頁，東京大学出版会，2002年８月
3．【編著】久留島浩編『描かれた行列　武士・異国・祭礼』392頁，東京大学出版会，2015年10月
4．【企画展示】平成24年度国立歴史民俗博物館企画展『行列にみる近世―武士と異国と祭礼と―』2012年10月～12月
5．【学会・外部研究会報告】国際シンポジウム　久留島浩「国立歴史民俗博物館における博物館教育の試み」（歴博国際シンポジウム『歴史展示を考える―民族・戦争・教育』354頁　※同名の報告書刊行：UM BOOKS，2004年12月）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

1　著書
「The Background to Japan's Modernization：What Made the Meiji Restoration Possible?」『Revisiting Japan's Restoration：New Approaches to the Study of the Meiji Transformation（Routledge Studies in the Modern History of Asia）』Routledge，pp.257-264，2021年11月30日（査読有）
「砂を盛ること･砂を蒔くこと―江戸時代の「馳走」（おもてなし）との関わりで―」国立歴史民俗博物館編『〈洗う〉文化史　「きれい」とは何か』吉川弘文館，pp.134-164，2022年２月20日

5　学会・外部研究会発表
歴博国際シンポジウム「シーボルト（父）関連資料の基礎的な調査･研究･活用事業で考えたこと―新しいシーボルト研究への誘い―」オンライン・国際シンポジウム「新しいシーボルト研究への誘い―シーボルト（父）関連資料の基礎的な調査・研究・活用事業で考えたこと―」2022年１月15日

7　その他
「書評　熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫草書　細川家文書　地域行政編』」『永青文庫研究』５，pp.71-83，熊本大学永青文庫研究センター，2022年３月28日

「総合資料学の６年間をふりかえって」国立歴史民俗博物館メタ資料学研究センター，『総合資料学ニューズレター』12，pp.2-7，2022年３月30日
「オンライン国際シンポジウムExhibiting "Japan" Overseas 海外で《日本》を展示すること―海外のコンテクストと日本のコンテクスト　コメント」国立歴史民俗博物館メタ資料学研究センター『海外で《日本》を展示すること　在外資料調査研究プロジェクト報告書』pp.119-201，2022年３月31日
「オンライン国際シンポジウム　新しいシーボルト研究への誘い―シーボルト（父）関連資料の基礎的な調査・研究・活用事業で考えたこと―　趣旨説明」国立歴史民俗博物館メタ資料学研究センター『海外で《日本》を展示すること　在外資料調査研究プロジェクト報告書』pp.299-302，2022年３月31日
「鯰絵のなかの「世直し」」特集展示図録『黄雀文庫所蔵　鯰絵のイマジネーション』，国立歴史民俗博物館，pp.96-99，2021年７月13日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

③　機構

ネットワーク型基幹研究プロジェクト「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」

2　外部資金による研究

科学研究費基盤C「近代北海道におけるアイヌ民族と地域社会―有珠郡・幌別郡を中心に―」（研究代表者：千葉大学　檜皮瑞樹）研究分担者，2018～2022年度
科学研究費基盤B「「熊本藩関係貴重資料群」の総合的解析による日本近世の意思決定構造の実証的研究」（研究代表者：熊本大学　今村直樹）研究分担者，2019～2022年度
オンライン研究会口頭発表「わたしはなぜ組合村―惣代庄屋にこだわったのか？―今村科研に参加させていただこうと思った理由を含めて―」2021年９月25日
科学研究費基盤B「日韓の歴史教科書及び博物館歴史展示における日本による植民地期関係記述の比較研究」（研究代表：学習院大学　梅野正信）研究分担者，2019～2022年度
科学研費基盤B「石見銀山附幕領における銀山･銅山･鉄山―非農業世界からみた「幕領社会」論の構築―」（代表：京都大学　岩城卓二），研究分担者，2021～2025年度

3　国際交流事業

「Deciphering Japanese：Reading the Early Modern Catfish Print」『日本語を解読する―近世の鯰絵絵画を読む』チューリッヒ大学，スイス連邦，2021年９月23日（英語）
「The Great Ansei-Edo Earthquake and the Catfish Prints-A few things we need to know from the start-」『日本語を解読する―近世の鯰絵絵画を読む』チューリッヒ大学，スイス連邦，2021年10月７日（英語）
「Catfish Prints：Showing the Fear of Earthquakes and Their Functions as a Talisman」『日本語を解読する―近世の鯰絵絵画を読む』チューリッヒ大学，スイス連邦，2021年10月28日（英語）
「Catfish Prints: Moving from "Let's Punish the Catfish!" to "Laugh with the Catfish, Play with the Catfish」『日本語を解読する―近世の鯰絵絵画を読む』チューリッヒ大学，スイス連邦，2021年11月４日（英語）
「Catfish Prints：People Who Lost and People Who Gained.」『日本語を解読する―近世の鯰絵絵画を読む』チューリッヒ大学，スイス連邦，2021年11月18日（英語）
「Catfish Prints and the Wish to Change the World（Rectify the World）」『日本語を解読する―近世の鯰絵絵画を読む』チューリッヒ大学，スイス連邦，2021年12月２日（英語）
「Conclusions」『日本語を解読する―近世の鯰絵絵画を読む』チューリッヒ大学，スイス連邦，2021年12月16日（英語）

5　教育

国際教養学研修プログラム（国内，千葉大学）Professional Studies at the National Museum of Japanese History，オンライン，2021年９月９日～2022年３月31日（英語）

三　社会活動等

1　館外における各種委員（学会，学術会議，文化庁・学振・自治体審議委員など）

千葉市史編集委員，日本銀行金融研究所貨幣博物館諮問委員，江戸東京博物館運営委員会委員，八千代市立郷土博物館協議会委員，千葉県生涯学習審議会委員，長野県立歴史館協議会委員，広島平和記念資料館運営会議

委員，地球システム・倫理学会常任理事，日本歴史学会評議員，千葉歴史・自然救済ネットワーク共同代表
3　マスコミ
「吉備を還る」山陽新聞，山陽新聞社，2022年１月６日
「コメント」「新年特集紙面「博物館にかけた夢　町田久成」」南日本新聞社，2022年１月４日
「「郷土の歩み」古文書守る」ちば資料救済ネット10年　歴史を紡ぐ（上），千葉日報社，2022年３月５日
4　社会連携
①　刊行物
「コラム【知る】「村に来る御師」」「コラム【知る】「犢橋村の村方騒動（稲干場一件）」」『千葉市歴史読本 史料で学ぶ千葉市の今むかし』千葉市，p.137・142，2022年３月

高科　真紀　TAKASHINA Maki　特任助教（2020.7～）

【学歴】東京学芸大学教育学部（2004-2008），東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程（2008-2010），学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程（2020年６月満期取得退学）
【職歴】国文学研究資料館機関研究員（2013-2015），国文学研究資料館プロジェクト研究員（2016-2017），学習院大学科研費研究員（2017），東京学芸大学非常勤講師（2017），日本学術振興会特別研究員DC２（2018-2019），人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員（2020.7-2022.3），人間文化研究機構人間文化研究創発センター研究員（2022.8-），国立歴史民俗博物館研究部特任助教（2020.7-）
【学位】修士（教育学）【専門分野】資料保存論，アーカイブズ学【主な研究テーマ】資料の保存環境管理，民間所在資料の保全と活用【所属学会】文化財保存修復学会，日本アーカイブズ学会，デジタルアーカイブ学会，アート・ドキュメンテーション学会

●主要業績
1．【著書（分担執筆）】“Preservation and Conservation of Japanese Archival Documents in the Vatican Library”, Mutsumi Aoki・Núñez Gaitán, Ángela編，（担当：分担執筆，範囲：pp.111-131：Introducing the Newest Salvage and Conservation Techniques Used after the 2011 Tohoku Earthquake and Tsunami），2019年12月，バチカン図書館
2．【論文】「収蔵庫を対象としたアーカイブズの照明管理―ISO・アメリカ・イギリス・日本の事例」，2019年２月，GCAS Report vol.8，pp.35-55
3．【論文】「和書の展示技法と保存環境制御の実践―「和書のさまざま」展を素材として―」，2015年３月，国文学研究資料館紀要 文学研究篇第41号，pp.111-134
4．【研究発表】“Case verification of the LED illumination at the museum in Japan”，2018年，LED Museum Lighting and Conservation Science 2018（LMLCS2018），Gyeongju Hwabaek International Convention Center（大韓民国）
5．【研究発表】“The latest Restoration Techniques in Japan”，2016年，International Council on Archives Congress 2016，COEX（大韓民国）

●2021年度の研究教育活動
一　研究業績
2　論文
「写真メディアを軸とした沖縄祭祀アーカイブズ：写真家・比嘉康雄資料を事例に」『アート・ドキュメンテーション研究』29，アート・ドキュメンテーション学会，2021年５月（査読有）
7　その他
「地域の記憶とアーカイブズ：民間所在資料調査の現場から」『REKIHAKU』４号，pp.84-86，国立歴史民俗博物館編，2021年10月

二　主な研究教育活動
1　主な共同研究等参加状況
③　機構
広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」（主

導機関：国立歴史民俗博物館，国立国語研究所），「地域における歴史文化研究拠点の構築」（2020年度～2021年度）

２　外部資金による研究

「民間所在アーカイブズにおける写真の公開･活用体制の構築―女性･子どもを記録した写真家を対象に―」（研究代表者：阿久津美紀），DNP文化振興財団グラフィック文化に関する学術研究助成（2019年11月～2022年12月），共同研究者

「〈沖縄経験〉を軸とした戦後沖縄写真に関する表象文化の発展的研究」（研究代表者：小屋敷琢己）日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究（C）（2020年４月～2024年３月），研究分担者

三　社会活動等

１　館外における各種委員

日本アーカイブズ学会　委員（研究部会）

２　講演・カルチャーセンターなど

「戦後沖縄写真史の再構築におけるアーカイブズの可能性」，復帰50年写真展へ向けた戦後沖縄写真史の再構築事業第５回研究会，オンライン，2022年１月30日

四　活動報告

［プロジェクト研究員］

青柳　正俊　AOYAGI Masatoshi　プロジェクト研究員（2019.4～）

【学歴】東京外国語大学外国語学部ドイツ語学科（1984年卒業）【職歴】新潟県庁（1984-1991，1994-2019），外務省（1991-1994）【最終学位】博士（文学）【専門分野】近代史【主な研究テーマ】明治初期の対外関係史･経済史，開港地としての新潟【所属学会】明治維新史学会，新潟史学会【研究目的・研究状況】

●主要業績

１．【著書】単著：青柳正俊『川港の岸辺で―新潟ドイツ領事ライスナーの軌跡』（152頁，2019年，新潟開港150周年記念「みなとまち新潟」研究助成対象事業）

２．【論文】青柳正俊「雑居地新潟に関する一考察―「外国人の居留地外居留問題」をめぐる展開」（『東北アジア研究』19号，pp.1-25，2016年，査読有）

３．【論文】青柳正俊「井上条約改正交渉期における新潟での外国人借地問題」（『新潟県立歴史博物館研究紀要』第17号，pp.120-99，2016年）

４．【論文】青柳正俊「「外圧」が捉えた新潟における通商司政策」（『東北アジア研究』20号，pp.1-44，2017年，査読有）

５．【論文】青柳正俊「明治三年・新潟通商司をめぐる騒動」（『新潟史学』第76号，pp.1-22，2018年，査読有）

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

２　論文

「北海道産物の流通統制から見た新潟通商司の経緯」『新潟史学』82，pp.1-22，新潟史学会，2021年12月29日（査読有）

「【史料】モーリッツ・ヴァーグナーによるフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトへの追悼文および死亡記事」ブルーノ・J・リヒツフェルト，ウド・バイライス，日高 薫：編『異文化を伝えた人々Ⅲ　シーボルトの日本博物館』臨川書店，pp.124-143，2022年３月31日

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

③　機構（基幹研究プロジェクト）

ネットワーク型基幹研究プロジェクト 日本関連在外資料調査研究・活用事業「ヨーロッパにおける19世紀

日本関連在外資料調査研究･活用―日本文化発信に向けた国際連携のモデル構築―」（研究代表:日高　薫），研究分担者

三　社会活動等

四　活動報告

賀　申杰　GA Shiketsu　プロジェクト研究員（2020.4～）

生年：1989

【学歴】中国人民大学歴史学部卒（2011），東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本史学修士課程修了（2015），東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本史学博士課程修了（2020）
【職歴】国立歴史民俗博物館プロジェクト研究員（2020）
【学位】文学博士（東京大学，2020年取得）
【専門分野】日本近代史
【主な研究テーマ】日本近代の造船業
【所属学会】史学会，軍事史学会，東アジア史学会
【研究目的・研究状況】メールアドレス：heshenjie@rekihaku.ac.jp

●主要業績

・　論文
「明治後期の川崎造船所における外国発注艦建造問題に関する一考察」，『史学雑誌』126編７号，2017年７月
「大正九年以降における臣籍降下基準の沿革に関する一考察：降下した皇族の待遇問題を中心に」，『東京大学日本史学研究室紀要』22巻，2018年３月
「明治末期日本企業的艦船輸出」（李福鐘，若林正丈，川島真等編『跨域青年學者台灣與東亞近代史研究論集第二輯』稲鄉出版社（台灣）2017年）
「日清戦争以前の外国船修理問題：東京石川島造船所を中心に」，『東京大学日本史学研究室紀要』24巻，2020年３月
・　学会・外部研究会発表
「明治終期における民間造船企業の艦艇輸出活動」，2015年第113回史学会大会報告

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

５　学会・外部研究会発表
賀　申杰，袁　甲幸，康　昊「亲历与被遗忘的现代」清華大学東アジア文化講座　青年工作坊第２期ワークショップ，北京・清華大学，中華人民共和国，中国語，2021年９月７日（招待）
賀　申杰，張　秩「日本近代百年奥运之路」2020奥运观察志，上海，中華人民共和国，中国語，2021年７月28日

川邊　咲子　KAWABE Sakiko　プロジェクト研究員（2019.5～2022.3）

生年：1989

【学歴】金沢大学人間社会学域人文学類卒業（2013），金沢大学大学院人間社会環境研究科地域創造学専攻（博士前期課程）修了（2016），金沢大学大学院人間社会環境研究科人間社会環境学専攻（博士後期課程）修了（2021）
【職歴】日本学術振興会特別研究員DC２（2018.４～2019.５）人間文化研究機構国立歴史民俗博物館プロジェクト研究員（2019.５-2022.３）
【学位】博士（学術）【専門分野】文化資源学，物質文化学【主な研究テーマ】地域民具コレクションに見る人とモノとの関係性【所属学会】日本民具学会，文化資源学会，北陸人類学研究会（日本文化人類学会北陸地区研究懇談

会）【研究目的・研究状況】石川県能登半島とフィリピン・イフガオ州をフィールドに，地域の民具コレクションについての調査・研究を行ってきた。民具そのものというよりも，人々がそうした過去から残されたモノを集めて残そうとするその活動自体に注目し，背景にあるモノと人，記憶との関係について研究・調査を行っている。
地域においてこれまで収集・保存された民具は，物だけが残り情報が残されていないために学術資料や地域文化資源としての価値が低く，資料館等の収蔵庫や廃校舎等に死蔵され，消失の危機にあるものも少なくない。そうした現状において，民具が研究や博物館活動だけでなく地域活動や日常生活の営みにも役立つような文化資源となるには，どのような情報を記録･蓄積し，いかなる方法で活用･共有していくのが望ましいかを考えていく必要がある。そうしたモノと情報の蓄積・共有のあり方、方法について考察を行っている。

●主要業績

論文

1．Kawabe, S.「Everyday Object Collections Formed by Collectors and Contributors in the Local Living Context： An investigation on background of the collecting and functions of collected objects in the Noto Peninsula, Japan and Ifugao Province, Philippines」（博士学位論文）金沢大学大学院人間社会環境研究科，2021年３月22日
2．川邊咲子（2018）「「集合的記憶」を支える民具：民具の来歴の記録データが残されない原因についての一考」『月刊考古学ジャーナル』ニューサイエンス社 718号：pp50-53，2018年10月
3．川邊咲子，香坂玲，松岡光，内山愉太（2017）「能登半島の事例にみる農具の再利用とストック～静的な「遺物」から動的な「生きた遺産」へ～」『エコミュージアム研究』日本エコミュージアム研究会 21号：pp40-48（査読あり）2016年12月

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

2　論文

Kawabe, S.「Formation of an Everyday Object Collection through the Perspectives of an Ifugao Indigenous Community's Collector and Contributors」『The Cordillera Review： A Journal of Philippine Culture and Society』Cordillera Studies Center, University Of The Philippines，フィリピン共和国（査読有）

5　学会・外部研究会発表

川邊咲子「能登における地域民具コレクションの「緩やかな保存」」能登の里山里海学会2021, 石川県珠洲市，2021年12月４日

川邊咲子「能登地域における地域民具コレクションの「緩やかな保存」と情報の記録・共有」能登における地域・大学間協働に関する研究会第４回オンライン会合，2021年11月30日

川邊咲子「地域民具コレクションの経緯、現状と課題：能登地域を事例に」進化経済学会 観光学研究部会 第46回研究会，2021年６月16日，オンライン

川邊咲子「CIDOC CRM を用いた民俗資料のオブジェクト・バイオグラフィーの記録」第117回デジタルアーカイブサロン，2021年４月９日，オンライン

7　その他

川邊咲子「民具」『地域歴史文化継承ガイドブック』文学通信，pp.46-53，2022年３月２日

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況

①　歴博

基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」(研究代表：後藤真)

Kawabe, S.「Challenges of digital archives of everyday objects in Japan」2021年度総合資料学人文情報ユニットシンポジウム with バンドン工科大学，2021年12月16日，オンライン

三　社会活動等

4　社会連携

①　刊行物

川村　清志，川邊　咲子「民具解説」『スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」』奥能登国際芸術祭実行委員会，現代企画室（発売），pp.54-65，2021年12月８日

川邊咲子「海辺の農家―田畑の耕作とその他の生業」「港町の商店―船員たちが集う店」「１　保存と活用の立場から 「珠洲の大蔵ざらえプロジェクト」における民具資料の“緩やかな保存”の可能性と展望」『スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」』奥能登国際芸術祭実行委員会，現代企画室（発売），pp.87-89，pp.92-93，pp.95-96，2021年12月８日

②　講演会・シンポジウム

川邊咲子「奥州市所蔵民具のメタデータ照合の試みと公開」『令和３年度奥州市地域史研究講座第２回』岩手県奥州市，オンライン，2022年１月27日

川邊咲子「「珠洲の大蔵ざらえ」プロジェクトにおける民具資料の”緩やかな保存”の可能性と展望」奥能登国際芸術祭2020+スズ・シアター・ミュージアム設立シンポジウム，石川県珠洲市，2021年７月15日

５　国際連携

③　その他

Kawabe, S.「Subjects and Methods of Studies on Culture」Ifugao Satoyama Meister Training Program – Phase 3： Training on Heritage, Sustainable Tourism, Conservation Advocacy, and Research Methods and Methodologies for Ifugao Rice Terraces / Indigenous Studies，フィリピン共和国，オンライン，2021年６月30日

四　活動報告

３　研究・調査プロジェクト報告

①　機関拠点型基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」

今年度も引き続き新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により，館外での調査研究活動や国内外の学会，集会等の現地での開催・参加が制限される状況であったが，プロジェクトの３つの研究ユニット「人文情報ユニット」「異分野連携ユニット」「地域連携･教育ユニット」による研究会を，各二回以上，zoomを使ったオンラインまたはハイブリット形式で開催した。合同会社AMANEと共同で開催した「学術野営2021 in 奥州市リベンジ」では，３つのセッションを設け歴史文化資料の今後の保存・継承に係る課題について議論することができた。

合同会社AMANEと奥州市との産学官連携協定に基づいた地域資料継承支援事業として，昨年度に引き続き岩手県奥州市において歴史資料等調査記録事業を行った。また，今年度同じく産学官連携協定を締結した石川県輪島市，富山県高岡市においても同事業を開始させた。また，奥州市が保管する旧水沢民俗資料館の民具資料については，現物の資料だけでなく，過去に作成された台帳や資料カードなどの付随資料やメタデータについても現物資料との照合作業を行い，公開の可能性についての検討を行った。その成果を令和３年度奥州市地域史研究講座第2回にて報告し，自治体関係者や市民に対して成果を共有することができた。

プロジェクトの国際的な展開としては，昨年度包括連携協定を締結したバンドン工科大学との人文情報ユニットシンポジウム（オンライン）の開催や，CIDOC CRM の日本語訳プロジェクトとGetty Vocabularies の日本語訳プロジェクトの推進が挙げられる。また，AAS2022 Annual Conferenceにオンライン参加し，Digital Technology Roundtableのセッションを開催した。

②　科学研究費 基盤研究（C）「地域民具コレクションの整理手順のモデル化と緩やかな保存についての実践的研究」

今年度は３つの研究対象地域において，主に民具資料の状態や保存・活用環境の把握，資料の情報・データや関連情報の収集（文献調査，聞き取り調査等）に取り組んだ。

石川県珠洲市においては９月～11月に開催された奥能登国際芸術祭の準備期間に民具資料の情報・データの収集・整理，展示やアート作品に用いられる民具の記録，資料展示の作成を集中的に行った。芸術祭閉幕後にもミュージアムの今後の運営や収集資料の保存・活用についての打ち合わせやアート作品で使われた民具の情報収集・記録等を進めた。また，珠洲市で開催された芸術祭のシンポジウムや学会等で本研究の意義や内容について市民や地域の関係者に対し共有することができた。

石川県輪島市においては，研究対象とした旧市立民俗資料館の民具コレクションが個人宅に収蔵されているため，新型コロナウイルス感染症の感染状況が落ち着いた11月に現地調査を実施した。対象となる民具の全体的な現状を把握し，約７割の資料についてデータ（主に法量や状態についてのデータと画像データ）を記録することができた。また，今後のデータ公開や民具の保存・活用方法について関係者と話し合い方向性

を定めた。

岩手県奥州市においては，市の教育委員会や関連施設の担当者らからの協力を得て市域内の民具コレクション全容把握調査（現物資料と既存の記録情報について）を次年度以降実施することを計画している。また，７月に学術野営 2021を開催し，等研究課題からは「地域における資料継承の現実と展望～民具資料の“緩やかな保存”の可能性」というテーマでセッションを設けた。資料のモノと情報について，何をどこまでどうやって残すのかといった課題等について，研究者や地域の自治体職員，資料館職員等と活発な意見交換を行うことができた。

全体を通し，資料の情報やデータを把握，記録し，事例ごとに異なる民具の保存・活用に向けた課題について把握・検討することができた。

瀧上　舞　TAKIGAMI Mai　プロジェクト研究員（2018.11～2021.11）

【学歴】名古屋大学理学部卒業（2007年３月），東京大学新領域創成科学研究科先端生命科学専攻修士課程修了（2009年３月），東京大学新領域創成科学研究科先端生命科学専攻博士課程単位取得退学（2012年３月），同上修了（2015年３月）

【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC１）（2009年４月－2012年３月），日本学術振興会特別研究員（PD）（2011年４月－2015年３月），山形大学学術研究員（2015年４月－2022年３月），山形大学プロジェクト教員（講師）（2018年７月－現在），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部プロジェクト研究員（2018年11月－2021年.11月），独立行政法人国立科学博物館（2021年12月－現在）

【学位】博士（生命科学）（東京大学）（2015年３月取得）【専門分野】生物考古学，文化財科学，同位体生態学，人類学【主な研究テーマ】アンデス地域におけるラクダ科動物飼育とトウモロコシ栽培の伝播と利用変遷の研究，先史日本における古人骨の年代学的研究【所属学会】文化財科学会，古代アメリカ学会，人類学会，Society for American Archaeology【研究目的・研究状況・メールアドレス】人類の多様な環境への適応と社会発展との関連性について探求している。特に，生物考古学資料を用いた同位体生態学的調査により食物資源の獲得戦略の変遷に注目している。

●主要業績

1．【論文】Mai Takigami, Kazuhiro Uzawa, Yuji Seki, Daniel Morales Chocano & Minoru Yoneda,“Isotopic Evidence for Camelid Husbandry During the Formative Period at the Pacopampa Site, Peru.”，Environmental Archaeology, 25（３），pp.262-278，2020. DOI：10.1080/14614103.2019.1586091.（査読有）

2．【論文】瀧上舞，“アンデス文明における食性変化―ナスカ地域の事例より―”，古代文化，公益財団法人古代学協会，第69巻第１号，pp.73-83，2017年（査読有）

3．【論文】Mai Takigami, Izumi Shimada, Rafael Segura, Hiroyuki Matsuzaki, Fuyuki Tokanai, Kazuhiro Kato, Hitoshi Mukai, Omori Takayuki and Minoru Yoneda,“Assessing the Chronology and Rewrapping of Funerary Bundles at the pre-Hispanic Religious Center of Pachacamac, Peru.”, Latin American Antiquity, vol. 25（３），pp.322-343，2014.（査読有）

4．【著書（分担・共著）】瀧上舞・米田穣，「食料へのアクセスと権力生成」，関雄二（編）『アンデス文明―神殿から読み取る権力の世界』，臨川書店，pp.291-317，2017年

5．【著書（分担・共著）】瀧上舞・米田穣，「ナスカ砂漠に生たる人々と食性の変化」，青山和夫・米延仁志・坂井正人・高宮広土（編）『文明の盛衰と環境変動 ―マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像―』，岩波書店，pp.157-171，2014年

●2021年度の研究教育活動

一　研究業績

２　論文

Mai Takigami, Seki Yuji, Tomohito Nagaoka, Kazuhiro Uzawa, Daniel Morales Chocano, Hitoshi Mukai and Minoru Yoneda, 2021, ”Isotopic Study of Maize Exploitation During the Formative Period at Pacopampa, Peru.”, Anthropological Science, vol.129（２）, pp.121-132，2021年７月22日（査読有）

３　調査・発掘調査報告書，自治体史・史料集，辞典など

神澤秀明・角田恒雄・瀧上舞・坂本稔・藤尾慎一郎・安達登・篠田謙一（2022）「第３節　福岡県行橋市長い

遺跡出土弥生人骨のミトコンドリアDNA分析」行橋市教育委員会編：『市道長井浜公園１号線関係埋蔵文化財発掘調査報告―長井遺跡―』行橋市文化財調査報告書第68集、2022.5.13刊行予定

７　その他

山田康弘，木下尚子，瀧上舞，坂本稔，藤尾慎一郎，篠田謙一「熊本大学医学部所蔵縄文時代人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第234集，pp.121-147，2022年３月（査読有）

藤尾慎一郎，木下尚子，坂本稔，瀧上舞，篠田謙一「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集，pp. ３-14，2021年10月刊行（査読有）

濵田竜彦，瀧上舞，坂本稔「鳥取県内所在古墳群出土人骨の年代学的調査（１）」『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集，pp.127-143，2021年10月刊行（査読有）

竹中正巳，坂本稔，瀧上舞「鹿児島県西之表市田之脇遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集，pp.153-159，2021年10月刊行（査読有）

竹中正巳，坂本稔，瀧上舞「鹿児島県鹿屋市に所在する地下式横穴墓から出土した人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集，pp.161-167，2021年10月刊行（査読有）

竹中正巳，坂本稔，瀧上舞「鹿児島県西之表市小浜遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集，pp.169-173，2021年10月刊行（査読有）

竹中正巳，坂本稔，瀧上舞「鹿児島県南九州市高取遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集，pp.183-187，2021年10月刊行（査読有）

木下尚子，坂本稔，瀧上舞「沖縄貝塚時代の貝殻集積等出土貝殻の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集，pp.189-246，2021年10月刊行（査読有）

木下尚子，坂本稔，瀧上舞「沖縄貝塚時代出土人骨等の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集，pp.247-277，2021年10月刊行（査読有）

二　主な研究教育活動

１　主な共同研究等参加状況

③　機構

大学共同利用機関法人機構間連携研究「日本列島における人間･文化の起源とその発展に関する総合的研究」（研究代表者：斎藤成也，2018年度～2021年度）

２　外部資金による研究

科学研究費補助金（新学術）「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」（研究代表者：藤尾慎一郎，2018～2022年度）研究協力者

科学研究費補助金（若手）「古代アンデスの大型家畜利用の変遷とその社会的背景に関する生物考古学研究」（研究代表者：瀧上舞，2019～2022年度）

科学研究費補助金（基盤A）「社会的記憶の観点からみたアンデス文明史の再構築」（研究代表者：關雄二，2020～2023年度）研究分担者

科学研究費補助金（基盤B）「総合資料学にもとづく古代アンデス文明の社会統合の解明」（研究代表者：鵜澤和宏，2020～2023年度）研究分担者

三　社会活動等

四　活動報告

箱﨑　真隆　HAKOZAKI Masataka　プロジェクト研究員（2019.7～2022.3）

生年：1982

【学歴】福島大学教育学部生涯教育課程環境化学教育コース（2005年卒業），福島大学大学院教育学研究科教科教育専攻（2008年修了），東北大学大学院生命科学研究科生態システム生命科学専攻（2012年修了）

【職歴】国立大学法人名古屋大学年代測定総合研究センター研究員（2012），国立大学法人名古屋大学年代測定総合研究センター研究機関研究員（2014），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部特任助教（2019），同科研費支援研究員（2019.4～６），同プロジェクト研究員（2022）

【学位】博士（生命科学）（東北大学）（2012年取得）
【専門分野】年輪年代学，放射性炭素年代学，文化財科学，古生態学
【主な研究テーマ】北東アジアの木質文化財、災害由来の自然埋没木の高精度年代決定，年輪幅および酸素同位体比年輪年代法の長期標準年輪曲線の確立，炭素14年代法における北半球標準および日本版暦年較正曲線の基盤データの獲得
【所属学会】日本植生史学会，日本生態学会，日本文化財科学会，日本地球惑星科学連合，日本第四紀学会，日本AMS研究協会，日本「樹木年輪」研究会
【研究目的･研究状況】2010年代に日本で確立された酸素同位体比年輪年代法と炭素14スパイクマッチングにより，北東アジアの年輪年代測定の最大の障害となっていた「樹種の壁」が打ち破られた。これにより，様々な地域・時代の木質文化財，自然埋没木に誤差０年の年代情報の付与が可能となった。年輪酸素同位体比は気候（主に降水量）復元に，年輪炭素14濃度は太陽活動復元に応用できる。２つの新しい年輪年代法を駆使して，東北アジアの歴史事象と環境変動との関係を明らかにする。

●主要業績

1．【論文】Hakozaki M, Miyake F, Nakamura T, Kimura K, Masuda K, Okuno M, Verification of the annual dating of the 10th century Baitoushan Volcano eruption based on AD 774–775 carbon-14 spike, Radiocarbon, 60（1），pp.261-268. 2018.
2．【論文】Miyake F, Masuda K, Nakamura T, Kimura K, Hakozaki M, Jull T, Lange T, Cruz R, Panyushkina I, Baisan C, Salzer M, Search for annual carbon-14 excursions in the past, Radiocarbon, 59（2），pp.315-320，2017.
3．【論文】Hakozaki M, Kimura K, Tsuji S, Suzuki M，Tree-ring study of a late Holocene forest buried in the Ubuka Basin, southwestern Japan，IAWA Journal，33（3），pp.287-299，2012.
4．【論文】箱﨑真隆，樹木年輪の酸素同位体比に基づく環境変動復元の現在，考古学ジャーナル，743，pp.5-８，ニューサイエンス社，2020.
5．【論文】箱﨑真隆，酸素同位体比年輪年代法による韓国南部古代資料の高精度年代測定，国立歴史民俗博物館研究報告，231，pp.299-315，2022.

●2021年度の研究教育活動

2　論文
「酸素同位体比年輪年代法による韓国南部古代資料の高精度年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』231，国立歴史民俗博物館，pp.299-315，2022年２月25日（査読有）

5　学会・外部研究会発表
箱﨑真隆「樹木年輪が導く高精度年代研究の新時代」『第６回文理融合シンポジウム量子ビームで歴史を探る―加速器が紡ぐ文理融合の地平―』大阪大学，2022年１月８日
箱﨑真隆「酸素同位体比年輪年代法の標準年輪曲線の構築状況と北東アジアにおける年代測定事例について」2021年度「樹木年輪」研究会シンポジウム，2021年12月18日，オンライン（招待有）
箱﨑真隆，秋山綾子，木村勝彦，李貞，中塚武「酸素同位体比年輪年代法と炭素14年代法による福井城跡出土木材の高精度年代決定」日本文化財科学会第38回大会，2021年９月19日，オンライン
箱﨑真隆，能城修一，佐野雅規，木村勝彦，坂本稔，中塚武「静岡県裾野市茶畑山から発見された最終氷期の埋没木の樹種とAMS14C年代」日本第四紀学会・遠隔シンポジウム「陸域アーカイブから読む環境変遷と巨大災害：防災・減災に向けて」，2021年７月25日，オンライン

二　主な研究教育活動

1　主な共同研究等参加状況
①　歴博
機関拠点型基幹研究「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」（研究代表者：西谷大，2016～2021年度）
課題設定型共同研究「秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究」（研究代表者：下田誠，2021～2023年度）
③　機構
人間文化研究機構・ネットワーク型基幹研究プロジェクト・地域研究推進事業「北東アジアにおける地域構

造の変容：越境から考察する共生への道」（研究代表者：池谷和信，2016～2021年度）

2　外部資金による研究

科学研究費補助金（基盤A）「過去３万年の極端気候・極端災害史の精密編年に向けた新しい年輪年代法の基盤研究」（2020～2024年度）研究代表者

科学研究費補助金（基盤S）「過去１万年間の太陽活動」（研究代表者：三宅芙沙，2020～2024年度）研究分担者

科学研究費補助金（基盤S）「酸素同位体比年輪年代法の高精度化による日本列島の気候・生産・人口変動史の定量化」（研究代表者：中塚武，2021～2025年度）研究分担者

科学研究費補助金（挑戦的研究（萌芽））「宇宙線生成核種を用いたシュワーベサイクル検出手法の確立」（研究代表者：三宅芙沙，2020～2022年度）研究分担者

科学研究費補助金（基盤B）「東アジア産木材の年代決定と産地判別を可能にする年輪酸素同位体比データベースの構築」（研究代表者：佐野雅規，2020～2022年度）研究分担者

科学研究費補助金（新学術）「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」（研究代表者：藤尾慎一郎，2018～2022年度）研究協力者

科学研究費補助金（基盤B）「東アジア新石器文化の実年代体系化による環境変動と生業･社会変化過程の解明」（研究代表者：小林謙一，2018～2022年度）研究分担者

科学研究費補助金（挑戦的研究（萌芽））「高精度年代測定法の開発と適用可能な考古・歴史資料の拡大」（研究代表者：小林謙一，2019～2021年度）研究分担者

科学研究費補助金（基盤A）「単年輪14C測定による較正曲線の地域効果･微細構造の解明」（研究代表者：坂本稔，2018～2021年度）研究分担者

科学研究費補助金（基盤S）「年輪酸素同位体比を用いた日本列島における先史暦年代体系の再構築と気候変動影響評価」（研究代表者：中塚武，2017年度～2021年度）研究分担者

4　主な展示・資料活動

モバイル型展示ユニット「日本で生まれた新しい年代測定法「酸素同位体比年輪年代法」」（担当：箱﨑真隆），人間文化研究機構可視化・高度化事業関連展示「地域社会との連携による展示実践―人間文化研究の可視化・高度化―」（2022年１月18日－２月13日）

三　社会活動等

1　館外における各種委員

日本第四紀学会2020年度論文賞選考委員

2　講演・カルチャーセンターなど

箱﨑真隆，坂本稔，國分陽子，藤田奈津子，李貞，中塚武「岐阜県瑞浪市大湫町神明神社御神木の年代調査―年代測定の高度化に向けて―」大湫町神明大杉についての学術研究報告会，瑞浪市総合文化センター，2022年３月24日

四　活動報告

1　受賞歴

日本文化財科学会第15回ポスター賞，箱﨑真隆，秋山綾子，木村勝彦，李貞，中塚武「酸素同位体比年輪年代法と炭素14年代法による福井城跡出土木材の高精度年代決定」，2021年10月，日本文化財科学会